新妹の魔王
The Testament of Sister New Devil
契約者
テスタメント
V
上栖綴人
イラスト 大熊猫介
[ニトロプラス]
角川スニーカー文庫

新妹魔王の契約者
テスタメント V
The Testament of Sister New Devil

「そこを……退けえ！」

「くそっ――やるしかないのか！」

「――安らかに逝け、戦神の子よ」

「熱いの止まらな……ふぁあんっ」

「メゼストは刃更様のメイドです……その事を、たっぷりと教えて下さい」

東城 刃更
凪と万理亜の兄。特異能力、無次元の執行の使い手
成瀬 万理亜
刃更と凪を主従契約させた下の妹。ロリエロサキュバス
野中 柚希
幼馴染の刃更が好きな、勇者一族の少女
野中 胡桃
柚希の妹で、最近は刃更の家で生活している
東城 迅
刃更の父で、元最強の勇者
滝川 八尋（ラース）
刃更達のクラスメイトだが、正体は凪を監視する魔族
ルキア
万理亜の姉で、ラムサスに仕える魔族
ラムサス
先代魔王亡き後に穏健派を束ねる魔族。凪の伯父にあたる
レオハルト
穏健派と対立関係にある現魔王
成瀬 澪
先代魔王の娘で、刃更の妹になった少女

新妹魔王の契約者（テスタメント）Ⅴ

上栖綴人

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

プロローグ　旅立ちはクリスマスの夜に
第1章　こうやって君と魔界で
第2章　絡み合う思惑の中で
第3章　新たなる主従契約
第4章　吹き抜ける戦場の風の中を
エピローグ　死闘と再会の果てに
あとがき

『戦争』なんてズルイ言い方は絶対にさせない。
そんな便利な言葉で、みんなの苦しみを正当化しないで。

プロローグ　旅立ちはクリスマスの夜に

1

『魔界』と呼ばれる場所がある。

かつて神代だった頃に禁忌を犯して追放された者達が、異なる次元に構築した世界だ。

楽園を追われ、自分達を放逐した神族への復讐を誓った者達は、新たな世界で己の存在を神聖とは対極の存在へと変化させていった。

それが魔族である。

人間が暮らしている世界は、そんな魔族達が直接神界へと侵攻できないようにするために、緩衝と防衛の目的で神族によって作り出されたのだという。

そして――神族と魔族が互いに多大な被害を出した『第一次神魔大戦』の後、両勢力とも力を回復させるため、長い眠りを必要とした。

その眠りから覚めた後、神族達によって人間という生命体が作られた。やがて彼らの

中で適性のある者にだけ力と加護が与えられ――魔族に対抗できる者達が生まれ始める。

神界へと攻め入るために再びやって来た魔族と戦い、この世界の平穏を守る力を持った者達。いつしか彼らはこう呼ばれるようになった――勇者の一族と。しかし、

……まあ、眉唾よね。

風呂上がりに、バスタオル姿のまま自分の部屋へ戻った澪は、扉を閉めながら思った。

勇者の一族の起源についてではない。神族や魔族、神界や魔界の成り立ちの方だ。

これから自分達は魔界へ行く訳だが、勇者の一族である刃更達や、それこそ魔界生まれの万理亜と違い、澪はずっとこの世界で普通の人間として生きてきた。

異能の存在や力を身を以て知りはしたが、それもまだ一年足らずの新米である。

よって、まだどこか信じられない物事が少なからずあって。

……だけど。

もしかしたら――この世界に存在する神話や伝承は、全てが作り話ではないのかもしれない。宇宙の起源や地球の誕生、人類の進化などについては学校などで教えられているが、たとえ科学で証明はできても、それが真実かどうか解らない事はあるのだから。

この世には科学で証明できないものがある事を、成瀬澪は知っている。
魔族や勇者の一族はいるし、魔法が存在する事も間違いないのだから。
――そして……月……五日の今宵。いよいよ澪達は出かける事になる。
万理亜の姉ルキアの手引きで、異界の地へと――魔界へと。

万理亜と同じく、穏健派に属する万理亜の姉ルキアが東城家を訪れ、魔界へ来るように通告してきたのは、体育祭のあった日の晩――今からおよそ一ヶ月も前の事だ。
現魔王派との決戦が近付きつつある中、穏健派の中でも澪が受け継いだウィルベルトの力を抽出すべきという意見の者達と、澪に新たな魔王となって貰いたい者達との間で意見がまとまらず、現在の澪の意思を確認したいのだという。
自分達は、日常の平穏を手にするために戦ってきたのだ。そのために魔界へ行く必要があるというのであれば構わない。何せ、敵のトップは現在の魔王なのだから。
とはいえ、澪達にもこちらでの生活が――学校がある。特に刃更が、長期間学校を休んだり、それこそ定期試験を休むような、自分達の日常をなおざりにされるのは困ると主張して。だから、向こうには……学期が終わるまで待って貰う事にしたのである。

「……っと、いけない」

澪はドレッサーの前に置かれた椅子に座ると、ドライヤーで髪を乾かし始めた。

わざわざ脱衣所から部屋に戻ってきたのは、きちんと着替えて身なりを整えるためだ。

現在、時刻は夜の十一時を回ったところ。あと一時間もすれば、万理亜の姉のルキアが澪達を迎えに来る事になっている。万理亜も柚希も胡桃も、それぞれ最後の準備を行なっているだろう――ただ一人、刃更を除いて。

終業式の後。澪が柚希と共に真っ直ぐに帰宅したのに対し、刃更だけは別行動を取った。生徒会メンバーによる、体育祭の打ち上げに参加する約束があるらしい。

――実行委員会そのものの打ち上げは、既に行なわれている。

例年の二倍近くに人員が膨れ上がった今年の体育祭実行委員会は、本来は参加しない筈の二年生が強引に委員会メンバーに加わるなど、準備段階から様々な問題を孕んできた。本番中には激しい暴風が吹く一幕もあり、機材の故障や破損といったトラブルも発生。それでも、そうした困難を乗り越えてどうにか体育祭は無事に終了した。そして後日、視聴覚室に実行委員が集まり、各部門長が活動報告をして委員会は無事解散。その場で生徒会が用意したジュースやお菓子で、細やかな打ち上げが行なわれた。澪や柚希も、刃更と共にこの打ち上げに参加している。同じクラスで実行委員を務めた、相川

志保や榊千佳も当然一緒だった。

……でも。

それで実行委員会から解放されて通常の学生生活へと戻る一般メンバーと違い、学校行事を司る生徒会メンバーは、全部門の活動報告のレポートに改めて眼を通し、体育祭全体の準備運営に問題がなかったかをチェック。反省点や改善点を洗い出し、来年度に活かせるよう、生徒会の活動記録としてまとめる仕事があった。よって、体育祭に携わった生徒会メンバーが残務を終えるのは、学期の最終日――即ち、十二月二五日まで掛かり、その日の晩に打ち上げが行なわれるのが恒例なのだという。

そして、体育祭実行委員会では生徒会の補佐を務めていた刃更は、特別にその打ち上げに招待されていた。澪達としては、できれば魔界へ行く直前の夕食は刃更と一緒に取りたかったが、刃更の付き合いを邪魔する事もしたくなかった。それに、

……昨夜のイブは、ちゃんと一緒に過ごす事ができたもの。

万理亜が料理の腕を振るい、澪達もそれを手伝った。奮発して七面鳥もオーブンで焼いたし、当然ケーキだって手作りだ。刃更も美味しいと言ってくれたし、皆で本当に楽しい時間を過ごす事ができた。まあ――食後に皆でくつろいでいた時に、万理亜が用意したゲームをやった結果、刃更以外の全員がいやらしいサンタクロースのコスプレを

させられた挙げ句、最終的にはたっぷりと刃更に屈服させられる羽目になったが。

「で、でも別におかしくないわよね？　だって、クリスマスだったんだし……」

昨夜は一年の中で、男女が最も結ばれる日のひとつだ。高校生は勿論、それこそ中学生にも共に夜を過ごした者達がいただろう。そんな中、力を失ってしまう可能性のある澪達は最後まで結ばれる事はしていない。そう考えると、むしろ澪達の方が健全といえる。

まあ、万理亜の好みでマニアックなプレイをさせられてしまうのが玉に瑕なのと――恐らく大多数のカップルは、澪達のような複数同時プレイはしていないだろうが。

……取り敢えず、来年のクリスマスのケーキはお店のものにしなくちゃね。

下手に手作りにしたら、また万理亜が生クリームやフルーツを確信犯的にたっぷり用意した挙げ句、澪達が美味しくデコレーションされてしまいかねない。それにしても、

……魔界、ね。

一体どんな場所なのだろう。あちらで生まれ育った万理亜を除いて、澪は勿論のこと、刃更はおろか柚希や胡桃も魔界へは行った事がないのだという。

勇者の一族が魔界へ赴いたりしていたのは、刃更達が生まれる前――かつて繰り広げられていた大戦が終わるまで。当時、大戦に参加して魔族から「戦神」と恐れられた

迅のような精鋭ともなると、かなり深くまで入り込んだ事もあったらしいが――ここ十五年程は大規模な衝突もないため、余計な刺激をして戦いの火種が生まれないよう、あちらへ行く事は基本的に禁止されているのだという。

当然ながら、澪にとっても初めての魔界だ。向かう前に汗を流して、身を引き締めておきたかった。それに気合いを入れるためにも、服装や格好もきちんとしたい。そのため食後にお風呂を用意してくれた万理亜は、澪に一番先に入るようにと勧めてくれたが、

「うん……」

やはり最後にして貰って良かった。のんびりと湯船に浸かれたお陰で、身体の芯まで温まる事ができている。澪はチェストから下着類を収納している段を引き出し、小さく畳んだ状態で並んでいるショーツを確認。その中から予め決めておいた色とデザインのものを取り出すと、バスタオルの結び目を解いた。

ぷるんと豊かな胸が最初に露わになり、そして裸の澪になった。軽く二つに畳んだバスタオルを椅子の背に掛けると、澪は片方ずつショーツに足を入れて引き上げる。

キュッとお尻を収めると、左右の足ぐりの後ろから両手の人差し指を入れ、上から下に、続いて下から上へと滑らせて食い込みを直すと、続いて澪が手を伸ばしたのはセットのブラだ。身体を前に倒し、慣れた手付きで胸をカップに収めながらホックを留める。

そのまま身体を起こして、両手で摑んでいたホックをグッと下げれば、サイドベルトの位置が定まり、裸の澪が下着に彩られる。スタンド式の姿見でその姿を確認した澪は、

「やっぱりちょっと過激かな……仕方ないけど」

そう呟き嘆息する。元から胸はかなり大きい方だったが、刃更と主従契約を結んで、いっぱい屈服させられるようになってから、さらにサイズが上がってしまった。こうなると可愛らしいデザインのものは少なく、あるのは地味で野暮ったいデザインのものか、海外製の扇情的なものばかりになってしまう。とはいえ主従契約の関係を深める事による戦闘力の強化や、たまにある呪いの解除のために刃更に服を脱がされる事もある。

刃更に見られる以上、できるだけ綺麗な自分を見て欲しいのはごく普通な乙女心だ。

「でも万理亜に上手く乗せられちゃってるわよね、絶対……」

こっちの方が刃更が喜んでくれると言われると、近頃の澪はどうにも弱い。

最近は柚希だけでなく、胡桃も一緒に東城家で生活しており、たまに澪達と一緒に胡桃まで刃更に屈服させられる事がある――というか、万理亜が巻き込んでいる訳だが――そんな時、二人の着けている下着はいつも可愛いデザインばかりなのだ。二人に負けないためには、澪としては攻めるしかない。

しかし――刃更と主従契約を結んでいる澪や柚希や、あの手の行為が大好物なサキュバスの万理亜はともかく、胡桃には刃更に屈服させられる必要はないし、澪達に付き合う義理も全くない筈なのだが、

……最近の胡桃ちゃん、多分あまり嫌がってないわよね。

もちろん、恥ずかしそうにしているし抵抗もしているが、必ず最後は刃更に身を任せている。だが、その理由は解っていた――柚希ほど露骨ではないが、胡桃も刃更に想いを寄せているのは明らかだからだ。他人の事は言えないが、澪も素直になるのが上手ではないため、だからこそ余計に解る。野中胡桃が、どれだけ東城刃更を好きなのかは。

おまけにゾルギアの一件以降は、万理亜も刃更に対して好意を抱いている節がある。

まあ――今のところは恋愛感情よりも、澪達をエロい状況へ追い込んで、サキュバスとしての本能を満たす事の方が楽しいみたいだが。そのせいか、

……このところ、胡桃ちゃんにベッタリよね。

万理亜の中では、胡桃に構う事がブームらしい。まあ澪達が学校に行っている間、基本的に二人は一緒だ。打ち解けてもおかしくはないし、仲良くなる事は悪い事じゃない。

一緒に出かけたりもしているみたいだが、二人は澪や柚希には詳しい事を教えてくれない。まあ最近よく二人で風呂に入っているが、毎度のように浴室から胡桃の嬌声が

聞こえてくるあたり、すっかり万理亜のオモチャにされているようだが。とはいえ姉である柚希も静観している辺り、年の近い友人が胡桃にできた事を良しとしているのだろう。

それと――この五年の間に少し姉妹関係がギクシャクしてしまっていたらしいのだが、万理亜に虐められて泣きついてくる胡桃が可愛いらしく、柚希としてはそんな胡桃を慰めている時に姉妹の絆を感じられて嬉しいらしい。

「……一度姉妹関係がこじれると、反動も強くて大変よね」

まあ澪としても、万理亜が楽しそうにしているのは嬉しい――隙あらばエロ展開へ持ち込もうとするあの癖だけは勘弁して欲しいが。そんな事を思っていると、

『――ただいま』

ふと階下から刃更の声が聞こえてきた。いけない――刃更が戻ってくるまでには、着替えを終えて、皆と一緒に下で待っているつもりだったのに。

澪は慌てて、壁に掛けておいた予備の制服に袖を通した。どういう格好で魔界へ行くか迷ったが、刃更や柚希と相談して制服で行く事にした。その方が、こちらの世界ではどんな立場でいて、どういう生活を送っているか理解して貰いやすいからだ。

とはいえ、約束の十一時まではまだ時間がある。刃更も風呂に入るかもしれないし、

下着だけ気合いを入れて、外見を疎かにしては本末転倒もいい所である。よって急ぎながらも決して支度の手は抜かず、澪は己を整えてゆく。

オーバータイプのニーソックスを穿き、左右の髪をそれぞれリボンでまとめたら、いつもの澪の完成だ。鏡の前でくるんと回り、どこにも問題がない事を確認すると、まずは外見が整い、続いて胸に軽く手を当てながら深呼吸を二度したら心の準備も整った。

そして部屋を出る前に室内の照明のスイッチに手を置くと、背後を振り返って部屋の中を見渡した。そこには、すっかり見慣れた光景があって、

「……」

眼の前の光景を決して忘れぬよう、成瀬澪は己の瞳に焼き付ける。

必ずまたここへ帰ってくると、その場所を見失わないと――そう心に誓いながら。

ルキアが東城家を訪れ、魔界へ来るようにと告げたあの日の晩から、色々な事を考える時間も、覚悟を決める時間もあった。

――歴代最強と謳われた、先代魔王ウィルベルトの力。

ゾルギアへの復讐を諦めはしたが、亡き父の力までなくなった訳ではない以上、澪の置かれている状況が解決した訳ではない。

だから――澪達は魔界へ行く事を決断したのだ。

……でも。

だからといって、不安や緊張をゼロにできた訳ではない。

穏健派と現魔王派――魔族の大勢力が、魔界の行く末すら左右するその力を巡ってぶつかり合っているこのタイミングで、澪があちらへ行くのだ。

魔界では、今までの比ではない試練や苦難が待ち受けている可能性は充分にある。

――だが、それは先代魔王のひとり娘として産まれた自分の宿命なのだろう。

そして――そんな澪の因縁と決断に、刃更達を巻き込むのだ。

ならばせめて出発の時くらいは、自分は毅然としていなくては。

刃更達は、澪が行きたくないのならば行かなくても良いとも言ってくれていた。

それでも最終的に行く事を決意したのは、他ならぬ澪自身なのだ。

全てを終わりにするために。受け継いでしまった力のせいで自分が狙われ――刃更達を巻き込んでしまう今の状況に終止符を打つために。だから、

「……行ってくるね」

誰にともなくそう呟くと、澪はゆっくりと照明を消して部屋の扉を閉めた。

その後は、もう振り返る事も立ち止まる事もしなかった。

ただ前だけを向いて、成瀬澪はゆっくりと階段を降りていった。

第1章　こうやって君と魔界で

1

そして十二時になると、ルキアは約束の時間通りに現れた。
リビングで待っていた刃更達の眼の前へ、空間を渡ってやってきたルキアは、
「お待たせしました……準備はよろしいですか？」
こちらに対し、明るい妹の万理亜とは正反対の、冷たい声音と表情で尋ねてくる。
「――大丈夫です。お願いします」
東城刃更は頷きを返した。この一ヶ月の間に、向こうへ行く準備は済ませてある。
万理亜を除き、刃更達が着ているのは学校の制服だ。胡桃も、先日の聖ヶ坂学園の体育祭へ来た時に着ていた制服をチョイスしている。柚希と胡桃は勇者の一族の戦闘衣装で行く事もできたが、無駄に魔族を刺激するような格好は避けるべきだと判断した。
今回の刃更達の立ち位置は、勇者の一族ではなく――澪の家族や友人なのだから。

着替えなど各種生活必需品の分量は、滞在期間の読めない海外旅行を想定。万理亜の話では、洗濯などは向こうで幾らでもできるという事だから問題はないだろう。刃更・柚希・胡桃の武器は、念じれば具現化できるため問題なし。ただし柚希と胡桃の二人は、医療薬などあちらで必要となる可能性の高い勇者の一族の補助アイテムを持ってゆく。

そのため、各自サイズこそ違えど刃更と澪がキャリーケース一つずつ、柚希と胡桃が二つずつとなった。万理亜に関しては、あちらにも私物があるため手荷物はなしだ。

「解りました。それでは参りましょう」

ルキアがそう言った瞬間、彼女の真横の空間に巨大な魔法陣が展開された。すると、徐々に魔法陣と宙の空間とが融合を始め、程なくして空間に真っ黒な穴が開く。

「凄い……」

その様子を見ていた胡桃が、小さな声で呟いた。

胡桃が驚くのも無理はない。本来、人間が魔界へ行くには幾つかの条件をクリアする必要があるのだ。人より高位の存在である魔族が、高位次元にある魔界から下位次元に存在するこの人間界へ次元を繋ぐルートを構築するのと、下位の存在である人間が上位世界である魔界へと向かうのとでは、まるで原理が違うからである。

その一つが、この世界と魔界との次元が僅かに重なり、空間に不安定ながらも接点が

生じる自然現象――魔界との『次元境界』を使用する事である。日本にも次元境界が生じるポイントはあるが、そこは勇者の一族の《里》が厳重に管理しており、許可のない――それこそ追放された身である刃更や、魔族の血を引く澪が使う事は断じて許されない。澪達と同居を始めてすぐに迅がドバイへ行くと言い出し、後から魔界へ向かっていた事が判明した事があったが、恐らく迅が使用したのは海外の次元境界だろう。

……親父は顔が広いからな。

日本の勇者の里からは追放されてしまっているが、大戦の英雄である迅は海外の勇者の一族にも色々と顔が利く。どこかしらのツテを使用して魔界へと渡ったのだろう。

そして今、ルキアは魔族の身でありながら、人間である刃更達でも通れる次元境界を構築してみせた。空間の接続面の安定も完璧だ。ルキアの実力がいかに高いかが窺える。

……穏健派のトップの右腕って話だから、相当な力の持ち主だとは思っていたけど。

勇者の一族の中には、結界の構築など空間系の術が得意な者もいるが、ここまで完璧に空間や次元を安定させたものを刃更は見た事がない。無論、結界や空間の構築が上手いだけで戦闘力が高いとは限らないが。すると、

「驚く程の事はありません。澪様は魔族の血を引いておられますし、刃更殿は魔剣の使

い手。胡桃殿が使役している精霊の中には魔界と縁のある存在もいます。その魔の波動を利用すれば、貴方達が通る次元境界を構築する事はさほど難しくはありませんから」

と、こちらの驚きを見透かしたようにルキアが言った。

「……なら私は？　私の『咲耶』には魔の波動はない筈」

「――確かに、柚希殿の霊刀には魔の波動はありません」

柚希の問い掛けに、ルキアは静かに頷いて、

「ですから、柚希殿ご自身の中にある魔の波動を利用させていただきました」

「私の中の……？」

「刃更さんとの主従契約の波動です。柚希さんも澪さまも、刃更さんと私の魔力で結ばれていますから」

眉を顰めた柚希に、主従契約の媒介を行なった張本人の万理亜が教えた。

「なので、たとえ澪さまが魔族の血を引いていなくても問題ありません。胡桃さんも、たとえ魔属性の精霊を使役していなかったとしても、ここのところ私がたっぷりとサキュバスの洗礼を浴びせていますからね。姉さまの次元境界を通る事は可能な筈です」

「っ……そ、それじゃあ、あたしのためにああいう事を？」

顔を赤くした胡桃がゴニョゴニョと問うと、万理亜はニッコリと笑って、

「いいえ。あれは単にサキュバスの本能が疼いてムラムラした時に、つい胡桃さんの事を私の性欲のはけ口にしているだけです」
「ばっ、馬鹿じゃないのっ!?　何であたしが、アンタの性欲処理に付き合わなきゃいけないワケっ!?」
「く、胡桃ちゃん落ち着いて。万理亜に乗せられると、色々ドツボっちゃうから」
「っ……お姉ぇ～」
澪の指摘を受けて、胡桃が柚希に泣きつくと、柚希はよしよしと胡桃の頭を撫でた。
柚希のヤツ、満足げな顔して……お姉ちゃん風ビュービューだな。
「……」
そんなやりとりを、ルキアは微動だにせず見詰めていた。ただ立っているだけ――そんな何気ない所作にも、隙や乱れは微塵もない。おまけに、涼しい顔をして次元境界を保っている。外見的にも成体化した万理亜に近いし、もしかしたらS級クラスの実力の持ち主なのかもしれない。
「……何か？」
こちらの視線に気付いたルキアに、刃更は「いえ」と答えると澪達へと顔を向けた。
すると彼女達は刃更の意図を理解したのか、騒ぐのを止めて表情を真剣なものにする。

そんな四人に、東城刃更は静かな声で言った。
「――行くぞ」
その言葉に澪達は頷いて――そして刃更達は、次元境界の中へと足を踏み入れた。

2

周囲が深淵の闇に包まれ、途端に重力感が消失した。
まるで宇宙にでも来たかのような感覚。
――しかし、それも一瞬の事だ。
次の瞬間――刃更達は見知らぬ森の中に立っていた。甘い緑の匂いが仄かに香り、そよぐ風に木の枝が揺れる度に、柔らかな陽の光が地面へと差し込んでくる。
万理亜から聞いてはいたが、やはり日本とは時差があるらしい。
「ここは――」
「――オルドラの森です」
怪訝そうに呟いた刃更に、こちらを振り返ったルキアが言った――その瞬間、
「オルドラの森……ここがっ？」

胡桃が思わず身を固くして言った。すると澪がキョトンとして、
「知ってるの？」
「ああ。俺達が知っている魔界の地理は限られているけど――オルドラの森は有名だよ」
刃更達の知識は、先の大戦に参加した大人達によって教わったものだ。当時は穏健派が魔界の大半を掌握していたというが、現在はウィルベルトが死んだ事で急速に勢力を弱めているらしい。大戦が行なわれていた十五年前とでは、勢力図も様変わりしているのだろうが、それでもこの森がなくなる事はないだろう。何せ、
「――魔王ウィルベルトの城の最も近くにある森だからな」
穏健派に招かれた刃更達が降り立つには、比較的相応しい場所と言える。しかし、
「ルキア姉さま――どうして直接ウィルダート城に空間を繋げなかったのですか？」
万理亜が眉を顰めて問い掛けた。万理亜が口にしたのは、オルドラの森と同じく刃更達も名前だけはよく知っている、ウィルベルトが治めていた王城の名だ。
確かに、こちらは現在の穏健派のトップであるラムサスを始めとする高位魔族らに招待されたのだ。普通に考えれば、万理亜の言う通り直接彼らの城に出た方が話は早い。
「危機管理上の観点から、外部と城とを直接繋げる事はなるべく避けるべきとする判断

に基づいての事です。第三者に利用され、侵入を許す可能性もありますから」

「それはそうかもしれませんが、澪さまは現魔王派に狙われていて――」

「勿論、その事は承知しています。だからこそ城に近く、外部からも目立たぬようにと、空間を別次元と繋いでも周囲に気付かれにくいこの森を選んだのです」

なおも食い下がろうとする万理亜に、ルキアは表情を変える事なくそう言い放つと、

「ここから少し行った場所に馬車を用意しています――こちらへ」

そう言って、ひとりで先に森の向こうへと歩き出した。

「すみません、皆さん……」

申し訳なさそうに瞳を伏せる万理亜に、刃更はポンとその肩に手を置くと、

「別に万理亜のせいじゃないだろ……さあ俺達も行こうぜ」

「……はい」

頷く万理亜を伴い、刃更達もルキアの後を追って歩き出した。

舗装はおろか土の道すらない芝生の上を、ゆっくりと歩いてゆく。すると、

「ふーん……魔界って言うから、最初は暗くておどろおどろしいイメージだったけど。万理亜が言っていたように、あたし達の世界とそこまで大きくは変わらない感じね。ちゃんと太陽もあるし……植物の種類の差までは解らないけど、緑のお陰で森の中の空

気も美味しいし。何だかどこかの田舎の山奥みたい」

森の自然を見て澪が感想を口にした。初めての魔界という事で、刃更達は事前に万理亜から自然や文化についてなど、ある程度の知識や情報を得ている。それでも改めて自分の眼で見ると、既存のイメージとは異なる風景はやはり新鮮ではある。しかし、

「この空気が美味しいって……澪は呑気で良いよね」

「？　どういう事、胡桃ちゃん？」

後ろを歩く胡桃の嘆息混じりの言葉に、澪がそちらを振り返ると、

「魔族の血を引いてる澪は気にならないかもしれないけど……森の自然が綺麗に見えるだけで、凄い魔素だよここ。ここまで魔の波動が強いと、魔界に来たんだって実感する」

表情を硬いものにしながら胡桃が言った。澪が驚いたように、

「えっ……そうなの刃更？」

「まあ、確かに魔素はかなり強いかもな。ゾルギアの館があっただろ？　あそこと同じ位の魔素だよ」

ここまでの濃度だと、普通の人間ならば免疫力を落としてしまうかもしれないが、勇者の一族である刃更達は修行によって魔の波動に対する抵抗力を身に付けているため、

そこまで深刻になる事はない。ただし人間界で強い魔素が生じる場所には、それだけ強力な魔族や邪精霊が潜んでいるケースが多いため、どうにも落ち着かない気分にはなるが。

「嘘……こんなに自然で溢れてるのに」

信じられないとばかりに呟く澪に刃更は苦笑を返すと、視線を反対へと移して、

「……柚希は平気か？」

「ん。問題ない」

こちらの問い掛けに、隣の柚希はコクンと頷いた。その表情に辛さは感じられないが、

……柚希は『咲耶』の使い手だからな。

要は霊刀によって常に浄化されているようなものだ。たとえ主従契約を結んでいても、必然的に魔の波動は弱いものになってしまう。勇者の一族としては好ましい事だろうが、魔界へ行くとなればまた別問題だ。ゾルギアの館でも本来の『咲耶』の力を使えなかったように、魔素の影響を最も受けるとしたら、それは間違いなく柚希だ。

刃更は体調の異状は感じなくても、柚希にとっては慣れるまでかなりの負担となってしまい、何らかの影響が出たとしてもおかしくはない。

「なあ柚希――」

一つある荷物の内、一つを引き受けようとした刃更は、しかしその先を言うのを止めた。

魔界へ行けば自分が最も魔素の影響を受ける事など、柚希は覚悟の上だった筈だ。

それでも柚希は、刃更達と一緒に来てくれた。だとしたら、勝手に心配しすぎるのは柚希に対して失礼でしかない。

「？　どうかした刃更？」

こちらへ問い返してくる柚希の呼吸は、僅かに浅く速いものになっていた。だが、

「いや、問題ないなら良いんだ――行こう」

刃更が心配ではなく信頼の言葉を返すと、柚希は少し驚いたような顔をして、

「……うん」

それから、そっと嬉しそうに微笑んだ。

そして――ルキアの後に続いてそのまま歩く事しばし。森の少し開けた場所に出た刃更達を、一台の馬車が待っていた。木製のクラシックなデザイン。楽に十人以上は乗れそうなサイズの窓付きの車両の前には、ハーネスで繋がれた漆黒の馬がいるのだが、

「ま、魔界の馬って随分と大きいのね……」

見上げる視線で澪が言った。地球にも農耕用の重種馬など巨大な馬はいるが、それを遥かに上回るサイズ。何せ体高が二mをゆうに超えている。しかし体型は鈍重さをまるで感じさせない、サラブレッドのようにしなやかな肉体をしていた。すると、

「いいえ、この馬は特別です。魔界でも通常、これほど巨大な馬はおりません」

周囲に半端ではない威圧感を放っている巨大馬の横に立って、ルキアが言った。

すると車両の陰から二人のメイドが姿を現した。きっとルキアの部下なのだろう。彼女達は木製の車両の扉を開けると、こちらへとやって来て、

「どうぞお乗り下さい。お荷物は私達が」

そう恭しく言って、刃更達の荷物を最後部の荷台へと運んでくれる。そんな中、

「あ、こっちの荷物は良いわ。自分で持っていくから」「私も、これだけお願い」

胡桃と柚希は、着替えなどが入っている方のケースだけを渡し、もう一つについては断っていた。補助系アイテムなどが入っているため、手元に置いておくのだろう。

刃更達は車内へ乗り込み、両サイドに向かい合っている座席へ腰を下ろした。すると最後にルキアが乗り込んだところで、メイドの二人によって扉が閉められる。

そしてメイド達が御者席に座り、手綱を握ったのを確認したルキアが、

「――それでは出発いたします」

静かな声を発したと同時に、刃更達を乗せた馬車がゆっくりと走り出した。
開けた場所から少し行くと森の中に上の道が現れ、そこから馬車は速度を上げる。
しばらく窓の外を流れる景色を見ていた刃更は、
「あの……ウィルダート城へは、どれ位で着くんですか？」
「――貴方達の世界の単位で言うなら、およそ一時間ほどです」
端の席に座ったルキアがこちらと視線を合わさずに言った。
これから世話になるのだ。なるべく歩み寄りたいのだが……こう素っ気ない態度をとられると、刃更達としてもそれ以上口を開く事が躊躇われてしまう。
「……」
重苦しい沈黙。車内に聞こえるのは、馬の蹄と車輪が上の上を走る音だけという中、
「……あっ、皆さんっ、右手の方をご覧下さいっ」
この空気を何とかしようとばかりに万理亜が声を上げた。誰もが釣られるようにそちらを見た瞬間――馬車が森を抜けて、見晴らしの良い丘の上へと出た。そして、右の窓から見下ろす視線の先に広がったのは、大小様々な建築物が並んだ巨大な都市の全景だ。
そんな街の周囲を、岩壁から削りだしたかのような外壁が覆っている。

「凄いな……」

圧巻の光景だった。恐らく、あれが前の魔族の王都――ウィルダートなのだろう。

「――って事は、街の上の方にある、あの城がウィルダート城か」

「はい。澪さまのお父さま、ウィルベルト陛下がかつて治めていらしたお城です。現在は、ウィルベルト陛下の兄君であるラムサス様が城主として治められています」

「……」

万理亜の説明に、無言で窓の外の景色を眺めていた澪が、そっと刃更の手を握ってきた。ほんの少しだけ冷たく、そして震えている澪の手を、刃更はギュッと握り返す。

窓の外では景色が流れ続け、遠くに見える城がゆっくりと近付いてきていた。

3

刃更達を乗せた馬車は、街の外壁をぐるりと回って、そのまま城の裏門へと到着した。

澪は穏健派のカリスマだったウィルベルトの一人娘。そして刃更達は勇者の一族だ。下手に街中を通って民衆に気付かれでもしたら、大きな騒ぎになりかねない。街を迂

回して城へ直行するというのは妥当な判断だろう。

下ろされた跳ね橋を渡り、城壁の内側に入ったところで馬車が止まった。

すると、刃更達が乗っている車両のドアが外から開けられ、まずはルキアが――それに続いて刃更達が馬車から降りてゆく。すると、外には迎えと思しきメイドが四名、刃更達を待っていた。そんな彼女達の前で、ルキアは改まったようにこちらへと振り返り、

「澪様、そして皆様――ようこそ、ウィルダート城へ」

恭しい、礼と共に、静かな声音で歓待の言葉を口にした。他のメイド達も、一斉に頭を下げる。今回、こちらの主賓は澪で、刃更達はあくまでそのお供である。よって、

「えっと……成瀬澪です。お世話になります」

こちらの輪の中から、歩前へと出た澪が、返し方に迷いながらも深々と頭を下げた。

「……それでは、こちらへどうぞ」

ルキアがそう言うと同時に、彼女の背後に控えていたメイド達が刃更達の横を、礼してから抜けると、馬車へと駆けていった。恐らくこちらの荷物を運んでくれるのだろう。

着替えなどの荷物を彼女らに任せ、刃更達はルキアに案内される形で城の中へと足を踏み入れた。入ったのは裏玄関だが、それでも天井は高く内装は豪華なものだった。

廊下に並んでいる調度品や照明など、隅々にまで気を配られた作りとなっており、初めて見る者に由緒ある歴史の風格を訴えてくる。当然、埃など微塵も落ちていない。

……流石は穏健派のカリスマ、ウィルベルトの城ってところだな。

城は国の威厳を表す一つのバロメーターだ。ウィルベルトの死後、穏健派は急速にその勢力を落としているという話だったが、馬車から遠目に見た限り、街にはかなり活気があるように見えた。それは恐らく、民衆にとって穏健派のシンボルの一つであるこの城が、ウィルベルトの生前と同じ風格を保ち続けている事もあるのだろう。

そんな荘厳さを湛えた廊下をルキアの後に付いて進んでゆき、何度となく角を曲がりながら歩き続けた後――刃更達が案内されたのは廊下の突き当たりにある部屋だった。

「こちらが、澪様達に滞在していただく部屋になります。男性の刃更殿のお部屋は別室です。後ほど他の者に案内させます」

そう言ってルキアが開いた扉の先にあった光景に、刃更達は俄に言葉を失った。

豪華すぎたからではない――逆だ。高い天井、広い空間、高級な家具など調度品の数々。そうした、ここへ来るまでにあった豪華なイメージがこの部屋には一切なかった。あるのは質素なベッドにソファ、それにテーブルなど必要最低限の家具だけ。中へ足を踏み入れると、陽当たりもあまり良くなく室内は薄暗かった。そんな部屋の有様を見て、

「……ここへ来るまでに見た調度品や、通り過ぎた部屋の内装を見た感じだと、ここって恐らく客室じゃなくて、普段は使われていない物置か何かの部屋だよね。あたしらはともかく、先代魔王の一人娘の澪に宛がう部屋とは思えないんだけど？」

冷たい瞳を向けた胡桃に対し、

「ラムサス様より、皆様にはこちらを利用していただくようにと仰せつかっています」

ルキアは、そんな胡桃の視線を平然と受け止めて言った。

……成る程、こう来たか。

滝川から、ラムサスは澪の事をあまり快く思っていない節があるとは聞いていた。権力を巡って王族の血縁同士が険悪になる事は、刃更達の世界でもかつてはよくあった事らしいが――いよいよもって、姪と伯父の感動の再会というのは不可能らしい。

「……」

澪がそっと眼を伏せた。その瞳に、憂いの色が浮かんでいるのは当然だろう。この魔界へ来る事で、もしかしたら自分の知らなかった家族や親族との絆や繋がりに触れられる可能性があるかもしれないと思っていただろうに、こうも露骨に邪険にされたのだ。

……だったら。

こんな所に長居は無用だ。メイド達が届けてくれた荷物を受け取り、部屋を出て行く

彼女達に礼を言った刃更は、ルキアへと向き直り、
「解りました……そういう事ならこちらは構いません。では、早速そのラムサス様にお目通りさせて貰えますか？　こっちにも生活や都合ってものがあるんで」
わざと険のある声で言ってやった。すると、ルキアは首を横に振って、
「ラムサス様は現在、公務でこの城を離れております。申し訳ありませんが、どうか皆様には明日までお待ちいただければと」
「留守？　こちらを呼び付けておいて？」
柚希がスッと眼を細めて問うと、
「はい。先日、私が貴方達の家へ伺ったタイミングであれば、ラムサス様のご都合に何の問題もありませんでした。しかし、貴方達にも都合があるように、こちらにも色々と都合は存在します。ましてや現在、我々穏健派は、レオハルトが率いる現魔王派と戦争状態にありますので」
とルキア。
「ラムサス様は穏健派の長としての務めがあり、常にお忙しくされています。中でも今日は、たまたまラムサス様にとって決して外す事のできない所用があったのです。我々は貴方達が主張する都合を受け入れ、一ヶ月以上を待ちました。それなのに貴方達は、

たった一日すらお待ちいただけないのでしょうか？」

「……」

そう言われてしまうと、刃更達もこれ以上反論の言葉がない。

「……だったら、何も今日じゃなくて明日来れば良かったじゃん」

と、胡桃が小声で不満を漏らすのが精一杯だ。そんな胡桃の呟きを無視して、

「ご理解いただけたようで何よりです――それでは」

とルキアが言うと、部屋の扉がノックされ、室内に入ってきた者がいた。

「……お客様のお茶をお持ちしました」

やって来たのは、褐色の肌を持った美しいメイドだった。ティーセットを載せた鋼鉄製のワゴンを押して、ゆっくりとこちらへとやって来る彼女を刃更達は知っていた。

だから、東城刃更は思わず彼女の名を呼んでいた。

「ゼスト……！」

こちらの呼び掛けに、ゼストは「はい」と頷いた。

「お久しぶりです東城刃更――いえ、刃更様」

そんなゼストを見て、胡桃が柚希の耳元へと口を寄せて、

「……ゼストって、彼女が例の？」「そう。ゾルギアの配下だった魔族」

直接ゼストと顔を合わせていなかった妹の問い掛けに、柚希がコクンと頷いた。
「元気そうだな……本当に良かった」
「はい。お気に掛けていただいて、ありがとうございます」
こちらの安堵の言葉に対してゼストが浮かべた表情に、刃更は僅かな驚きを得た。
あのゼストが、そっと微笑んだのだ。それは初めて見る彼女の笑顔で、
……こんな表情ができるようになったんだな。
刃更は思わず感慨を覚える。ゾルギアを倒した後――保護を頼んだ穏健派の魔族が迎えに来るまで、一時的にゼストを東城家で保護していた事があった。主だったゾルギアに邪魔者扱いをされ、殺されかけた事もあり、その時のゼストの表情はまだ冷たく無機質なものばかりだった。証人保護のような形とはいえ、それまで現魔王派だったゼストを穏健派に託す事に不安がなかった訳ではないが、ゼスト自身も相当な実力の持ち主である。何かあればいつでも戻って来いと言って彼女を送り出したのは、もし何かあった場合でもゼストなら逃げる事くらいは可能だと思ったからだ。だが今回、こんな部屋に澪や自分達が案内された時、或いはゼストもこちらで酷い扱いを受けているのではと不安になったが――どうやらそれは杞憂だったらしい。それは非常に良かったのだが、

「……っ」

東城刃更はふと、もう一つのゼストの変化に眼を奪われてゴクリと喉を鳴らした。

――最初に刃更が出会った時から、ゼストは抜群のプロポーションの持ち主だった。

そしてゾルギアとの戦いの後、穏健派に身を寄せる事になったゼストと別れてから、まだ二ヶ月程しか経っていない。それなのに、ゼストの胸は以前よりも遥かにけしからんサイズになっていた。あまりの変貌ぶりに男の刃更だけでなく、澪や柚希も予期せぬタイミングでの再会以上に驚いたようで、呆気にとられてゼストの事を見詰めている。

「……あ」

こちらの視線に気付いたゼストが、恥ずかしそうに頬を染めて小さく身をよじらせた。

それだけで、凄まじいボリューム感のゼストの胸がいやらしく揺れて、

「わ、悪い……っ」

刃更が慌てて眼を逸らすと、ゼストは「いいえ」と首を横に振って、

「驚かれて当然です……私自身、自分の身体がこんな風になるとは思ってもいませんでしたから。医者の話では――これまで抑制されていた状態から解放された事によって起きた変化だろうとの事で、病気など悪いものではないから問題はないと」

「……――そうか」

ゼストの言葉に、刃更は低い呟きを放った。
ゾルギアから解放されたのは、何も万理亜やシエーラだけではない。ゼストもまた、最悪の主から解放されたひとりだった。その結果として生じたものならば、それは変化というよりも、或いはゼストは本来の姿を取り戻しただけなのかもしれない。
すると、
「ゼストは、刃更殿がこちらで滞在している間のお世話を担当します。何かありましたら、遠慮なく彼女へお申し付け下さい。ゼスト――貴女は後ほど、刃更殿を彼のお部屋へご案内するように」
「――かしこまりました、ルキア様」
ルキアの言葉に、ゼストはそっと頭を下げた。それを見たルキアは「結構」と言って、
「それでは皆さん、移動の疲れもある事でしょう。夕食までは、まだかなり時間があります。用意ができ次第お呼びしますので、それまでこちらのお部屋でおくつろぎ下さい」
それでは、と、礼して部屋を出て行く――しかし、扉の所でこちらを振り返り、
「マリア――貴女はゼストのお茶を飲んだら私の部屋へ来なさい。あちらで貴女が行なっていた諸々の行動について、改めてきちんと報告をして貰います」

「……はい。解りましたルキア姉さま」

万理亜が静かに頷きを返すと、今度こそルキアは部屋を出て行った。

夕食までここでくつろげという事は、要はこの部屋から出るなという事だ。

不満を言っても仕方がない。よって刃更達は、まずはゼストが淹れてくれたお茶を飲む事にした。部屋の中央にあるテーブルを囲むように置かれたソファに腰掛けると、ゼストがティーセットをそれぞれの前に置き、白い陶器製のティーポットから順にお茶を注いでくれる。早速、刃更がひと口飲んでみると、

「へえ……味も匂いも、俺達が普段飲む紅茶に似てる感じなんだな」

「全く異なる味のお茶もありますが、刃更様達はこちらへ来るのは初めてですので、なるべく人間界のお茶に近い種を選ばせていただきました……お口に合いそうですか？」

「ああ、凄い美味いよ……ありがとうなゼスト」
「……そうですか。良かったです」
とゼストが嬉しそうに微笑むと、
「何だか随分と良い雰囲気ね……お茶はまだなのに、こっちまで熱くなっちゃいそう」
刃更とゼストのやり取りを見ていた隣の澪が、トゲのある声で言った。
「いえ……そんな事は……っ」
ゼストは沈痛な面持ちで畏まると、そんな澪のカップへお茶を注ぎ始めた。
そして――室内の空気が、僅かに張り詰めたものになる。澪が本当の両親だと信じて疑わなかった養父母を惨殺した高位魔族のゾルギア――ゼストはその配下だった女だ。
無論、ゼストは主だったゾルギアに従っていただけだし、澪の養父母の殺害にも一切関わってはいない。だが、だからといってそう簡単に割り切れる感情ばかりではないだろう。だからこそ、刃更はゼストを穏健派に託す事にしたのだ。養父母の仇であるゾルギアを自分の手で殺す事を諦めた直後に、その配下のゼストとすぐ同居しろというのは澪にとって酷すぎる。そんな事もあり、東城家でゼストを一時的に保護していた時も、澪はゼストとほとんど話そうとはしなかったし、刃更もそれで構わないと思ってい

たのだが。
しかし――お茶を注ぎ終えたゼストが、歩下がると、澪はカップを口に運びながら、
「全く……こっちで酷い扱いされてるんじゃないかと思って、心配して損した」
フンと鼻を鳴らして言った言葉に、その場に居た誰もが驚きを得る。
ゼストなど完全に固まっていた。しかし無理もないだろう。
「え――な、何……？」
自分に視線が集まった事に、澪が怪訝そうに眉を顰める。きっと澪は気付きもしていないのだろう――自分がたった今口にした言葉が、一体どんな意味を持つのかを。
何気ないその呟きが、どれだけゼストの救いになったかを。
そんな澪が堪らなく愛おしくなり、刃更は手を伸ばして彼女の頭をそっと撫でてやる。
「ちょっ、ちょっと何よ刃更――どうしたのよ急に？」
「いいや、何でもないよ。ただ、どうしてもお前の事をこうしてやりたくなったんだ」
困惑しながらもこちらの手を拒まない澪に、刃更は笑顔で教えた。
柚希や万理亜、胡桃は僅かに苦笑し、ゼストは静かに涙ぐんでいたけれど。それで

も既に張り詰めた空気はどこにもなく、薄暗かった室内を温かな空気が包んでいた。

4

そしてゼストのお茶を味わいながら、刃更達はこれからの事について話し合った。

残念ながら自分達は歓迎されていない事。よって、なるべく早く話を付けて人間界へ戻ろうという事で意見は一致。ただし、澪がまだウィルベルトの力を手放すべきかどうか決めかねているため、後悔のない決断ができ次第という事になった。とはいえ、ラムサスのように澪がウィルベルトの力を手放す事を望む者がいる一方で、中には澪に新たなEとなって欲しい者もいる。澪は自分が魔王になる事だけはあり得ないと言っていたが、それでもきちんとした判断を下すには両者の意見をしっかりと聞く必要があるだろう。だが、如何せんラムサスが不在では仕方がない。明日になってラムサスが戻り次第、穏健派の考えを聞かせて貰う事にした。そして一通り話が終わると、

「ルキアさんが言ってた報告って……ゾルギアに従わされていた時の事か？」

そういえば、と刃更は先程から気になっていた事を万理亜に尋ねた。すると、

「はい……母が捕われの身だったとはいえ、私の取った行動は何の咎めも受けずに済む

ようなものではありませんから」

こちらの問い掛けに、万理亜は自嘲めいた笑みを浮かべる。

「それにしても、お姉より無愛想な冷血女とか、姉妹なのに全然似てないよね……」

「……胡桃。それは、体どういう意味か、怒らないから言ってみると良い」

胡桃の言葉に、柚希が声に迫力を滲ませながら、ずいと身を寄せて凄むと、

「ちょっ、違うってば！　ホラっ、あたしが言いたかったのは、お姉の無愛想は感じ悪くないけど、あのルキアって女は何か感じ悪いっていうか――」

胡桃がわたわたと弁明する。そこへ、

「確かに……ゴメンなさいね――本当に」

ふと、その場にため息混じりの声が生じた。と同時、

「――っ？」

東城刃更は、不意に己の膝の上に重さを得た。見れば、いつの間にか膝の上に幼いサキュバスがちょこんと座っている。万理亜より一回り以上も小さいその少女に、

「なっ――!?」

澪達も、その幼いサキュバスの少女に気が付き息を呑んだ。そして、

「お、お母さんっ!?」

万理亜の驚愕の声に、幼いサキュバス――シエーラは悪戯っぽい笑みを浮かべながら、

「あらあら、そんなにビックリした声を上げて。どうしたのマリアちゃん、大好きなお母さんに会えてそんなに嬉しかった？」

「いや……いきなりそんな所に現れるからビックリしただけですが」

と突っ込む万理亜を無視して、シエーラは刃更の膝の上で顎を上げるようにしてこちらを見上げて、

「ごめんなさいねー刃更君……それに澪ちゃんや皆さんも。ウチのルキアちゃんが失礼しちゃったみたいで」

そう言って、ロリ母サキュバスはふふっと笑った。

「い、いえ……お久しぶりですシエーラさん。相変わらずお元気そうで」

シエーラと初めて出会ったのは、彼女がゾルギアに殺されたと思い、絶望した万理亜の下へと彼女が駆け付けた時だった。流石にその場は空気を読んだのか、こちらへした挨拶は大人びた感じだったのだが――シエーラの本来の性格は、万理亜以上に明るく

奔放なものだった。穏健派の迎えが来るまで、彼女もゼストと共に東城家に身を寄せていたのだが、その時もシェーラには色々と振り回されて大変だったのだ――それはもう本当に。

……それにしても。

再会の言葉を口にした刃更は、同時にゴクリと喉を鳴らした。シェーラが声を発するまで、室内に入ってきた事はおろか、膝の上に座られていた事にもまるで気付けなかった。無論、お茶を飲んで少しリラックスはしていたが、だからといって油断していた訳では断じてない。どうやら万理亜やあのルキアを産んだのは伊達じゃないらしい。

シェーラの底知れなさに、刃更達が戦慄と共に言葉を失っていると、

「本当に、あの冷淡ぶりは誰に似たのかしらねぇ……」

とシェーラ。片手を頬に当てて、ほうと溜息を吐きながら、

「元々ルキアちゃんは生真面目で責任感が強すぎるところがあったんだけど……ラムサスの副官になってからは、さらに拍車が掛かっちゃったのよねー」

何気ない言葉遣いの端々に、シェーラの穏健派内での地位の高さが垣間見える。

先代の魔王であるウィルベルトの兄にして、現在のトップであるラムサスを呼び捨てにし、挙げ句にはウィルベルトの一人娘である澪を「ちゃん」付けだ。ゾルギアに協

力していた万理亜を魔界へ連れ戻すと言って譲らなかった穏健派の迎えを、笑顔一発で黙らせる事ができたのも、恐らくはそういうカラクリなのだろう。
「仕事もできるし有能なのは間違いないんだけど……でもあの性格だからねー。ルキアちゃんの下に付いているメイド達は色々ハードでしょうね」
「成る程……じゃあ、ただでさえメイド仕事に慣れていないゼストは大変だな」
シエーラの言葉に、刃更が壁際に控えているゼストを労うと、
「……いいえ、私はこちらではルキア様の部下ではありませんから」
「そうなのか？　でも先刻、ルキアさんが俺の世話をするようにって……」
「あれは、予め私に割り振られていた仕事を、ルキア様が改めて仰っただけです」
「？　じゃあ、お前は誰の命令で俺の世話をする事に――」
ゼストが返した答えに、刃更が再度問い掛けを放つと、
「やーね。そんなの私に決まってるじゃないの、刃更君てば」
その答えはゼストではなく別の所から来た――膝の上だ。
「じゃあシエーラさんが、ゼストの……？」
「そうよー。ゾルギアの配下だった彼女を、いきなりルキアちゃんの下に付けるのはちょっと避けた方が良いと思って。勿論、出自で差別するような真似はルキアちゃんは

しないだろうけれど……かといって下の娘達にまでルキアちゃんみたいに何でも割り切れと言うのは酷というものよ。勿論、そんなメイド達と打ち解けろとゼストちゃんに言うのもね。だったら、事情を知ってる私が面倒を見てあげるのが一番良いかと思ったの」

すると背後のゼストがそっと瞳を伏せて、

「シェーラ様には、本当にお礼の言葉もありません……まだ使用人として至らない所も多い私ですが、シェーラ様の下に付かせていただけたお陰でどうにかやれているのです」

「あーそんな気にしなくて良いわよ。ゾルギアとゼストちゃんの事については、私としても色々と思う所があったし」

「そうだったんですか……」

東城刃更は納得を得た。あのルキアの下で働く事で、先程のゼストの笑顔が得られたのかと思い、少なからず驚いていたのだが――何て事はない。ゼストが笑えるようになったのは、シェーラの配慮で彼女の下に付く事ができたお陰だったのだ。だから、

「……ありがとうございます、シェーラさん」

刃更は膝の上に座るシェーラに向かって頭を下げた。確かにシェーラはゼストの事情

を知ってはいるだろうが、それはゾルギアの人質となっていたからだ。ゾルギアの配下だったゼストの面倒を見る義理など、本来ならばないだろうに。すると、

「まあ普段マリアちゃんが色々とお世話になってる上に、ゾルギアの件では私のせいで迷惑まで掛けちゃったからね……その罪滅ぼしよ」

苦笑しながらシエーラが言った。すると、万理亜はカップのお茶を飲み干して、

「――では、そろそろ私も罪滅ぼしに行ってきますね」

落ち着いた口調でそう言うと、ソファから立ち上がった。

「大丈夫？　何ならあたしも付いて行くわよ」

「いいえ澪さま、これは私が付けなければならないケジメですから……自分がやった事を包み隠さずに報告して、きちんとルキア姉さまに怒られてきます」

心配そうに気遣った澪に対し、万理亜は首を横に振って、

「皆さんは、引き続きゆっくりとくつろいでて下さい――行ってきます」

笑顔でそう言って、しっかりとした足取りで部屋を出て行った。

成瀬万理亜は廊下に出ると、俯いて小さな嘆息を一つした。そして、

「――――」

スッと笑顔を消すと、そのまま表情を静かなものにしていった。

それから、万理亜はゆっくりと歩き出す。向かう先は、姉であるルキアの執務室だ。

広いウイルダート城内――その廊下を、万理亜はたったひとりで歩いてゆく。

――途中、何度か執事やメイドらとすれ違ったが、彼らと言葉を交わす事はなかった。

万理亜がずっと床に視線を落としたまま歩いていたからだ。

……大丈夫、ですよね。

自分の事ではない――刃更や澪達の事だ。主従契約のお陰で、刃更と澪と柚希は何度か戦闘力の向上ができているし、胡桃に加えてこちらへ来てゼストとも合流できた。

一時的に成体化する事でしかパワーアップできない万理亜に対して、ゼストは何もせずとも高位魔族クラスの力を持っている。また単に家事が得意なだけの自分と違い、きちんとメイドの修業もしているそうだし、生活面でも刃更達をサポートできるだろう。

……うん、きっと大丈夫です。

俯いたまま歩きながら、それでも成瀬万理亜は心の中で得た確信に小さく笑って。

そして――ふと立ち止まった。視線を上げれば、そこにはとある部屋の扉がある。

「……」

万理亜はギュッと右の拳を握ると、二度ノックを行なった。そして、

「――ルキア姉さま、マリアです」

万理亜がそう告げると、やがて中から静かな……しかしよく通る声で、

『……もう良いのですか？』

短い問い掛けが万理亜へと投げ掛けられる。だから、成瀬万理亜は頷いた。

「はい……もう充分です。ありがとうございました」

すると数秒後、

『そうですか――ならば入りなさい』

ゾッとするほど冷たい声と共に――重い木製の扉がひとりでに開かれた。

6

ウィルベルトの亡き後、新たな魔王レオハルトと共に生まれた勢力がある。

タカ派層と保守派層が合流した事で生まれた現魔王派だ。

だが――この現魔王派の最高意思決定権は、レオハルトだけのものではない。

永き時を生きてきた高位魔族らの存在があるからだ。

枢機院。レオハルトを新たな魔王として祭り上げた彼らには、七つの大罪――即ち『傲慢』『嫉妬』『憤怒』『怠惰』『強欲』『大食』『色欲』の七席が存在する。そして、

「――しかし驚きましたな。まさか、あのゾルギア侯が死んでしまうとは」

「いや全く。もう彼の遊戯場で遊べないかと思うと、いささか残念ではある」

「なに……別に彼でなくとも、別の者が管理をすれば良いだけの事。あそこの宴や女を、このまま無くしてしまうのは惜しすぎる」

現魔王派の王城内――地下の最下層フロアにある、一部の者しかその存在を知らない上位閣議室に彼らの姿はあった。室内中央に置かれた円卓の席に座り、まもなく開かれる閣議の前に彼らが会話の一角――『色欲』の席に座っていたゾルギアの死についてだ。

「それにしても、よもや謹慎中に亡くなるとは……これも謹慎の原因である、ウィルベルトのひとり娘に勝手に手を出そうとしたツケかもしれませんな」

「ウィルベルトの呪いだと？　まさか……大方、ご自慢の女達と毎晩のように戯れていた無理が祟ったのでしょうよ」

確かに、と彼らは低く笑い合う。そんな中、

「……」

瞳を閉じ、終始無言を貫いている者がいた。七つの大罪とは別に設けられた、八つ目の席に座る若い魔族――精悍な顔つきをしたその青年こそ、現魔王のレオハルトだった。

ゾルギアの死について、好き勝手に語る枢機院メンバー達の会話を耳にしながら、……欲にまみれた老害共が。

レオハルトは心の中で冷たく吐き捨てた。そうした己の中にある本心を口にしないのは、今はまだそうする事ができない理由があるからだ。

――現在、枢機院は魔王であるレオハルトと同等以上の権力を有している。

表向きは権力の集中を避けるため。枢機院が魔王の諮問機関として存在すると当時に、レオハルトが権力を暴走させたと判断すれば、魔王としての地位を剥奪できるストッパーとしての役割を担っているため、とされている。だが――実際はそうではない。

確かに先の大戦でレオハルトが挙げた功績は群を抜いていたが、それでも新たな魔王として選ばれたのは、枢機院にとってレオハルトが都合の良い存在だったからだ。

一つは、若いレオハルトを魔王に祭り上げる事で、兵士や民衆に派閥の若返りをア

ピールして彼らの支持を得られる事。そしてもう一つは、キングメーカーとしてレオハルトに対して政治的な影響力を行使できるからだ。メンバーのひとりひとりにレオハルト以上の権力や戦闘力は基本的にないが、もし枢機院全体としての決定にレオハルトが首を横に振れば、彼らは即座にレオハルトを今の魔王の座から引き摺り下ろすだろう。

そのため実際は派閥の若返りなどはなく、むしろウィルベルトが魔王だった頃よりも前時代的な枢機院政治へと回帰してしまっている。だが現状、レオハルトが魔王でいるためには、この枢機院にとって都合の良い存在である必要があるのだ。

あくまで、今のところは。

……待っていろ。

静かに瞳を開き、枢機院の面々を暗い眼で見据えながら魔王レオハルトは心に誓う。

――この魔界に巣くうダニ共を、自分が一匹残らずこの世から消し去ってやると。

レオハルトは、いつまでも枢機院の傀儡に甘んじているつもりはない。この魔界に新たな秩序を生み出すには、抵抗を続ける穏健派や、その他の勢力の平定も大事ではあるが――それ以上に、眼の前にいるこの老害共を一掃する必要がある。無論、魔界で永い時を生きてきた彼らの影響力は計り知れないし、下手に始末すればあっという間にこちらが追い込まれる事になるだろうが、それでもレオハルトの心は揺るがない。だから、

……そのためにも。

レオハルトは、空いている円卓の席を見た。ゾルギアが座っていた『色欲』の席ではない。八つある席の内、現在埋まっているのはレオハルトを含めて六つ。

そう――まだひとり、この場に来ていない者がいるのだ。

――その時だった。ふと重厚な上位閣議室の扉がゆっくりと開いたのは。そして、

「諸君、遅くなってすまんな……」

低い声と共に、室内へひとりの高位魔族が入ってくる。ゆったりとした足取りで、その男は七つある大罪の席の中で最も上位の椅子に座った。

それは枢機院を司る議長――大公ベルフェゴールだ。

「どうされたのですベルフェゴール卿？　今日はまた、一段とゆっくりのお着きですが」

予定時刻を大幅に遅れて現れたベルフェゴールに、枢機院メンバーのひとりが問うと、

「うむ……ゾルギアの件で後始末をちょっとな」

と、深い笑みと共にベルフェゴールが言った。

「あやつの後継が選ばれるまで、『色欲』の席は私が兼ねる事に決まっただろう。奴の研究や財産に興味はないが……あの遊戯場だけは別だ。あそこを無くすのはちと惜しいの

でな。よって今後のあの場所の管理は、私の方で行なう事にしようと思ってな」

その言葉に、別のひとりが嬉しそうに笑った。

「ほお……それは良い。ベルフェゴール卿にお任せできるのであれば間違いない。我々としても安心して、これからも遊びを楽しめる」

怠惰の象徴でもあるベルフェゴールは、現在この魔界で最も老齢でありながらも、あのゾルギアと同じかそれ以上の好色家として知られている。彼の城には、それこそ四桁を超す女達によるハーレムが存在しているという話だ。

しかし、枢機院のトップは伊達ではない。ベルフェゴールは、現魔王派に属する高位魔族の頂点に立つ存在だった。言うなれば、彼こそが古き時代の象徴なのだ。

「陛下も、この老いぼれがお待たせして申し訳ありませんな……現在、あそこの女達を一から私のものに調教し直しておる最中でしてな」

悠然とこちらへ言い放つベルフェゴールに、

「……旺盛な事で何よりだ、ベルフェゴール」

冷静な声音でレオハルトは言った。レオハルトにとって眼の前の男は、ウィルベルトの力を受け継いだ成瀬澪や、穏健派の現トップのラムサスなどよりも、よっぽど殺したい存在だ。だからこそ、己の中にある殺意を決して気取られないようにする。

すると、「それでは」と前置きを一つして、そしてベルフェゴールが宣言した。
「本日の閣議を始めるとしよう――まずは、先だって発掘された西域の遺跡と、その中で眠っていた英霊達の状態について」

7

重い静寂に包まれた空間で、向かい合うサキュバスの姉妹がいる。
成瀬万理亜と姉のルキアだ。
ルキアの執務室を訪れた万理亜は、ゾルギアに脅迫を受けてから、悩んだ末に従う事を決意し、彼に協力を行なっていた時の事を報告した。
養父母を殺された澪をゾルギアの魔の手から救出したものの、すぐに母であるシエーラが人質に取られ、協力するように脅迫を受けた事。ルキアからは耳を貸すな、澪の護衛任務を優先しろと命令され、最初は必死にそうしようと努めていたのだが、それでもゾルギアの言葉に耳を貸してしまった事。その結果、気が付けばまるで坂道を転げ落ちるようにゾルギアに手を貸す羽目になり――澪や刃更らを欺き、挙げ句には彼らを危険に晒してしまった事。そうした己の犯した罪の一つ一つを告白するかのように、万理

亜は報告を行なっていった。

そして現在――室内に重い静寂があるのは、報告を終えた万理亜がルキアの言葉を待っているからだ。息が詰まりそうな程に静まりかえった沈黙の中、万理亜が瞳を伏せたまま立っていると、

「――それで全てですか？」

やがてルキアが発したのは、どこまでも冷ややかな声だった。そして、

「マリア……貴女が母様を慕っている事は私もよく知っていますし、その事自体を咎めるつもりはありません。母様が人質に取られたと知った時の貴女が抱いた心情や、その結果取ってしまった一連の行動については理解できる部分もあります」

「……はい」

万理亜が静かに頷きを返すと、

「大変でしたねマリア……さぞ辛かったでしょう。そして悩み苦しんだでしょう。貴女は優しい子です。自分を信頼してくれている澪様や刃更殿達を裏切り、母様を人質に取った卑劣な男に協力する事など、貴女にとっては身を切られるよりも辛かった筈です」

ルキアは次々に優しい言葉を掛けてくれる――一切の温もりを排した絶対零度の声

で。

だから、成瀬万理亜は無言のまま、ゆっくり視線を上げた。すると、

「――――」

正面の執務机を挟んで向こう側――椅子に腰掛けたルキアと眼が合った。

そこにあったのは、万理亜が想像していた通りのもの。凍てつくような冷たさを宿した姉の瞳だ。予想通りの表情――それでもなお、その迫力は万理亜に息を呑ませた。

「ですが――それでも、あの時の貴女が優先すべきだったのは、母様の身を案じる事ではありません。澪様の護衛という己の任務です。ましてや、ゾルギアに手を貸す事などでは断じてない。そして――その事が解らない程、貴女は愚かではない筈です」

何故です、とルキア。

「貴女が本当にこのような失態をしでかすような子ならば、たとえラムサス様のご意思であろうとも、貴女が澪様の護衛として名が挙がった段階で、この私が反対しています。それなのに、どうして貴女は周囲を裏切ってしまうような愚かな行為に及んだのです？」

「……っ」

ルキアの問い掛けに対する答えは、万理亜の中に存在していた。だが、万理亜は答え

られなかった。それは、未だに信じたくない想いがあったから――そして、改めて自分の口からは言いたくなかったからだ。しかし、

「答えなさいマリア――貴女は、体、ゾルギアに何を吹き込まれたのです？」

ルキアはさらに、歩踏み込んできた。眼の前の聡明な姉は、黙っていれば見逃してくれたり、その場凌ぎの嘘などで誤魔化せたりできるほど甘くはない。

……それに。

このまま黙っていたら、万理亜が罰せられるだけでなく、シエーラやルキアにまで責任や追及が及んでしまうかもしれない。万理亜が過ちを犯す原因を作り、それを止められなかったからといって――だが、そんな事にだけはさせる訳にはいかなかった。

ふたりとも自慢の家族なのだ。万理亜が過ちを犯したのは、万理亜が弱かったからであって――ルキアやシエーラの責任では断じてない。だから、

「……言われ、たんです」

やがて成瀬万理亜は、諦めたように真実を口にした。

絞り出したような声で、

「お母さんが力を失い、あんな姿になってしまったのは――私を産んだせいだと」

「――――」

マリアが震える声で漏らした告白に、ルキアは僅かに眼を見開いた。

……そういう、事でしたか……。

ようやく納得がいった。確かにマリアは優しいが、それ以上に責任感も持っている。

あの状況では迷う事はあっても、ゾルギアに協力するような最悪の真似だけはしない筈だと確信していたのだが、

……道理で。

マリアからは見えない机の陰で、ルキアはギュッと右の拳を握りしめた。

そして表情は一切変える事なく、沸き上がる怒りを懸命に押し殺す。

――マリアが知ってしまった話は真実だった。

ルキアとマリアの母親であるシエーラは、淫魔であるサキュバスの身でありながら、初めて高位の魔族となり、魔界に広くその名を知らしめた程の存在だった。その力は凄まじく、最強の魔王と謳われたあのウイルベルトと対等の盟友関係であったという。

だが――そんなシエーラがある日、ある事をきっかけに力の大半を失ってしまった。

それがマリアの出産だった。長女のルキアを産んだ時は何ともなかったのに、マリアの出産と同時にシエーラは力の大半を喪失――その結果、己の肉体すら保てなくなっ

てしまい、現在のマリアよりも幼い今の姿へと変わってしまっていた。
しかし――マリアにだけは、この事は決して知られぬようルキア達は気を配ってきた。
自分が産まれたせいで、大好きな母親がかつての力と姿を失ってしまったと知れば、否応なく子供は傷つく。それが、シエーラのような特別な存在であれば尚更だ。
だからマリアが自身の存在に責任を感じ、そして傷つく事がないよう、シエーラとルキアは周囲の者達と共に、マリアを守ってきたのだ――この真実を秘密にする事で。
シエーラ程の存在が力を失った以上、その事実を隠し通す事は不可能だったが、それでも理由や原因をマリアとは別のものにする事はできる。よってシエーラはマリアを妊娠する少し前から既に力を失っていた事にし、周囲にはそれをひた隠しにしていた事にした。出産に立ち会うなど真実を知る穏健派内の近しい者の中には、かつてのシエーラの圧倒的な姿や力を惜しむ者も多くいたが、シエーラとルキアが口外しないように頼み、ウィルベルトも秘密を守るようにと周囲を納得させてくれて。そうした皆の協力もあり、残酷な真実をマリアには知られる事なく、彼女を育てる事ができていた。
……それを、よくも……！
ルキアはギリッと奥歯を噛み締めた。穏健派内でもごく一部の者しか知らないこの秘

密を、現魔王派のゾルギアがどのようにして知ったのかは定かではないが――死んでもなお害毒にしかならないとは、つくづく腐った男だった。可能ならばルキア自ら息の根を止めてやりたかったが、澪を拉致していた館から逃走した後、追跡していた霊子反応が突如として消失した事をみるに、恐らくゾルギアはもう生きてはいないだろう。

「……」

怒りのやり場がないルキアが、己の中で憎悪を押し殺していると、

「……すみません、ルキア姉さま……」

そんなこちらの沈黙を自身への怒りと受け取ったのか、マリアが項垂れながら、

「姉さまが誰より尊敬していた、昔のお母さんを奪ったのは、私だったんですね」

「それは――」

力のないマリアの言葉に、とっさに「いけない」という想いがルキアの中で沸き上がった。ルキアがこれまでマリアに厳しく接してきたのは、マリアのせいでシエーラが力を失ったせいだとでも思ってしまったのだろう。或いはそのせいで、マリアはシエーラを絶対に助けなければと思い、彼女にゾルギアへ協力するという誤った道を選ばせてしまったのかもしれない。だが、

……違う。

ルキアがマリアに厳しく接してきたのは、ルキアが穏健派の現トップであるラムサスの副官という責任ある立場になったからだ。時に周囲に対して厳しく接し、冷酷な決断も下さなければならない者が、身内に対して甘い態度を取る事は許されない。ましてや、その妹が立場的に自分の部下となったのであれば尚更だろう。

そして、シェーラの力が失われたのは、断じてマリアの責任ではない。そうなると解っていて、それでも産む事を決めたのはシェーラだし、ルキアもそれに賛成した。そしてマリアは、そんなシェーラやルキアの想いに応えて、きちんと産まれてきてくれたのだ。

だから「違う」「そうじゃない」と言ってあげたかった。貴女はマリアというサキュバスは、皆に祝福されてこの世に産まれてきたのだと。

だが――ルキアはその言葉を口にする事はできない。

今の自分はマリアの姉である以上に、ラムサスの副官なのだ。よってまずは、過ちを犯した部下へ処分を下し、速やかにそれを実行する必要がある。よって、

「……貴女が裏切りを犯した事情は理解しました」

ルキアは椅子から立ち上がると、姉ではなくラムサスの副官の表情と声で言った。

家族としての――姉としての感情を排し、眼の前のひとりの部下へと淡々と告げる。

「ですが――それでも貴女の任務は澪様の護衛であり、たとえどのような理由があろうとも、私情を優先して護衛対象を裏切り、危険に晒した事は断じて許されません」

そう言って、ルキアはマリアの方へと向かってゆっくりと歩き出す。そして、

「過ちを犯した貴女への処分については、ラムサス様より私に一任されています――覚悟は良いですね？」

「……はい」

ルキアの言葉に、マリアは静かに頷きを返してくる。

だから――ルキアは、右の手に己の武器を具現化した。それは魔獣ベヒーモスの革で作られた特別な鞭だ。そしてマリアの眼の前に立ったルキアは、冷たい瞳で妹を見据えると、ゆっくりと鞭を持った右手を振り上げて、

「――その辺で許してあげて貰えませんか」

不意に真横から、ルキアを制止する声が発せられた。ハッとなったマリアが、

「っ――刃更さんっ!?」

声のした方を振り向き、いつの間にか右の壁に背を預けていた青年の名を叫んだ。

「……どうやってそこに？」

驚愕と困惑を露わにしたマリアとは対照的に、ルキアが眉を顰めて尋ねると、

「先刻……俺達が案内された部屋に、突然シェーラさんが現れたんです」

刃更は口を開いて語り出した。

「いきなり膝の上に現れたんで、どういうカラクリか訊いたところ、彼女は普段は悪戯の用途で――また緊急時には城内にいる者を避難させるために、城の至る所に魔法による空間トンネルを構築していると教えてくれました。だったら、貴女の執務室に通じるものもあるんじゃないかと思って、シェーラさんに頼んでそれを使わせて貰ったんです。万理亜の戻りが少し遅いのが心配になってしまったので」

そう言って、こちらを見据える刃更の瞳にはルキアとは異なる色の冷たさがあった。

……成る程、これが……。

東城刃更がどのような人間なのかは、ルキアは既に報告を受けて知っている。

優しく情に厚い普段の顔と、ラースの正体を見抜いた上、自身に重傷を負わせた彼に、秘密裏に手を組む取り引きを持ち掛けた冷徹な顔とを併せ持つ、元勇者の一族の青年。

そして刃更はラースと共にゾルギアの裏を掻き、拉致されていた澪やシェーラを見事救出――さらにはゾルギアまでをも撃退してみせた。ルキアが彼と顔を合わせたのは、一ヶ月ほど前に魔界へ来るように伝えた時が初めて。そしてこちらの世界へと連れてきた今日が二回目だ。これまでルキアの前で刃更が見せていたのは表の顔だけだったため、

若干裏の顔については疑い始めていたのだが、どうやら報告に間違いはなかったらしい。

……それにしても、母様にも困ったものですね。

扉が開いた様子もなかったため、どうやって中へ入ったのか疑問だったが、まさかシエーラの空間トンネルとは。その存在についてはルキアも知ってはいたが、この部屋にまで作られていたとは気付かなかった。やはり――自分はまだまだあの母には及ばないのだと思い知る。心の中で嘆息したルキアは、気持ちを切り替えて刃更を見据えた。

「――だとしても、あの母がよく貴方の提案に応じましたね」

「万理亜がゾルギアに協力していたのは、母親であるシエーラさんを助けたい、心での事です。だから、もしゾルギアの件で万理亜がこれ以上何らかの責任を取らされようとしているなら力を貸して欲しい……俺はそうシエーラさんに言っただけです」

刃更の意見は至極真っ当なものだが、あのシエーラがそれだけで刃更の提案を呑むとは思えない。あの手の隠しルートは、作った本人だけが場所や使用方法を知っているからこそ意味のあるものだ。他の者に使わせれば、そこから情報が漏れてしまい、いざという時に使えなくなる可能性だってある。その事をシエーラが理解していない筈がない。

恐らく――シエーラは刃更の事を相当気に入ったのだろう。その事には触れず、

「……成る程。あの母が珍しく親心を出したようですね……ですが、貴方がここまでマリアを気に掛けるのは何故なのです？　元とはいえ、貴方は勇者の一族です。そして私は若輩ではありますが、ラムサス様の副官――その私の執務室に無断で入り込むような真似をすれば、どのような処分を下されても文句は言えないと理解していますか？」

ルキアの発した警告に、マリアが顔色をサッと青ざめさせた。

「っ――ま、待って下さいっ！　刃更さんは――」

「黙りなさいマリア――私は今、刃更殿と話をしています」

マリアの反論を切り捨てると、ルキアは刃更へと向き直った。すると、

「……ええ、貴女が言った可能性は理解の上です」

と刃更。その答えに、

「――ならば、何故このような真似を？　自分の命が惜しくはないのですか？」

刃更の行動が、ともすれば死に値してもおかしくないものだと暗に伝えると、

「もちろん命は惜しいですよ……だけど、それでも譲れないものはあるでしょう。確かに、サキュバスのマリアは貴女やシェーラさんの家族です。穏健派に属している魔族だし、今は亡き先代魔王のひとり娘の護衛という、非常に責任ある任務にも就いている」

でも、と揺るぎのない声で刃更。

「以前、貴女の使いの女性が万理亜を引き渡すように言ってきた時にも伝えましたが……改めて言っておきます。成瀬万理亜という少女は、俺達の家族です。そこに居る彼女は、俺の大切な妹だ。だから、彼女を傷つける者を俺は誰であろうと許さない――たとえ、それが実の姉である貴女だろうとも」

「――――っ」

その答えに、マリアが僅かに身体を震わせて――そして、

「俺はもちろん、実際に危険な状況に陥った澪や、巻き込んでしまった柚希も万理亜の事はとっくに許しています。俺達の間には、もう蟠りなんてないんです。万理亜はもう充分すぎる程に後悔した――そもそも万理亜一人に澪の護衛を命じたのは貴女達でしょう」

一息を置いた後、ルキアに向かって刃更は言い放ってきた。

「護衛任務を怠ったと彼女を罰するというのなら、その前にご自分達の責任をどうするか考えるべきだと思いますが――違いますか、ルキアさん？」

東城刃更には、魔界で解決・確認を行なわなければならない事が三つあった。

一つ目は、ウィルベルトの力を巡る「澪」の問題の解決。

二つ目は、穏健派に任せた「ゼスト」の安否と現状の確認。

……そして。

三つ目が、ゾルギアの件に関して「万理亜」が処罰を受けないようにする事だ。

流石に魔界の政治や情勢に大きく関わる澪の問題はすぐに解決する事は無理だが、再会したゼストが置かれている状況は悪くはない事は確認できた――次は万理亜だ。

そのためにも、

……この場で免責を認めさせる。

ルキアはラムサスの副官だ。彼女に万理亜の免責を認めさせれば、穏健派内で万理亜の責任を問われる事はなくなる。宣言にも似た言葉で万理亜を守ると告げた刃更に対し、

「……成る程。東城刃更、貴方の言い分は解りました」

ルキアは納得の言葉を口にした。

「しかし、『家族を傷つける者は許さない』という言葉は響きこそ良いですが、それは家族ならば過ちを犯しても無条件に許し、見逃して、甘やかす事を言うのですか？」

「……過ちを犯した事に気付けば正しますし、時には注意や叱る事だってしますよ」

でも、と刃更。

「そもそも話の前提が違うでしょう。万理亜がゾルギアに従っていたのは、あくまで母親であるシェーラさんを助けるために仕方なく――」

「――だとしたら、私達か貴方達のどちらかに状況を説明し、指示や助力を請うべきでした。この子が自分の感情を優先し、勝手に単独で動いてしまったせいで、一時は澪様がゾルギアの手に落ちてしまうような事態を招いてしまっています。幸いにも最悪の結果にはなりませんでしたが、そんなものは結果でしかない。母を助けようとしたマリアの感情は確かに尊いものだったかもしれません。ですが、だからといってそれが正しいという事にはならないでしょう――そうは思いませんか？」

「それは……っ」

ルキアの言っている事は道理だ。反論できず思わず言葉に詰まると、

「そして刃更殿――貴方達もまた、誤った事をしていたと気付いていますか？」

「……俺達が？」

問い返すこちらに、ルキアは「ええ」と頷いて、

「ゾルギアの一件の後――貴方達は『母親を助けるためだった』という美談を免罪符にして、マリアを叱り、罰を与える事をしませんでしたね。貴方達は、それでマリアの心を救ってあげたつもりだったのでしょう。そして、以前と同じくこの子の傍で一緒に暮

らす事を選んだ」

「……それの、体どこが間違いだって言うんです？」

「解りませんか？　貴方達は――貴方達を裏切ってしまっていたマリアが抱いている罪悪感を無視して、何も気にせず傍に居ろと言ったのです。自分達はお前を許している――だからお前も自分の事を許してやれ、と。その結果――マリアの心に、貴方達への罪悪感が消える事なく残り続けてしまうという可能性を考えずに」

「っ――――？」

ルキアの言葉に、刃更はハッとなって万理亜を見た。すると、

「……」

万理亜は無言で、瞳を伏せたものにしていた。その表情が、刃更に真実を教えてくる。

思わず言葉を失った刃更に、

「……それまで通り貴方達の傍に居られる事を嬉しいと思う反面、近くに居る事で大切な貴方達を裏切ってしまった自分を常に意識させられる。さらに貴方達は、気にする事はないからという優しくも残酷な言葉で、間接的に笑顔を強要してこの子を追い詰めましたね。その苦しみを、貴方達を裏切っていた自分が負うべき罰としてマリアは受け入れたのでしょう。そうしてこの子が浮かべた笑顔を見て、貴方達はさぞ満足していたの

でしょうね――その裏に、どんな想いがあるのかなど考えもせずに」

と、冷たい侮蔑を含んだ声でルキア。

「自分達の間に蟠りはない？　笑わせますね。これまで澪様や柚希殿が主従契約の呪いを発動させてしまった時は、その原因である後ろめたさを何度となく解消して、彼女達の心を楽にしてきたでしょうに――貴方は一体、マリアの何を見ていたのです？　善意や好意の押し付けは、時に悪意よりも残酷です。マリアを守る、守りたい――そうやって貴方達が取った行動や決断は、果たして本当にこの子を救うものだったのですか？　貴方達にとって心地良いだけの、単なる自己満足だったのではないのですか？」

「違う、俺達は……っ！」

辛辣な問い掛けに、刃更は反論しようとした。だが、それ以上の言葉がなかった。先程から俯き無言のままでいる万理亜の表情が、どちらが真実かを物語っていた。すると、

「――違うと主張するならば、貴方にチャンスをあげましょう」

とルキアは言った。

「もし本当にマリアが……成瀬万理亜が貴方の家族ならば。そしてマリアを罰する事で、この子の心を救おうとした私を止めると言うならば。他でもない――貴方が罰する事

でマリアを心の苦しみから救い、私とこの子に貴方の正しさを証明してみせて下さい」

「俺が万理亜を……」

挑発を含んだルキアの言葉に、刃更は呆然と万理亜を見た。すると、万理亜はなおも無言のままで――しかし、

「万理亜……」

東城刃更は、万理亜がゆっくりと自分の方へとやって来たのを見た。そして、

「……」

万理亜は何も言わずに、そっと上目遣いにこちらを見上げてきた。

その瞳と表情は、こちらの心を決めさせるには充分なものだった。だから万理亜の両肩に手を置くと、東城刃更はルキアへ向かって言った。静かに、しかし力強い声で、

「良いですよ――それで万理亜が救われて、貴女が俺を万理亜の家族と認めるなら」

8

淫魔への罰は、種族の伝統として痛みだけでなく羞恥も与える事で行なわれる。

姉のルキアは、武器としても使い慣れている鞭を振るう事でそれを行なおうとした。

よってルキアが、刃更に自分の鞭を貸そうかと提案したが、万理亜を安心させるようにこちらの肩に手を置いてくれていた刃更は、静かに首を横に振って断って、そして言った。

「万理亜に罰を与えるならば、それは俺自身の手で直接行ないます」

そして刃更が万理亜に行なうと告げたのは、臀部への平手打ちだった。

要は尻叩きだ。それならば、人間も悪さをした子供へ親が躾として行なっている、ごく一般的な罰だから、というのがその理由だった。そして現在、

「……っ」

頬を赤くしながら、成瀬万理亜は刃更に尻を叩かれるために、ある事を行なっていた。

それは己の服を脱ぐ事だ。普通に尻を叩く分には、服を脱ぐ必要はない。だが、普通に尻叩きを行なおうとしていた刃更に対し、ルキアが注文を付けたのだ。

――それでは羞恥が足りない、と。

ルキアは単に鞭を振るって万理亜に痛みだけを与えようとしていたのではない。鞭によって徐々に服を剝ぎ取り、万理亜の躰と心を丸裸にしてゆくつもりだった。そして全てを晒しながら罪を告白させ、罰を与える事で万理亜の罪を償わせようとしていたのである。

だから、万理亜は服を脱ぐ事になった。ルキアが鞭で衣服を剝ぎ取ろうとしていたのと同じ事を刃更がやろうとすると、刃更が彼の手で万理亜の服を引き千切らなくてはならない。だが、それに刃更が難色を示したため、ルキアの命令で万理亜は服を脱ぐ事になった。

刃更に脱がされるのではなく、自分で脱いでいるのは、既に罰が始まっているからだ。

そしてショーツ一枚になった万理亜は、ソファに腰掛けてこちらを待っていた刃更の眼の前に立つと、そっと視線を合わせて、

「すみません、刃更さん……私」

自分を偽っていた事を謝った。すると刃更は左手で、そっとこちらの頬に触れてきて、

「本当は――ずっと苦しかったのか？」

「……すみません」

刃更の言葉に、万理亜が謝罪の言葉を繰り返すと、

「……――解った。これからお前に罰を与える」

と刃更が言った。

「でも、それはお前がゾルギアに従って俺達を裏切っていたからじゃない。本当は苦し

かったのに、無理して笑ったりなんかしてたからだ。たとえ血の繋がりはなくても、たとえ種族が違っていても。俺達はもう家族で――俺はお前の兄貴だ。勝手かもしれないけれど、俺はそう思ってる。だから、妹のお前が悪い事をしたら、お前を叱る……良いな？」

「……はい」

万理亜がコクンと頷くと、刃更はルキアへと視線を移して、

「ルキアさん。前に万理亜が胡桃に、俺が澪や柚希と結んでいる主従契約の呪いと、ほぼ同じ効果と解除方法の魔法を掛けた事があるんですが――貴女にもそれはできますか？」

「可能です。ですが、何故そのような事を？」

問い掛けを返したルキアに、刃更はこちらの右手を取りながら、

「罰を与える事は承知したけれど……また万理亜が俺達を気遣って自分を偽らないためにも、コイツの中から苦しさとか後ろめたさとか、そういう気持ちを完全に消してやるためにも、やるんだったら徹底的にやりたいんです――ゼロになるまで」

「……催淫状態に陥れば、快楽によって感じる痛みが和らぎます。それでは罰としての意味を成さなくなると思いますが？」

ルキアの指摘に、刃更が静かに言い放つ。
「そんなものは、やり方次第でしょう」
すると、ルキアはしばし無言で刃更を見詰めた後、
「……解りました。同族で行なう事はあまりないのですが、私の洗礼をマリアに与えましょう。サキュバスとしての力は私の方が上ですから、問題なく効果は出る筈です」
そう言って、ゆっくりとこちらへと歩み寄り、
「マリア……私の眼を見なさい」
「……はい、ルキア姉さま」
言う事を聞けば自分がどうなるかをしっかりと理解しながら、それでも万理亜は姉の言う事に従った。するとルキアの瞳にサキュバスの刻印の魔法陣が浮かび上がり、
「あ――――……」
それを直視した途端――万理亜の幼い躰の中で異変が起きた。下腹部の奥に甘い熱の塊が生まれ、それが猛烈な勢いで膨れ上がり始めたのだ。ルキアが言ったように、姉の力は万理亜よりも上だ。当然、洗礼による催淫の力も凄まじく、
「んっ……、あっ……あぁぁぁ……っ」

甘い声と共にふらりと躰を揺らした万理亜は、そのまま刃更の腕の中へ。
そんな万理亜を、刃更はソファに座っている自身の膝の上へ乗せた。
それは刃更の太股の上に万理亜が胸を乗せるようにして、横向きになったもの――
万理亜の尻を、刃更の手で最も叩きやすい位置に来させる体勢だ。そして、
「――始めるぞ」
刃更が低く発した言葉に、
「ふあっ……あ、ん……――っ」
彼の膝の上で熱の篭もった吐息を漏らしていた万理亜は、ゴクリと喉を鳴らして、
「……はい。刃更さんお願いします……貴方に嘘をついていた私に、どうか罰を」
そう懺悔の言葉を口にした――次の瞬間。万理亜の尻を打った刃更の平手が、ルキアの執務室に響き渡る程の大きな破裂音を鳴らした。
激しい衝撃に一瞬感覚が麻痺し――しかし、すぐに灼熱にも似た激しい痛みが来る。
勇者の一族の刃更が、本気でこちらの尻を打った――手首のスナップを最大限に利かせて、これ以上ない軌道と角度で叩かれた。発目なのに、その威力はあまりにも凄くて。

洗礼による快楽で、痛みが和らぐだなんてとんでもなかった。ショーツを穿いてはいるが、とてもじゃないが我慢できない。だから万理亜は、瞳に涙を浮かべて悲鳴を上げた。

「っっ――ふあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ♥」

それは自分でも信じられないような、蕩けそうなほどに甘えきった声で。はしたないその嬌声は、当然のように万理亜自身の耳にもはっきりと届く。

……わ、私……、何でこんな……？

とっさに万理亜は呆然となったが、その先を考える事はできなかった。

二発目が、万理亜の尻を打ったからだ。

「ひっ、あぁぁあ――――っ♥」

快楽はない。あるのは間違いなく痛みだけだ――なのに、口からは甘い声が出てしまう。

感覚と反応が一致しない。その事実に思考を混乱させた万理亜は、

……あ。

ふと気が付く。自分が得ている痛みは、あくまで尻の表層的な部分によるもので――それより先の深い場所で、ある変化が起きていた。

下腹部の奥底にあった熱の塊が、その大きさを増していたのだ。そして三発目を受け、

「あ～～～～～っ♥」

ようやく成瀬万理亜は理解する。

万理亜の躰の、痛みと快楽の回路が繋がってしまっていた。火傷にも似た痛みを得ながらも、それ以上に熱い快楽が上回っている。

だから――そこからはもう、その甘い疼きに墜ちるのはあっという間だった。

四発目で感じる痛みに快楽が並び、五回目では痛みを上回って――六回目を数える頃にはもう、快楽しか感じないようになっていた。だから――もう止まらない。

「はあっ……刃更さっ、あっ♥　ふっ……あ、んうっ♥　ううっ、はっ――あぁっ♥」

刃更に尻を打ち鳴らされる度に、万理亜は滅茶苦茶に感じてゆく。下腹部の奥にあった快楽の熱の塊は、やがて尻はおろか太股から腰辺りにまで広がっていて。乾いた音を小さな尻で奏でられる度に、万理亜は悦びの表情で甘い嬌声を上げてゆく。

そして十発目を貰った瞬間、

「っ――――はあぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～♥」

躰の中に蓄積していた快楽の塊を一気に弾けさせ、成瀬万理亜は盛大に達した。

激しい絶頂感に視界が真っ白になり、刃更の膝の上で幼い躰をわななかせた万理亜は、快楽の残滓に顔を蕩けさせ、甘い吐息を漏らした。そして刃更はそれ以上、こちらを叩いてくる事はなくて――だから万理亜が、幸せな充足感に浸っていると、

「――まさかとは思いますが、それで終わりではないでしょうね？」

こちらの一部始終を見ていたルキアが冷たい声で言ってくる。

「たかだか十回、申し訳程度に尻を打って……一度絶頂させてやれば、女が何もかも忘れるとでも？　だとしたら随分と軽く見られたものですね――女も、万理亜の苦しみも」

「……」

失望の言葉を放ってきた姉に対し、刃更は無言を返した。

それは、まだ続きがあると言わんばかりで、

「あ……んぅ、……刃更、さん……？」

快楽に潤んだ瞳で、肩越しに振り返った万理亜は気が付く。こちらの尻を叩いていた刃更の手が、自分のショーツのウエスト部分に伸びており、

「あ……」

抵抗する間もなく、万理亜はショーツを膝の辺りまで降ろされた。小さいながらもまろみを帯びた万理亜の尻は、刃更に叩かれていたせいですっかりピンク色に染まっており、

……凄、い……。

痛みはなかった。まだ快楽の残滓があるためか、万理亜の尻は刃更の膝の上で、気持ち良さそうに小さく揺らめいている。すると刃更がこちらを見て、

「……万理亜」

そう言って刃更は万理亜の左手を取ると、こちらにその尻を触らせてくる。

……や……私、こんなに熱くなって……。

刃更に叩かれた事で、痛みと——それ以上の快楽を味わった自分の尻の状態を、万理亜は確認させられた。そこは快楽の火で炙られ、火傷しそうな程に熱くなっていて、

「あ――――…」

ふと万理亜は浮遊感を得た。刃更が下からこちらの躰を持ち上げ、膝の辺りにあった万理亜のショーツを完全に脱がしたのだ。そして万理亜は、再び刃更の膝に乗せられる。

――だが今度は、尻を叩きやすい横向きではなかった。

それは刃更と向かい合う、対面座位のような体勢で、

「……」

成瀬万理亜は理解する。今度は、自分は己に快楽という名の罰を与えてくれる相手を見ながら、むき出しにさせられた尻を叩かれるのだと。自分の中にある、全ての苦しみがゼロになるまで。万理亜は抵抗はしなかった。もう彼に自分を偽りたくなかった。だから、黙って彼がそうしてくれるのを待った。すると、ショーツという鎧を剝ぎ取られた万理亜の無防備な尻に、刃更の右手が振り下ろされた瞬間、

「っ――――はあぁぁぁぁぁぁん♥」

発目から万理亜は再び達して――後は刃更に叩かれる度に、彼の顔を見ながら、成瀬万理亜は絶頂を重ねてゆく。

刃更の膝の上で、彼によって己の尻を罰して貰う幸せ――それは快楽と共に震えるような幸せを万理亜に与えてくれて。やがて万理亜の幼い躰が、立派に女の反応を見

せ始めた。

尻を叩かれているのに胸の先端が硬く張り詰め、上だけでなく下の口からもいやらしい涎を垂らし始めたのだ。まだ幼さを残したままの万理亜の躰が、刃更に尻を叩かれる度に開発され、大人になってゆく。それでも十回を超えた辺りでとうとう限界を迎え、

「っ～～～～～～～～～～～～～～～♥」

成瀬万理亜は刃更にギュッと抱き付きながら、激しく全身を震わせた。そして、

「……っ、はぁ……っ、んぅ……ふぅ、あ……♥」

もはや何も考えられず、甘い吐息を漏らす以外に何もできなくなっているこちらに、

「――――」

刃更はさらに右の手を振り上げた。それを見て、

「っ――刃更殿っ！」

流石にルキアが横から止めに入る。しかし――次の瞬間、限界を迎えていた万理亜の尻がそっと気遣われた。刃更の手が、こちらを労るように優しく触れてくれたのだ。成瀬万理亜は、いっぱい頑張った己の尻を、良い子良い子と頭を撫でられるように褒められ、

「……頑張ったな」

ふと耳元で彼の温かな声がした。だから、
「……っ」
大きな両の瞳から涙をポロポロ流しながらコクンと頷くと。
万理亜は、抱き付く力を強くしながら何度も刃更の名を繰り返した。
そして、
「――これでもう、万理亜の罰は充分だと認めて貰えますね？」
「……」
刃更から問い掛けられたルキアは、無言を返す事で肯定を伝えた。
すると刃更は表情を穏やかにすると、膝の上にいるマリアの髪をそっと撫で始める。
――マリアは現在、刃更の膝の上で眠っていた。
ルキアが、鞭で罰を与えた後にマリアに使うため用意していた炎症を抑えるローションを刃更に渡し、それを彼の手で優しく尻に塗られている間に意識を失ったのだ。
とはいえその寝息は穏やかで、マリアの心と身体に問題がない事を伝えてくる。そして、
……成る程。

優しい瞳でマリアの頭を撫でる刃更を見ながら、ルキアはシェーラが刃更を気に入った理由が解ったような気がした。マリアが生まれる前の事なので彼女は知らないが――今回、刃更がやった洗礼付きの仕置きは、かつて母が好んでやっていたものだ。

刃更と話す中で、きっと彼の中に自分と近いものがあるのを感じたのだろう。そんな彼がマリアの傍にいる事に頼もしさを覚えつつも、同時にルキアは若干の末恐ろしさを得る。

――元勇者の一族で、戦神ジン・トージョーの息子。それだけでも既に充分規格外なのだが、現在こちらの眼前で浮かべている穏やかな表情に対し、

……この少年が時おり見せる、私でさえゾッとするようなあの冷たい瞳は……。

或いは刃更の中には、途方もなく暗く冷たい感情が蠢いているのかもしれない。

……とはいえ。

刃更は自分と約束した通り、マリアを心の苦しみから解放してみせたのだ。自分以外の者が可愛い妹の心を救ってみせた事は少し癪ではあるものの、だからといって想像の域を出ない不確定な可能性を刃更に見て不安を抱くのはやりすぎだろう。

それよりも、今のルキアにはやらなければならない事があった――だからそうした。

「――――」

ルキアが執務室の入り口をキッと見詰めると、それだけで木製の扉が勢い良く開け放たれ――すると扉の向こうに居た少女が、突然の事にビクッとなった後、

「っ――あ……あ……」

ペタンと廊下の床に座り込んだ。それは刃更と共に魔界へ来た勇者の一族の少女で、

「胡桃……っ？」

刃更が驚きの声を上げるが、膝の上でマリアが寝ているため立ち上がれない。そんな刃更の代わりに、ルキアはつかつかと胡桃へと歩み寄った。そしてその眼前に立ち、

「城の中を勝手に歩き回っただけでなく、中の様子を盗み聞くような真似までして……勇者の一族は随分とはしたない真似をしますね」

「あ……あた、し……」

ルキアが冷酷に見下ろすと、胡桃は混乱した様子でこちらと刃更達とを交互に見る。きっとマリアに加え、刃更まで戻りが遅いため様子を見に来て――そして先程まで室内で繰り広げられていた音と声を耳にしてしまったのだろう。かといって、そのまま部屋へ逃げ帰る訳にもいかず、しっかり最後まで聞いてしまったに違いない。

……さて、どうしたものでしょうね。

刃更が使用した、シエーラ構築の空間転移ルートを使わなかったのは、既に刃更が使

用してルキアにバレていると思ったからか。主従契約を結んでいる事で刃更の位置を探知できるのは澪と柚希だが、先代魔王の娘である澪が行けば目立つ。柚希も隠密行動は可能だろうが、精霊魔法で姿を隠せるため、胡桃が最も適任だと判断したのだろう。胡桃や澪らが刃更やマリアを心配し、彼らの様子を見に来てしまった心情は理解できる。

……ですが。

生憎、今のルキアは少しばかり機嫌が悪かった。だってそうだろう。本当なら今頃、マリアを心の苦しみから救い、彼女に甘えられていたのは自分だった筈なのに。どうせできる筈がないと思って任せてみたら、まんまとその役を刃更に奪われてしまったのだから。

「あ……ああ……っ」

「……」

マリアの嬌声を聞き続けて興奮と官能を得ていたのか、胡桃の瞳は潤んでいる。そんな彼女を見ていると、ルキアの中で徐々に暗い興奮が湧き上がってきた。

いつもは、ラムサスの副官として——そしてメイド達を束ねる立場として、己を厳しく律して我慢しているだけで、本来サキュバスとしての本能はマリアよりもルキアの方が上なのだ。そして——今のルキアは、そんな己の本能を抑えられるほど冷静では

なかった。

——だから、ルキアは己の暗い感情を、眼の前の胡桃にぶつけて晴らす事にした。

サキュバスの洗礼を掛けてやったのだ。同じ種族のマリアですら立っていられない程の催淫の力を、魔界へ来て力が弱まっていたところへまともに浴びせられた胡桃は、

「え——あ……」

ふっと瞳から正気の色を失い、そのままくたっと床に倒れる。そんな胡桃をルキアは抱きかかえると、そのまま自身の執務室の中へと連れ込んだ。

「ルキアさん、何を……っ！」

眼の前の蛮行に咎めの声を発した刃更に、

「刃更殿には言った筈です。ここはラムサス様の副官である私の執務室です」

胡桃を抱きかかえてこちらへ来ながらルキア。

「そしてこの城は、かつてはウィルベルト様が暮らし、今も穏健派を束ねている方達が暮らしている場所なのです。貴方のように母の空間トンネルを使わなかったという事は、彼女はここに来るまで城の中を無断で歩いてきたという事——ならば、私の好きにさ

せて貰っても文句は言えない筈です」

そう言ってこちらを見るルキアの瞳は、完全にサキュバスとしての本能に火が付いており、さらにその身体からS級クラスのオーラを放ってくる。

「っ……胡桃は俺と主従契約を結んでいない。澪達は位置は解っても、ここへ来るまでどうやって城内を歩けば良いかまでは解らない筈だ。なら、俺の時のようにシエーラさんが道を教えてくれたと考える方が自然でしょう」

先程のルキアは、どこかシエーラを尊敬しているかのような口ぶりだった。よって刃更は彼女の名前を出し、どうにかしてルキアを冷静にさせようと試みるが、

「母など関係ありません……ここは私の部屋です。全ての決定権は私にあります」

そう言って、万理亜を抱いた状態で刃更が座っているソファとは、テーブルを挟んで反対側のソファに胡桃を寝かせると、流れるような手付きで胡桃の服を脱がし始める。

冷静さを失いながらも強引に服を破ったりしないのは、辛うじてサキュバスの本能より、メイドとしての自覚が勝っているからか。ルキアはあっという間に胡桃を下着姿にすると、ホックを外してブラジャーを剥ぎ取った。形の良い胡桃の胸を露わにしたルキアは、そのまま胡桃のショーツへと手を伸ばし、

「っ――――胡桃は貴女の妹さんの大切な友人でもある！　そいつを傷つけるような真似をしたら、そんな貴女を万理亜がどう思うか考えろっ！」

叫ぶように忠告の制止を放ったこちらの言葉に、

「――――」

胡桃のショーツに掛かっていたルキアの手が止まった。こちらに背中を向けているため、ルキアが今どんな顔をしているのか、刃更は窺う事はできない。だが――しばしの沈黙の後、ルキアはスッと立ち上がると、こちらへと振り返り、

「……良いでしょう。マリアに免じて、もう一度だけチャンスをあげます」

と、未だにサキュバスの本能が治まっていない瞳でこちらを見て言った。

「では私の代わりに、貴方がこの少女にする所を見せて、私を満足させなさい――もし満足させられないようなら、その時はマリアの友人だろうと構いません。私が彼女に、正体を失うまでサキュバスが与える本当の快楽を刻みます。これ以上の譲歩はありません」

「っ……解りました」

刃更は仕方なく頷いた。とてもじゃないが、これ以上の説得や交渉は無理だ。下手

にルキアを刺激したら、今度こそ胡桃が何をされるか解らない。だから、
「……」
刃更は万理亜を起こさないように、そっと自分の膝から降ろしてソファへ寝かせると、ルキアと胡桃のソファへと向かった。

9

胡桃には、誰にも言えない秘密があった。
それは――ずっと心の中で隠してきた想い。
自分もまた、柚希や澪と同じように刃更と主従契約を結びたいと思っている事だ。
……だって。
野中胡桃は思う――いつの間にか、自分と刃更達との間には差ができてしまったと。
――以前、霊槍『白虎』を操る早瀬高志や、お目付役の斯波恭一と共に刃更達と戦った時。自分達との間には、まだそこまで大きな差はなかったと思う。
戦闘力も、刃更との関係も。
ところが先日、柚希の応援として東城家を訪れると、刃更と柚希・澪・万理亜の

人との関係がとんでもない事になっていて、さらに彼らは戦闘力まで大幅にアップしていた。

それは、胡桃を大きく引き離すもので――だから、胡桃が自分も刃更と主従契約を結びたいと思うようになったのは自然な流れだった。

……でも。

残年ながら、それはできないのだ。柚希はもう迅の庇護を得て刃更の傍にいる事を長老に認められているため、東城家を離れる事はないだろうが、胡桃は命令があればすぐに《里》へ戻らなくてはならないからだ。よって、もし体内におかしな魔力の波動がある事がバレでもしたら、両親に迷惑が掛かってしまう。ただでさえ柚希の件で、野中家は微妙な立場に追いやられてしまっているのだ。相手が刃更とはいえ、もし魔族の使用した契約魔法を結んでいるとバレたら、長老達がどんな判断を下すか解らない。下手をすれば刃更に責任が及び、処分対象と認定されてしまう可能性だってある。そうなれば、今度はもう『白虎』を使用した高志などでは済まない。いよいよ、あの斯波恭一が直接動いてくる可能性だってある。しかし、そんな事態だけは何としても避けなければならない。

……だって無理だもん……っ。

あの化け物の相手は、今の刃更や自分達のレベルでは厳しい……それこそ迅でないと勝つ事はできないだろう。その迅にしても、もう一線を退いて随分経つ……よって、あの斯波が動いてくるような事になる訳には絶対にいかなくて。

刃更と主従契約を結びたいという想いを、胡桃は己の心の中で抑えていた。

――でも、それでも胡桃は少しでも皆に追い付きたかった。

万理亜にいやらしい事をされても受け入れたのだって、自分だけ仲間外れなのは嫌だったからだ。それでも、刃更達の絆は主従契約だけではなく、一緒に死闘を潜り抜けた事もあって――万理亜に乗せられて皆といやらしい行為を共にしても、どうしても胡桃は自分だけ距離を感じてしまっていた。だから、そんな孤独感を埋めるために、胡桃は夜眠る時は、精霊に頼んで魔法で「ある夢」を見せて貰っていた。

それは野中胡桃の中にある願望――自分が刃更の恋人になった夢だ。

――夢の中では、胡桃はどんどん刃更と恋愛関係を深めていっていた。

万理亜に乗せられて参加するような、幾つもの手順や段階を飛ばしたものではなく、デートを重ね、手を繋ぎ、腕を組んで――そうやって少しずつ関係を育んでいったのだ。

それが、野中胡桃の純愛だった。

そして、週間ほど前、とうとう胡桃は夢の中で刃更とキスをした。現実では、様々な淫らな事をされているものの、残念ながら胡桃だけはまだ刃更とキスをした経験がない。だから、夢の中だけでも柚希達に追い付けた事が嬉しくて。それから胡桃は、いつも夢の中で刃更と数え切れない程のキスをしてきた。実際にはファーストキスはまだだが、夢の中では既に舌を絡めた大人のキスを何度も経験し、さらに大胆な事もするようになっていた。

……ふふ。

実際には刃更や万理亜にされるだけの胡桃だが、夢の中では結構大胆なのだ。

現実に、男の人と最後まで関係してしまうと精霊の加護を失ってしまう事もあり、夢の中でも怖くて最後まで行く事はしていないが、それでもただ触れられて快楽や絶頂を刻まれるだけでなく、キスをしながら刃更にされるのは本当に幸せで——だから最近は、夢ではいつも胡桃から刃更を求めている。

——そして現在、野中胡桃は夢を見ていた。

現実とは思えないような浮遊感と、躰の奥にある甘い疼きがその理由だ。

そして胡桃は、見覚えのない室内でショーツ一枚になり、刃更にいやらしい事をされていた。ソファに腰掛けた彼の膝の上へ座り、背後から胸を揉まれ、首筋にキスをされ

ている。だが初めて訪れる場所で、自分がこのような姿で刃更とこんな真似をする筈がない。

だから、間違いなくこれは夢だった。ならば、自分から求めなければ損だ。そう思い、

「あぁんっ……刃更兄ちゃぁん♥」

胡桃は彼の膝の上で躰の向きを変え、己の唇を彼に重ねた。キスをする――それも、

「くちゅ……んぁむ、む……っ、はぁ……れちゅっ……刃更兄ちゃ…んちゅぷ」

いやらしく舌を絡めて、自分から刃更を求めた。すると彼が驚いたような顔になり、

……あ、れ……？

胡桃は思考をぼんやりとさせながらも、疑問を得た。自分が見る刃更との夢は連続している。よって、この刃更は積極的な胡桃を知っていないとおかしいのだ。どうして――キスをしながら疑問を得た胡桃は、次の瞬間あり得ないものを聞いた。それは、

「……――胡桃」

僅かに困惑したような刃更の声だった。だからその瞬間、

「っ――!?」

野中胡桃は、思わず息を呑んでいた。自分は今、確かに刃更の声を聞いた。だが、そ

れはあり得ない。夢と現実を区別するため――そしてどれだけ幸せな夢でも、それが現実を上回らないように、胡桃の夢は全ての音を消しているからだ。

「そ、それじゃあ……」

辺りを見回した胡桃は、そこでようやく気が付いた。己の背後――向かい側のソファに、裸の状態で気を失っている万理亜を抱いたルキアが腰掛け、こちらを見ていた。よって、もう誤魔化せない。野中胡桃は認識する――これは間違いなく現実なのだと。だから、

「う、嘘……や、やだっ、あたし……っ」

はしたない自分をルキアに――否、それ以上に刃更に知られてしまった。おまけに、こんな状況でファーストキスまで。気が狂いそうな程の羞恥で、激しく取り乱したこちらに、

「っ――落ち着いてくれ、胡桃」

眼の前の刃更が、驚くほど真剣な声で言ってきた。まるで戦闘中かのような鬼気迫るその声音に、胡桃は思わず混乱するのを忘れて刃更を見た。そして、

「続けるぞ――良いな？」

ルキアに見られているという異常な状況で、現実は勿論、夢の中でも絶対に言わない

ような事を刃更が口にした。こちらに有無を言わせぬその口調に、

……あ……。

野中胡桃は思い出す――否、理解した。戻りが遅い刃更と万理亜の様子を見に来た自分が、ルキアの執務室の前で中の様子を窺って……そしてその後、どうなったかを。

つまり、この状況は自分が下手を打ったせいという訳だ。そして、この状況は恐らくルキアに命令されての事なのだろうが、刃更が大人しくそれに従っているという事は、

……万理亜かあたしが、人質になっちゃったんだ。

それでも、どうしようもなければ刃更は戦う事を選んだだろう。だが、流石にこのタイミングは無理だ。まだ何もしていない――まだ澪を取り巻く状況を改善するような事は何もできていないのに、魔界へ来たばかりのこの段階で、穏健派と戦うだなんて。

これでは、自分達が何のために魔界へ来たのか解らない。

こんな恥ずかしい姿を、ルキアに見られるのは堪らなく嫌だったが、

……あたしのミスだもん……っ。

刃更達に追い付けないどころか、本当に自分が足を引っ張ってしまうなんて。しかもこんなに早く。とっさに湧き上がる己への情けなさと悔しさに、

「……っ」

胡桃はギュッと眼を瞑って唇を噛み締めた。しかし――それも一瞬の事だ。

自分が足を引っ張ってしまったのならば、やらなければならない事は決まっている。

これ以上はもう足を引っ張らず――そして自分のミスを挽回する。相手はサキュバス――それも万理亜の姉だ。ならば、ルキアがこちらに何を求め、どうすれば良いのかは予想が付いた。いつも万理亜にさせられている事をすれば良いのだ。そして、

……なら、いっそ……っ！

胡桃は、再び己の思考を切り替えた。この状況を現実ではなく、己が見ている夢だと思う事にしたのだ。そうしたらもう、ルキアの目は気にならなかった。だから、

「うん。お願い……続けて、刃更兄ちゃん♥」

そう言って、もう一度自分から刃更にキスをした。二度目のキス――すると今度はもう、刃更も驚く事はなくて。すぐに互いの舌が絡み合い、いやらしい音を立て始める。

夢では決して聞こえる事のない淫らな水音は、胡桃を夢よりもなお夢中にさせて。

胡桃は己の敏感な場所を、全て刃更に触れて貰った。

「あんっ、はぁっ……やっ♥　んぁっ……ひぁ、ふあぁあん、兄ちゃ……っ、刃更兄ちゃぁあん♥　はぁ、ん……やぁんっ……やっ、はぁあああぁあんっ♥」

胸も尻も太股も、いやらしく触られた場所全てが気持ち良くて。刃更の手が後ろから

ショーツの中に入ってきて、乱暴に胡桃の尻を揉んできたが、今の胡桃にはそれすら幸せだった。そんな刃更の手を後ろで摑んで下へ導くと、最後の一枚だったショーツが脱げ始め、淫らに腰を左右にくねらせながら足を抜くと、ついに裸の胡桃になった。

それから再びキスをして、胡桃はさらに官能を高めてゆき――そして。

「お願い刃更兄ちゃん……胡桃の脇、舐めて……」

野中胡桃は、とうとう自分から己の弱点を攻めてと懇願した。

するとこちらの胸を吸っていた刃更の動きが一瞬止まり、

「……」

「……」

互いの息が届く距離で、永遠にも似た一瞬の沈黙を交わし合うと、そこから先はまるでスローモーションだった。

胡桃は、ゆっくりと己の頭の後ろで両手を組んだ。

刃更はただ、そっとこちらの脇に彼の口を寄せてきた。

それを見た胡桃は、そっと両の瞳を閉じて――次の瞬間、

「――――」

野中胡桃は、己の全てを絶頂の果てへと飛ばした。だから、

……あ……。

全ての気力を使い果たし――胡桃は刃更の腕の中へと倒れてゆく。

そして、彼の腕に抱き留められたのを感じると、一気に胡桃の意識が薄れていった。

それでも最後に、

『……』

遠くでルキアの声がしたのを、胡桃は辛うじて耳にした。

それは胡桃が望んでいた言葉――自分と刃更を認めたもので。

だから野中胡桃は、安堵と共に己の瞳を閉じた。

視界が全て闇になったが、不安はなかった。

刃更の温もりが、確かに胡桃の事を包んでくれていた。

第2章　絡み合う思惑の中で

1

ルキアの執務室で、万理亜と胡桃に罰という名の快楽をたっぷりと刻んだ後。
刃更は、ルキアと共に澪と柚希が待つ客室へと戻った。
――万理亜と胡桃は、別室でしばらく休んでから戻ってきて貰う事にした。
胡桃は激しい絶頂の快感によって完全に意識を飛ばしていたし、万理亜の躰にもまだ刃更によって与えられた快楽の余韻が強く残っている。二人とは主従契約を結んでいないため、そんな状態の彼女達を連れて客室へ戻れば、澪と柚希に主従契約の呪いが発動してしまう可能性がある。魔王ウィルベルトの娘という事は、澪は穏健派の魔族らにとっては王女のようなもの。そんな澪を、こちらへ来てすぐに屈服させて楽にしてやらなければいけないような事態は、なるべく避けるべきだと判断した。
……それに。

もう大丈夫だとは思うが――胡桃を任せておけば、万理亜も刃更達から離れようなどとは考えないだろう。穏健派とはいえ立派な魔族だ。勇者の一族を快く思わない者はいる。そんな中、無防備な胡桃を一人にするのは危険だからだ。先程の行為で刃更がどれだけ万理亜を大切に想っているかは伝わったとは思うが、そう簡単に消えるような後悔ならば万理亜も苦しんだりはしない。よって念のため保険を掛けたのである。そして、

「――悪い、戻るのが遅くなった」

そう言いながら刃更が客室の扉を開けて中へ入ると、澪と柚希はまだお茶の最中だった。ゼストも刃更がこの部屋を出た時と同じく、壁際に控えている。

ただ――刃更に空間トンネルを使わせた事をルキアが叱りに来るのを予見していたのか、シエーラの姿は既になかった。その代わりなのかは解らないが、別の者が澪達とお茶を共にしている。長い白髭を蓄えた老人の男性魔族だ。すると、

「――――」

その老魔族を見た瞬間、刃更が執務室へ現れても顔色を変えなかったルキアが、反射的に身を硬くし、表情を僅かに厳しくした。その緊張を感じ取った刃更は、

……誰だ？

ルキアの反応を見るに、ただ者ではなさそうだ。彼とテーブルを共にしている澪や柚

希とは打ち解けているようにも見えるが、念のため警戒はしておいた方が良いだろう。
「あ、刃更……――お帰りなさい」
すると刃更が戻った事に気付き、澪が安堵の表情を浮かべた。しかし、万理亜と胡桃の二人ではなくルキアと共に戻ってきた事に眉を顰める。それは柚希も同じようで、
「ねえ刃更……万理亜は一緒じゃないの？」「……胡桃も、そっちに行った筈」
二人の安否を尋ねてくる澪と柚希に、刃更はそちらへ歩み寄りながら、
「アイツらなら大丈夫だ。万理亜の問題は解決したし、少ししたら戻ってくるよ」
「解決したって……本当に？」
チラリとルキアを見てから、こちらへ視線を戻した澪に、刃更が「ああ」と頷くと、
「そっか……良かった」
ホッと胸を撫で下ろしたように澪が嘆息する。柚希も安心したのか、それ以上を訊いてくる事はなかった。だから――今度はこちらが問う番だ。テーブルの脇に立ち、
「で、こちらは――」
誰かと、刃更が問い掛けを放とうとすると、刃更の真横からその答えが来る。
「――クラウス様、貴方が何故ここに？」

一段と冷たい声音でルキアが尋ねると、クラウスと呼ばれた老魔族は柔和な笑みで、
「おおルキア殿……どうされた、そのような怖い顔をして」
「先に問うたのは私です。何故ここにクラウス様が？」
「なあに、たまたまです。城内でマリアを見たという者が居たので、もしやと思いましてな。まだこの老骨の勘も、そう捨てたものではないようです。しかし――ルキア殿も意地の悪い事をなさる。澪様がいらっしゃったのに、我々には教えてくれぬとは」
「……ラムサス様のご指示です。ご自分がお戻りになるまでは他の方達には内密にと」
「成る程……そういう事でしたか。いかにもあの方の仰りそうな事ですな」
ほっほっと笑ったクラウスは、ルキアから刃更へと視線を移すと、
「貴方が刃更殿ですな……あのジン・トージョーのご子息という」
そう言って椅子から立ち上がると、こちらへ握手を求めてくる。
「ご挨拶が遅れ、失礼しました――儂はクラウスと申す老骨です。どうぞよろしく」
「どうも……東城刃更です」
と握手に応えながら刃更。すると、クラウスは笑みを深いものにして、
「ふむ……確かに彼の面影がありますな」

「親父を知っているんですか？」

本人の佇まいや、ルキアの反応と言葉遣いから推し量るに、クラウスは穏健派でもかなり上の地位に居るのだろう。そんなクラウスと迅が顔見知りな事に驚きを得た刃更に、

「まあ……大戦中に戦場で少し見かけた程度ですがな。いや、貴方の父上には、我らは実に苦しめられたものです。そんな戦神と呼ばれた男のご子息が我らの城を訪れる日が来るとは……それだけ時が流れたという事でしょうな」

と遠い目をしながらクラウスが言うと、柚希が静かな声で、

「刃更……彼は昔、ウィルベルトの参謀を務めていたらしい」

「ウィルベルトの参謀って――じゃあまさか、賢老って呼ばれていたっていうあの？」

「そんな大層な者ではありません。見ての通りのただの老いぼれです。まあ他の者よりも年だけは喰っていましたので、たまに意見を求められた時は幾つか考えを披露したりはしましたがな」

刃更の言葉に、クラウスは「ほっほっ」と笑いながら謙遜する。

……それなりの地位とは思っていたが、ウィルベルトの元参謀か。

だとしたら、現在の穏健派内でも相当の発言力を持っていると考えるべきだろう。

そして、ルキアとの会話の中から感じ取れる対立感情から察するに、

……澪にウィルベルトの後を継がせて魔王にしたい連中のひとりってところだな。

澪からウィルベルトの力を抽出しようとしているラムサス――彼とは対立した考えの持ち主だ。ならば、その配下のルキアと険悪な雰囲気なのも頷ける。すると、

「しかし、こんな使用人が使うような部屋へお通しして……このようなみすぼらしい部屋ではロクにくつろぐ事もできぬでしょう」

そう言ってクラウスが軽く手を叩くなり、室内に何名ものメイドが入ってきた。

「皆様にはもっと良い部屋をご用意してあります。刃更殿も戻った事ですし、そちらへ移るとしましょう」

クラウスがそう告げると、現れたメイドらが刃更達の荷物を運びだした。ルキアやゼストが着ているものとは異なる色の衣装を纏う彼女らは、ルキアの部下ではなくクラウスの下に付いているメイド達だ。それを見たルキアは、いけないとばかりに、

「お待ち下さいクラウス様。勝手な真似をされては困ります。この部屋へお通ししたのは、ラムサス様のご指示で――」

「――なあに、ラムサス殿が戻られたら儂からあの方へご報告します。それならば何の問題もありますまい。この城は広い――ウィルベルト陛下のひとり娘である澪様やそのご友人には、もっと相応しい部屋が幾らでもあるでしょう」

こちらの制止の言葉を遮るようにクラウスが言ってくるが、ルキアは譲らない。

「貴方の勝手な考えなど関係ありません。澪様達のお世話は私に任されています」

「ならばこの部屋が相応しいというのも、貴女やラムサス殿の勝手な考えでしょう？」

だが、クラウスは一歩も引かなかった。

「澪様をお迎えに何う栄誉はお譲りしたのです。せめてお通しする部屋をご用意させていただく事くらいはさせていただきたい。心配せずとも、この老いぼれが一度こうと決めたら譲らぬ頑固爺で、誰にも止められない事はこの城の皆が知っております。ルキア殿に止められなかったとしても、ラムサス殿も仕事を放り出したと責めはせんでしょう」

「クラウス様……！」

苛立ちを滲ませたルキアに、クラウスが止めの言葉を放ってくる。

「ルキア殿――これ以上、この儂に何か文句がおありですかな？」

「……っ」

その言葉に、ルキアは唇を噛んだ。確かに自分は穏健派の現トップであるラムサスの副官ではあるが、だからといって穏健派のナンバー2という訳ではない。そして眼の前にいる老人こそが、この穏健派内ではその地位に立っているのである。

止められない――この場の主導権を握られ、立ち尽くす事しかできないルキアに、

「納得いただけたようですな。別室で休んでいるというマリアや柚希殿の妹君には、後ほど改めて別の迎えをやりますので――では失礼」

クラウスは余裕の笑みで言うと、困惑気味の澪や刃更らを連れて部屋を出て行った。

壁際のゼストは、己の判断を迷わせていたようだったが、

「――行きなさい。貴女に刃更殿の世話を命じたのは母です。クラウス様も、貴女を遠ざけるような真似をして、母と事を構えるような真似まではしないでしょうから」

「……はい」

こちらの言葉に、ゼストは静かに頷いて、礼すると刃更の後を追い掛けていって。

後にはただ――ルキアだけが室内に残された。

「いや、お見苦しいところをお見せしました……」
長い廊下を、刃更達を先導するように前を歩きながらクラウスが言った。
「ウィルベルト陛下が亡くなられてから大した歳月も経っておらぬというのに、陛下への敬意をおざなりにし始めている者が一部おりましてな……お恥ずかしい限りです」
「あの……どんな方だったんですか、ウィルベルトさんって」
と刃更は尋ねた。刃更や柚希が知っているのは、大戦に参加していた《里》の大人達から聞かれされた情報だけ。穏健派を束ね、一時期は魔界全土もまとめ上げたものの、人間界から軍を引いて魔界で平穏に暮らす道を選んだ、歴代最強と謳われた魔王というものだ。だが、そんなものは歴史の教科書に載っている偉人レベルの情報でしかない。どのような存在で、何を成したかは知っていても――本当の所は解らないからだ。すると、
「――誰よりも強くありながらも、誰よりもお優しい方でした」
と、虚空を見上げながら静かな声でクラウスが言った。
「それまでは、かつて自分達を追放した神族への復讐を果たそうと、貴方たち人間の世界を足掛かりに、神界へ攻め入る事ばかり考える好戦的な思想を持つ者が大半だったのですが――ウィルベルト様が現れた事で変化が起こりましてな」

何故ならば、

「力を持たぬ者が理想を叫ぶのではなく、誰よりも強大な力を持ったあの方が、非戦と平和を唱えた――それが我らの心を打ち、強く揺さぶったのです。害された祖先の復讐という過去に囚われる事なく、己の日々を幸せにするため、今と未来に生きようと。そんなウィルベルト様の想いに、次第に共感や賛同する者が増えてゆき――気が付けばウィルベルト様を長とした我ら穏健派は、この魔界で最大の勢力となっていたのです」

そして、

「先の大戦で軍を引く決断をなされた後――陛下の理想はあと一歩で実現できるところまできていました。この魔界に、初めて一切の争いをなくした平穏が訪れる筈だったのです――それなのに、運命はあまりにも残酷でした」

そこで、クラウスは一息を置いて言った。

「ある日――ウィルベルト様が、重い病に罹られてしまったのです」

「……重い病？」

オウム返しに問い返した刃更に、

「はい……最後まで病名はおろか原因も解りませんでしたが、ウィルベルト様は最強の

魔王と謳われたその強大なお力をみるみる失ってゆかれ……理想の実現を果たせぬまま、志半ばで静かに息を引き取られました。貴方達の世界で言うと、一年半ほど前の事です」

「……」

クラウスの言葉に、刃更の隣を歩く澪が無言で表情を曇らせた。実の父親の死の理由を知った事と――ウィルベルトが死の間際に、澪へ魔王の力を託したせいで、澪の育ての両親は彼女の眼の前で惨殺された事。その両方を想い――寂しさや哀しさと、やるせない想いとが、澪の中で今複雑に絡み合っているに違いなかった。だから、

「――――」

刃更は歩く足を止めずに、隣に並んでいる澪の肩を抱いてやった。実の父親も、育ての両親も今はもういないけれど――それでも今、自分が澪の傍にいると伝えるように。

「……うん」

するとこちらの想いが伝わったのか、澪はそっと呟いて少しだけこちらへ身を預けてくる。そんな刃更達のやり取りに気付きながらも、敢えてクラウスは振り返ってこずに、

「ウィルベルト様が亡くなられた後、レオハルトという若者を新たな魔王として擁立し

たタカ派・保守派連合が台頭してきたのに対し、こちらはウィルベルト様の兄君であるラムサス殿が穏健派を率いる事になったのです。しかし、ウィルベルト様に兄君が居たなどという話自体初耳だったのですが、このラムサス様が非常に厄介でしてな……」

と、そこで嘆息を一つして、

「ウィルベルト様が病に臥せられたとの報を聞いたのか、ふらりとこの城へ現れたまではまだ良かったのです。ところが、何を思ったのかウィルベルト様は、久方ぶりに再会されたというラムサス殿に自分の亡き後の穏健派を任せるなどという遺言を残されてしまいまして……するとウィルベルト様が亡くなられた後、後を継がれたラムサス殿は弟君の死を悲しむ様子を一切見せぬばかりか、我々の反対を押し切って、魔界の平和や愛娘である澪様に対するウィルベルト様の想いを踏みにじるかのような決断や命令を下されていったのです。ウィルベルト様の理想に共感してこれまで付いてきた者達も、そんなラムサス殿には従えぬと次々に穏健派を去ってゆき……かつて魔界最大と言われた我々の勢力は、最早見る影もなくなってしまいました」

無念そうに、ウィルベルト亡き後の現在を語り続ける。

「ルキア殿も、以前はウィルベルト陛下に心酔していたのですが……ラムサス殿の副官となってからは、すっかり彼の言葉にしか従わぬようになってしまいましてな」

そして、3フロア吹き抜けの巨大ホールの宙を横切る渡り廊下に差し掛かりながら、

「ですが――我々の多くは、現在も陛下への忠誠を微塵も失っておりません」

そう言って立ち止まったクラウスに倣い、足を止めた刃更・澪・柚希の三人は、

『――っ？』

思わずほぼ同時に息を呑んでいた。階下のホールにずらりと整列し、こちらを見上げる者達の姿が眼に入ったからだ。メイドや執事、庭師や料理人と思しき使用人達から、帯剣している兵士と思われる者達まで、ざっと数百名はいる。

圧巻の光景に若干気圧されたこちらへ、彼らは声を揃えて言った。

『――ようこそおいで下さいました、澪様』

熱気を帯びた声の重なりに、ホールの空気がビリビリと振動する。

「えっ……あの……」

あまりの事にたじろいだ澪に、クラウスは笑いながら、

「澪様……簡単にで構いません。彼らに応えてやっていただけますかな。彼らは、ウィルベルト陛下のご息女である貴女がいらっしゃるのを、ずっと待ち続けていたのです」

「応えるって、言われても……」

助けを求めるようにこちらを見た澪に、刃更は止むを得ないと頷きを一つして、

「あまり難しく考えなくて良い。クラウスさんが簡単で構わないって言ってただろ。軽く手を振ったりすれば良いんじゃないか？」

「ええ、それで充分です」

クラウスに笑顔で頷かれ、澪は階下のホールから見えやすい位置へ歩み出てゆく。

「えっと……こう？」

階下にいる者達へ向かって軽く手を振った――その瞬間、わっと歓声が上がった。

まるで彼らが待ち望んでいた、新たな主の訪れを心の底から喜ぶかのように。そんな中、

……何だ？

ふと彼らの視線が澪だけでなく、他にも向いているのに気付いた刃更はそちらを見て、

「――――」

彼らが何を見ていたのかを理解し、僅かに眼を見開いた。ホールの反対側――澪の背後にある壁の上方に、巨大な肖像画が掛けてあった。

澪と同じ髪色をした男性魔族だった――間違いない、ウィルベルトの肖像画だ。

階下から見上げれば、さぞ澪が亡きウィルベルトの遺志を背負い、ウィルベルトもまた澪を見守っているように見えるアングルになっている事だろう。

「……刃更、良いの？」

同じものに気付き、こちらにだけ聞こえるように柚希が囁いてくる。柚希が気にしているのは、階下の彼らが澪に新たな魔王となる事を期待している者達だからだ。澪が望んでいるのは、魔族の勢力争いに巻き込まれる事なく人間界で平穏に暮らす事である。魔王になる気はない以上、彼らに思わせぶりな態度を取るのはできるだけ避けるべきだが、

「仕方ない……ここまで舞台を整えられたら、下手に断れば不要な角が立っちまう」

苦い表情で言った刃更がチラッとクラウスを見ると、この演出を仕組んだと思われる老魔族は、温かな眼差しで澪の事を見詰めていた。

配下を利用して澪の精神的な外堀を埋め、その圧力で「自分が魔王にならなくては」と義務感を抱かせるといったところか――流石は賢老クラウス、老獪なやり口だった。

恐らく、かなり前から準備を整えていたのだろう。或いは「澪に相応しい別の部屋を用意している」と強引にルキアを言葉でねじ伏せてあの部屋を出たのも、案外これが狙いだったのかもしれない。

……だが。

ルキアが体育祭の日の晩に東城家に現れ、魔界へ来るように告げてきてから一ヶ月強。

準備をしてきたのはこちらも同じだ。相手がどのように動き、どんな策を弄してくるか――刃更達はあらゆる可能性を考え、その対処法を練ってきている。こういう真似をしてくるだろう事も想定の範囲内だ。無論、この後も全てがこちらの想像通りに事が運ぶとは思ってはいないが、

……取り敢えず、あっちのペースに嵌まる事だけは避けないと。

ここは魔界であり、そして穏健派の拠点なのだ。地の利は絶対的に向こうにある。

――だが、と東城刃更は己自身に言い聞かせる。

それでもやるしかないのだ。澪や自分達が望んでいる未来を手にするためには。

これからも人間界で――皆で一緒に暮らしてゆくためには。

3

予期せぬ澪のお披露目が済んだ後。

澪達が案内された新たな客室は、最初の部屋とは雲泥の差のある豪華な部屋だった。

家具や細かな調度品は勿論、絨毯に壁紙、天井に至るまで全てが高級感で溢れてお

り、広さも天井の高さも段違いの構造は、空間の大きさをこれでもかと主張していた。

何せ寝室が六つにリビングが二つ、ダイニングも二つ。トイレも複数備えられている。

澪からウィルベルトの力を抽出したいラムサスやルキアと、澪を新たな魔王としたいクラウス達とでは、抱いている感情も真逆だろうとはいえ、ここまで豪華な部屋だと流石に落ち着かない。もう少し普通の部屋にして欲しいとクラウスに頼んだのだが、穏やかな老魔族に「なに、すぐに慣れますとも」と一笑され、遠回しに却下されてしまった。

澪達のいた日本では、今頃は明け方の時間帯だが、万理亜から事前にこちらとの時差を聞いて準備しておいたため眠さを感じる事はない。

そして――新たな客室に入ってから一時間後、成瀬澪は賑やかな喧噪の中にいた。

夕食までかなり時間があるという事もあって、クラウスの薦めで刃更や柚希と共に城下を見学しに来たからだ。他に刃更専属のメイドであるゼストと、さらにもう一名、

「――という訳で、ここが市街地の中心に位置するアーデルベル広場ですっ！」

と、メイド服を身に纏った少女が笑顔で両手を広げて誇らしげに言った。ノエルという名の彼女は、クラウスが澪達に付けてくれた市街地の案内役だ。初対面で自己紹介をしてくれた時から明るく人懐っこい雰囲気の彼女は、ウィルベルトの娘である澪に

も物怖じせずに話し掛け、あっという間にこちらと打ち解けていた。

中央に巨大な噴水が設けられ、ウィルベルトの像も建っているアーデルベル広場からは四方へ大通りが走っており、ここを経由地にして多くの者達が行き交っている。

そしてこの広場自体も沢山の民衆で溢れかえっており、屋台や露店などには多くの客の姿があって――まるで、東京の都心の繁華街のような賑やかさだった。

――ただし、澪達の世界の繁華街とは大きく違う点があった。

一つは現在、穏健派が現魔王派と戦争状態にあり、それはこの街も例外ではない事。

広場の中には、兵士と思しき者達の姿を見つける事ができた。彼らの腰にある剣や、身に纏っている鎧が、否応なしに臨戦状態である事を教えてくる。そしてもう一つは――当然ながら、ここにいる全員が魔族であるという事だ。にも拘わらず、人間である澪達が紛れ込んでも誰も気に留める事はない。それは澪達が変装しているからなのだが、

「……本当にバレないものなのね」

「ね、言った通りだったでしょう。安心されましたか？」

そっと呟きを漏らした澪に、ノエルは笑みを返してくる。確かに澪・刃更・柚希の三人は変装してはいるものの、それはあくまで身に纏っている衣服だけ。刃更は執事服を、

澪と柚希はメイド服を着ているだけで、それ以上の事は何もしていない。だが、たったそれだけでも澪達の正体がバレないのには、一つの理由があった。それは、

「結構居るのね……あたし達と同じような姿の魔族って」

澪の視線の先――通りを行く魔族達の多くが、人間に近い姿をしている。無論、中には獣など人と掛け離れた姿をした者もいるが、ほとんどは人間に近い姿をしており、それこそ中には人にしか見えない者もいた。

そのひとりが、他ならぬ案内役のノエルだった。彼女も外見は人間にしか見えないが、それでも立派な魔族であり、この広場の中に違和感なく溶け込んでいた。よって、外見的にはノエルと同じ種族にしか見えない澪達がいても、誰も騒ぐ者はいないのである。

「まあ、私たち魔族の祖先は神界から追放された神族ですし……人間だって神族を模して作られた種族ですからね。近い姿なのは当然といえば当然なんですよ」

魔族の中には、中世の頃に人間界で人と交わって子を成した者が数多くおり、そのまま人間界に留まった者達が、ヴァンパイアやエルフとして伝わったのだという。

当然その一方で、作った子供を魔界へ連れ帰った者もいたらしい。だが産まれた子供は純血の魔族ではないため、差別の対象となりやすい――その受け皿となったのが、ウィルベルトを長としていた穏健派だったそうだ。このウィルダートの都には、そうし

た魔族と人間の血が混ざった者が数多く暮らしており、そうした者達同士で婚姻を結ぶ者も少なくなく、世代を重ねる毎に人と変わらない姿の魔族も増えてきているらしい。

すると「というか」とノエルは笑って、

「澪様だって、ウィルベルト様の血を引いているけど、人間と同じ姿じゃないですか」

「……そっか。うん、そうだよね……」

指摘され、成瀬澪は改めて思い至る――自分が普通の人間ではないという現実に。

普段はあまりその事を実感や自覚をした事はない……というより、意識的にその事を考えるのを避けていた。本物の両親だと思っていた養父母を眼の前で殺されて、自分は先代の魔王の娘だと知らされて、その現実を突き付けられて、

……でも。

養父母を殺されたあの日まで送ってきた普通の人間としての日々は失われてしまったけれど――それでも成瀬澪は、自分は人間だと思う。そう思うのは、今は亡き養父母と暮らした日々の思い出があるからだ。あの宝物のような日々はもう戻ってこないけれど、それでも今の澪を形成している財産だった。

そして今、自分には新しく大切なものができた。刃更は澪をちゃんと人間として見てくれるし、万理亜も澪に魔族としての自覚を持つように強要してきた事はなかった。柚

希や胡桃も、今では普通に接してくれているし、学校にも相川や榊を始めとする友人達がいる。そんな彼らとの日常が、今の澪が何よりも大事にしているものなのである。

……そう。

もう一度と、今ある日常を失わない。そのために自分はこの魔界へ来たのだ。

刃更達と一緒に、一人の人間として――成瀬澪として生きてゆくために。

ノエルの案内で広場から東へ行くと、市場や商店が軒を連ねる一角となった。

広場に勝るとも劣らない活気に満ちた通りを皆と共に歩きながら、

「……」

野中柚希は、無言で周囲への警戒を行なっていた。

――胡桃や万理亜と一緒に城に残る選択肢はあった。だが、そうなると刃更と澪が二人だけになってしまう。ここは魔界であり、周囲は全て魔族なのだ。ノエルやクラウスは大丈夫だと言っていたが、澪はともかく刃更の正体がバレれば騒ぎになったり、下手をすれば命を狙われる可能性だってある。ならば戦力は多い方が良い。

……でも。

魔素の濃い魔界では、『咲耶』の力の半分も出せない。ゾルギアの館で戦った時と同じか、下手をすればあの時よりも届く加護の力は少ないだろう。

魔剣ブリュンヒルドを使う刃更、魔族の血を引く澪、魔族であるゼスト。クラウスが澪の案内役として付けた以上、ノエルも戦う力は持っている筈。だとしたら、この中で最も足手纏いになってしまうのは柚希の可能性が高い。しかし、ゼストやノエルに戦える力があっても、それがアテになるとは――彼女達が味方になるとは限らない以上、やはり柚希も同行する方が良いというのが、刃更や澪と話し合って下した自分達の判断だった。

……それに、刃更と澪を二人きりにしたら危険。

こちらは主に別の意味だ。二人で行かせて、後で帰ってきた時に無駄に澪の顔が赤かったり、メイド服のボタンがずれていたり、下着を着けていなかったりしては堪らない。

ゼストやノエルもいるので大丈夫だとは思うが、万が一に備えて自分が傍で眼を光らせておくべきだろう。よって一時も気を抜かないようにと、柚希が意識を集中していると、先頭を歩いていたノエルが気まずそうにこちらを振り返った。そして、

「……あのー、柚希殿」

「何？」
「勇者の一族の貴女的に、ピリピリしちゃうのは解るんですが……そんなに緊迫したオーラを出されると、余計に周囲から注目されちゃいます。笑顔、笑顔でお願いします」
「……解った。……にこり」
「口で言ってどうすんですっ!?　しかも無表情な上に超棒読みっ！」
即座にこちらへ突っ込んだノエルに、刃更が「まあまあ」と笑顔で彼女を制して、
「でも柚希……ノエルの言う通りだぞ。あんまり気を張りすぎていると、却って悪目立ちしちまう。もう少し肩の力を抜こうぜ」
「……ごめんなさい」
「謝る事はないって……お前が一緒に来てくれて心強いんだからさ」
刃更はそう言って、こちらの頭にポンと手を置いてくれる。そんな刃更の優しい笑顔と言葉が嬉しくて。だから野中柚希は彼の手を取ると、
「刃更――……」「――ちょっと待ちなさい」
身を寄せてそっと顔を近付けようとしたところを、澪が速攻で制止した。
「アンタね……何ちゃっかり往来でキスシーンに入ろうとしてくれてるワケ？」

「……ちっ」
「『ちっ』じゃないわよっ！　させる訳ないでしょ！」
そう言って、澪は刃更の手を引いてこちらから引き離す。
「は、はいっ、皆さんこちらに注目ーっ！」
そんな柚希達のやり取りを見ていたノエルが手を上げた。
「何とあそこのお花屋さん、お城にも卸しているウィルダートで評判のお店なんですっ」
これ以上騒ぎを大きくして、周囲の眼を引いてしまうのを避けるためだろう。上げた手を振り下ろすようにして、ビシっと通りの先にある店を指さした。
「へえ――意外と庶民的な店を使ってるんだな」
「はい……何でも、店主の方がウィルベルト陛下とは占い付き合いらしくて」
感想を漏らす刃更に、話題を変えられたノエルが胸を撫で下ろしたように頷くと、
「ん、ノエルじゃねえか……何だ、また城を抜け出して買い食いか？」
ふと店の脇から、花屋には不釣り合いなゴツイ男性が現れた。その言葉が心外だったのか、エプロン姿の男性に対し、ノエルはムっとしたように唇を尖らせて、
「違いますう。今日は、新人さん達に街を案内してあげてるんですー！」
「ああ、確かにそっちの連中は見ない顔だな……しかし、お前なんかが先輩風を吹かす

ようになるたぁ、いよいよ城の働き手不足も深刻だな」

と、刃更達を見ながら男性魔族。

「し、失礼なお花屋さんです……担当者に言いつけて、お城への納入業者から外して貰いましょうかね。オルテガさん、謝るなら今の内ですよ」

「ハッ……お前にそんな権限ねえだろ」

「本気で鼻で笑わなくたって良いじゃないですかぁっ。言ってみただけですよっ！」

ムキーとなるノエルに、オルテガと呼ばれた男性はフンと鼻を鳴らしてから澪を見て、

「ところで――そっちの嬢ちゃん、ウィルベルトの娘だな」

「――折角ウィルベルトが人間界へ逃がしたのに、馬鹿共がわざわざ呼び寄せやがって」

オルテガの言葉に息を呑むような緊張感が生まれ、その場の空気が一気に張り詰めた。

……な、何で？

成瀬澪は俄に動揺した。澪からウィルベルトの力を抽出しようとしているラムサ

スや、澪を新たな魔王としたいクラウスらとも違う、今の日常を大切にしたいという澪の望みに近い考えをオルテガが持っていたのも驚いたが――それ以前の問題があった。澪が魔界へ呼ばれた事は、混乱を避けるため、般には秘匿していた筈だ。

どこからか情報が漏れている？　すると即座に刃更と柚希が動き、前後で澪を挟むように身を入れ、オルテガから庇うようにして立った。そして、

「――どこからその話を？　先程の話だと、城に出入りしているって事でしたが」

刃更が鋭い視線を向けながら問うと、オルテガは面倒臭そうに首の後ろを掻きながら、

「花屋の親父に凄むんじゃねえよ小僧――安心しろ、別に誰からも聞いてやしねえ」

「……だったら、どうして？」

と澪が問うと、オルテガが瞳を細めて、

「そうか、お前さんは顔を知らないんだな……よく似てるんだよ、アーシェさんにな」

「アーシェって……あたしのお母さんの？」

「ああ。顔立ちはそっくりだし、瞳の色なんかはそのまんま同じだ」

本当の両親のように思っている養父母との思い出や記憶が強すぎて、澪はこれまで生みの母親の事について深く考えてこなかった。知っているのは名前と、

「……亡くなってるんですよね。あたしを産んですぐに」

静かな声で言ったこちらに、オルテガは頷く。

「そうだ。その位は聞いていたか」

「はい。万理亜から――護衛に来てくれた娘から、あたしの生まれを聞いた時に」

「……」「……」

澪の言葉に、既にその事実を知っている刃更と柚希が、それまでの無言とは異なる、澪を気遣った沈黙を生んだ。その事を有り難いと思いながら、

……お母さん、か……。

両親が養父母だった上に魔族で、さらには実の父親が魔王だったと知らされたのだ。ゾルギアに養父母を殺され、その窮地から脱した後――万理亜から諸々の説明を受けた際、澪から尋ねた質問の中には、当然ながら生みの母親についても含まれていた。そして聞かされたのである。父親であるウィルベルトだけでなく、母親はそれよりもずっと前――澪を産んですぐに亡くなったのだと。

「――しかしご主人、よくアーシェ様の顔を御存じでしたね」

すると、それまで黙っていたゼストがふと口を開いた。

「アーシェ様は魔族の血を引いてはいたものの、人間界で生まれ育ち、人の血を色濃く

受け継いでいたと聞きます。澪様の外見が人と同じなのも、彼女の遺伝子によるものでしょう。そんなアーシェ様はウィルベルト様と出会って恋に落ち、澪様を身篭もって、そしてこちらの世界で暮らすようになりました」

ですが、

「純血の高位魔族であるウィルベルト様と、魔族の血を僅かしか引いていない人間界育ちのアーシェ様とでは身分に差があり、二人が結ばれる事にかなり反対した方達もいたと聞きます。タカ派や保守派に追及する口実を与えぬよう、城内の別塔でひっそりと生活する事を余儀なくされ、肖像画はおろか写真すら残されなかったため、城内ですら彼女の顔を知る者はごく一部を除いてほとんどおりません――貴方は、一体どのようにしてアーシェ様のお顔をお知りに？」

「――彼女がそんな生活をさせられていたせいだ」

ゼストの問い掛けに、オルテガは声のトーンを重いものにして、

「ウィルベルトは一緒に過ごす時間をかなり取っていたみたいだが、それでも彼女が塔で送っていた生活は、ほとんど軟禁のようなものだった。そんな彼女にとって、ウチの店が納入していた花は数少ない楽しみの一つだったようでな……上手い世話の仕方や育て方を教えて欲しいとウィルベルト経由で頼まれて、何度か教えに行ったのさ」

と、遠くを見る目を虚空に向けて言った。

「良い娘さんだったよ……不自由な生活をさせられても、文句一つ言わないで。いつも、ウチの自慢の花よりも華やかな笑顔でいてな。たとえ周囲から祝福されなくても、ウイルベルトと一緒になれて、傍に居られて、アイツとの子供を――お嬢ちゃんを身篭もれた事を、彼女は本当に喜んでいた」

「……そう、ですか」

成瀬澪には、自分が魔王の娘だという実感はない。そのため城で使用人や兵士らから歓迎の言葉を貰っても、どんな反応をすれば良いのか澪には解らなかった。

だってそうではないか。養父母は、ずっと澪に血縁関係がない事を秘密にしていたのだ。顔も知らない生みの親より、育ての親である養父母の事を、本当の両親だと感じても仕方がないだろう。

――そして、澪自身それで良いと思っていた。

必要なかったからだ。魔王だった実の父親が、今際の際にその力を澪に受け継がせたせいで、澪は狙われ、育ての両親は殺される羽目になった。澪の平穏な日常を直接的に奪ったのはゾルギアだが、間接的に奪ったのはウイルベルトだ。しかも既に亡くなっており、文句を言う事もできない。よって彼や彼の奥さんの事など、どうでも良いと思っ

ていた。養父母の仇を討つ――それだけが、東城刃更と出会う前の成瀬澪の全てだったのだから。そして、今回魔界へ来る事になったのも、澪の中にあるウィルベルトの力が大きく関係している。そのため生みの母親について、改めて考える事はしなかったのだが、

「……ありがとうございます。お母さんのこと教えてくれて」

「嬉しいのか。顔を知らなくても、自分を愛してくれていた母親に似ていると解って」

オルテガに問われ、軽く頭を下げていた澪は小さく苦笑すると、

「嬉しいかと言われると、ちょっと解らないかも……生みの母親とはいえ、名前しか知らない相手の事ですし。――でも、知る事ができて良かったって思えましたから」

そんな澪の言葉に、オルテガは「そうか」と低く言った。すると、

「あのーオルテガさん……澪様の事は他の方にはご内密にお願いできると」

と顔色を窺いながらノエル。

「もしこの話が広まって、出所がオルテガさんだと解ると、私がこの店に澪様達を連れてきた事がバレてしまいます。そうなると、私の立場的なものが大変ピンチな事に」

するとオルテガはフンと鼻を鳴らして、

「要らん心配してないで、さっさと行け――いい加減、商売の邪魔だ」

話は終わりとばかりにこちらへ背を向けると、そのまま店の中へと入っていった。

4

そして――ノエルの案内で市街地をぐるりと一巡りした後。

「――さあ、最後はやっぱりここのお店のお茶で締め括りませんとね」

再びアーデルベル広場へと戻ると、ノエルは刃更達をカフェに案内した。広場を一望できるオープンテラスを備えたこの店は、老若男女に人気の繁盛店だ。ノエルの後に続いて刃更達が店のカウンターに並ぶ中、ゼストは店内に視線を巡らせる。

「？　どうしたゼスト？」

「……刃更様。私は外で待っておりますので、お茶は皆さんでどうぞ」

刃更にそう告げて一礼すると、ゼストは踵を返して店の外へ出た。

そして、その足で彼女が向かったのは店の裏手にある薄暗い路地だ。

……ここならば大丈夫でしょう。

店内に、なるべくゼストが顔を合わさない方が良い者達がいた。自分だけならまだし

も、今は刃更達が一緒にいるのだ。自分のせいで迷惑を掛ける訳にはいかない。ひとりになったゼストは嘆息を一つし、もたれ掛かるように店の壁面へ背中を預けた。すると、

『……』

路地奥の暗がりから、ゼストの前に姿を現したものがあった。長く垂れた耳を持った仔猫のような姿。しかし、その額には小さな角が生えている――一角獣の幼子だ。

首輪はしていないため、誰かのペットとは考えにくい。餌を探して森から街へと下りてきたのか、それとも群れから追い出されてしまったのか――いずれにせよ、生きてゆくにはまだ親が面倒を見る必要のある幼さだった。

『――――』

一角獣の子供はゼストを見上げると、とてとてと歩み寄ってきた。そしてゼストの足下に来ると、こちらの靴の匂いをフンフンと嗅いでくる。無防備なその振る舞いに、

「ここはお前の居るべき場所ではないでしょうに……お前も行く当てがないのですね」

ゼストは腰を落とすと、小さな頭を撫でてやった。すると一角獣の子供は嬉しそうに眼を瞑り、ゼストの手にじゃれついてきて。ゼストは思う――この子は自分と同じだと。

――ゾルギアは、末席とはいえ現魔王派を束ねる枢機院の一員でもあった男だ。

ゼストはそんな彼の配下として作られ、そのように生きてきた。そんな主のゾルギアに殺されそうになったゼストの命を救ってくれたのは、敵だった筈の刃更だった。

刃更に救われたのは命だけではない。居場所を失ったゼストに、刃更は最善の道を模索してくれて。そして穏健派と交渉し、ゼストに新たな居場所を作ってくれた。そして、ゼストの面倒を見る役を買って出てくれたシエーラも、非常に良くしてくれている。

ありがたい話だ。刃更には感謝してもしきれない。

……でも。

それでもふと思う事がある――ここは自分が居て良い場所ではないのではないかと。

そう感じてはいるものの、だからといって今のゼストには他に行く場所も当てもない。

……いいえ。

本当は頼りたい相手はいる。だが、その選択肢を自分は選べずにいるだけだ。だから、

「……刃更様」

ゼストはその名をそっと呟いた。

――この穏健派に身を寄せるようになってから、彼の事を想わなかった日はない。

それどころか、日を増すごとに「彼の傍に居たい」「彼に仕えたい」という想いばかりが募って止められなかった。穏健派の迎えが東城家へ来た日の別れ際、もし何かあれ

ばいつでも戻って来いと彼は言ってくれた。だけど、ゼストはそうする事ができなかった。

……だって。

もし、それで東城家を訪ねて、そして彼に傍にいる事を拒まれたら――今度こそ自分は、どこにも居場所がなくなってしまうから。

――だから今回、刃更の世話を担当させて貰う事が決まった時は本当に嬉しかった。

再会した時、彼が自分の名前を呼んでくれた時は、思わず涙が出そうだった。

……それでも。

ゼストは彼と一緒になる事はできない。東城刃更がゼストの居場所として相応しいと想ったのは穏健派なのだから。そして澪や柚希、万理亜や胡桃の傍に居る時の彼が、ふとした瞬間に見せる穏やかな表情や眼差しは、恐らくゼストに向けられる事はないのだ。

「……だけど、それでも私は――」

ゼストが膝を抱えて蹲ると、一角獣の子供が心配そうにこちらの手を舐めてくる。

そして、そのままの体勢で動かずにいると、

「――おいお前、そこで何してる？」

ふと通りに面した路地の入り口から、乱暴な呼び掛けがあった。顔を上げて声のした方を見ると、そこにゼストがカフェを出ようという判断をさせた者達が立っていた。

青の軽装鎧に身を包んだ四名の男達は、市街地担当の警備兵だ。彼らとは顔を合わさない方が良いと判断して、わざわざ刃更達とのお茶を諦めてカフェから出たというのに、

……もっと店から離れるべきでしたか。

ゼストが自分の判断を悔やんでいると、

「その服……城のメイドか？　いや、確かコイツって――」

こちらの様子を窺っていたひとりが、ゼストの顔に気付いた。すると隣にいた兵士が、

「ああ――この女、上の方で引き取った例のゾルギアの配下だ」

頷きながらそう言った途端、こちらを見る彼らの瞳が、気に冷たいものになり、

「おい、現魔王派の犬だった女がこんな所でコソコソ何をしている。客で混雑している繁盛店を、裏手から吹っ飛ばそうとでもしてたのか？」

「……いいえ。街へ出る用事があり、その途中で少し休んでいただけです」

「こんな所で、ひとりでか？」

訝しがる兵士の言葉に、別の兵士がせせら笑うように言った。
「おいおいグレン、それを言うなら『ひとり』じゃなくて『一匹』の間違いだろ」
ひどく蔑んだ眼差しと共に、侮蔑の言葉を浴びせられる。だが、
「……」
ゼストは兵士の視線と言葉を甘んじて受け入れた。驚く事はない。穏健派の兵士からすれば、現魔王派の女幹部だったゼストに対して良い感情を抱く筈はない。刃更のように敵だったゼストの事を想ってくれる者など、本来はあり得ない存在なのだ。そして、そんな刃更だからこそ、ゼストは彼に許されぬ想いを寄せてしまったのだが。すると、
「上の連中も馬鹿な決定をしたもんだ。よりにもよって、敵の中でも飛び切りのクズ野郎に調教されていた性処理女なんぞを受け入れたりしてよ」
「却ってそれが良かったんじゃねえのか？　自分達が仕込んだメイドには飽きたが、お偉いさんが街の娼館に出入りする訳にはいかないし、城に商売女を呼ぶなんざもっと御法度だからな。中古でも毛色の違う女で遊びたくなったんだろ」
「成る程……上の連中にとっては、良いオモチャが手に入ったって訳だ」
罵りながらこちらを見る彼らの眼が、段々といやらしいものになってゆく。そして彼らの無遠慮な視線がゼストの躰をいやらしく這い、やがて一ヶ所で止まった。彼ら

の視線を釘付けにしたのは、刃更と離れている間に彼への想いを募らせ続けた結果、メイド服の上からでも否応なしに解るほど大きくなってしまった、ゼストの胸の膨らみだ。

城で再会した時の刃更も思わず見てしまった程だ。それでも、あの時は不快ではなかった――むしろ嬉しかった位だ。だが今は、吐き気を催すような不快感しかない。

「――なあ、俺らも少しくらい使ってやっても良いんじゃねえか？」

グレンと呼ばれた兵士がそう言うと、互いに顔を見合わせた彼らは、ニヤニヤと笑いながらこちらへと近付いてきた。それを見たゼストは、

「……行きなさい」

傍に居た、角獣の子供の背を軽く押し、路地の奥へと逃がした。そして、すぐ眼の前に立った兵士達と対峙する。

「……」

「何だよその眼は……どうせ城じゃ、メイドらしく上の連中に奉仕してんだろうが」

下品な笑みを浮かべる兵士に、ゼストは無言を返した。

……そう思われても仕方がないのでしょうね。

ゾルギアが無類の好色家だった事は、魔界でも有名な話だ。その下にいたゼストが、そういった相手をさせられていたと思われるのは無理もないだろう。だが実際には、処

女である事が力の源となるように生み出されたため、ゾルギアがゼストに女を求めた事は一度もない。あのゾルギアが、何故そのようにゼストを作ったのかは解らないが、

……それでも。

今ではその事を感謝している。もしゾルギアに穢されていたら――自分はきっと、生ゾルギアの存在に呪われ続ける事になっていただろう。まだ誰にも触れられた事がないという事実は、今のゼストにとっては大切な希望だった。刃更が魔界にいる間、ゼストは彼の世話を仰せつかっている。その間に、たとえ何かの気まぐれや、戯れだったとしても構わない――刃更が自分を女として見て、そのように触れてくれたなら。

その幸せな瞬間を大切な思い出にして、それだけを頼りに自分はこの先も生きてゆける。

だから、ここで眼の前の兵士達の好きにされる訳にはいかない。

……でも。

自分は刃更のお陰で穏健派へ来て、シエーラの下に付いている身だ。ここで何か問題を起こせば、ふたりに迷惑が掛かる可能性がある――それだけはできなかった。

「……っ」

「そうそう。そうやって黙って言う事を聞きゃ良いんだよ。メイドなんてモンは、そう

する事くらいしか存在価値はないんだからよ」

悔しそうに唇を噛んだこちらに、兵士のひとりが無遠慮に手を伸ばしてきた。

ゼストは服の上から、刃更を想って大きくなった胸を触れられる――その直前で、

「――そこまでにしていただけませんか」

不意に生じた声と共に横から伸びた手が、兵士の腕をぐっと掴んだ。

『っ――――!?』

突然の事に、腕を掴まれた兵士だけでなく他の者達までギョッとなる中、

「……刃更様」

ゼストも驚きに眼を見開いた。そこにゼストが想いを募らせた相手が――東城刃更が立っていた。そして、刃更はこちらにチラっと目配せすると、兵士達に向かって、

「彼女はシエーラ様お付きのメイドです。下手な真似をすれば、厳しい処分は免れないかと思いますが？」

割って入った時と同じく丁寧な口調で兵士達に語り掛けた。恐らく正体がバレて面倒が起きないようにと、変装で身を包んでいる執事服に倣って、使用人のフリで通すつもりなのだろう。すると、平静を取り戻した兵士のひとりが言った。

「何だお前……コイツの仲間か？」

「はい。彼女は私の大切な仲間なんです……おかしな真似をされては困ります」

刃更がニッコリ笑って告げると、腕を摑まれていた兵士は乱暴に刃更の手を振り払い、

「使用人風情が……黙って見てろ。大人しくしてりゃ、後でお前にも回してやるからよ」

ハッと笑って再びゼストへと向き直った。すると刃更は深い嘆息を一つして、

「……仕方ないな」

ゼストの眼の前で、刃更がポツリと呟いた瞬間――兵士の身体が宙を舞っていた。

刃更が行なったのは、合気のようなものだった。

神速で兵士の手を摑んで下方向へと引き込みながら、相手の重心を見抜いて捻りを加える――その結果、ゼストに触れようとした兵士が回転しながら宙を舞ったのである。

ゼストを連れてこの場から逃げたり、大声を上げて通りにいる者にこの状況を気付かせるという手もあった。それでも、刃更が実力行使に出たのには理由がある。

……それだと根本的な解決にならないからな。

口で言っても引いてくれなかったのだ。たとえこの場から逃れられたとしても、もしまた彼らがゼストと出会ってしまったら、同じ事が繰り返される可能性がある。そうな

らないためには、彼らに自分達の行ないをきっちりと反省させなければならない。

だから、背中から地面に落ちて呻き声を上げた兵士に対し、刃更は摑んでいた手をそのまま、気に肩関節とは逆に引き、さらに捻った。するとガコンという音が、連で生じた。肩と肘の関節を外してやったのだ。

「っっがあああああぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

途端に悲鳴を上げて地面をのたうち回る兵士の顔を、刃更は容赦なく蹴った。すると横からの衝撃で顎が外れ、それまでの悲鳴がくぐもった声にしかならなくなる。そして、

「兵士のクセに……使用人風情にちょっと関節外された位でギャーギャー喚くなよ」

そんな彼を見下ろしながら、刃更は敢えて酷薄に言い放った。地面を転がる兵士の心を折るだけでなく、残る二名に恐怖を抱かせるためである。これで引いてくれれば――と期待した刃更だったが、しかしそう上手く事は運ばない。確かにひとりはこちらに恐れをなしたのか腰が引けたものの、残るふたりが抜剣したのだ。対する刃更は、

……ブリュンヒルドを出すのは止めといた方が良いか。

向こうには、最後までこちらを一介の執事だと思わせておきたい。使用人に負けたと

あっては、詰め所に戻っても恥ずかしくて他の仲間には話せないだろうからだ。

「調子に乗るなクソガキっ！」

抜き放った剣で斬り掛かってくる手前の兵士に対し、刃更は横へ半身になるだけで斬撃を回避する。狭い路地だ。石造りの壁にぶつからないように剣を振るおうとすれば、自然と剣筋は限られる。それが熱くなって感情任せに振るったものであれば尚更だ。

「見え見えだな――っと」

スルリと懐に入った刃更は、相手の顎に対して左の肘を斜め上に振り抜いた。

モロに入る。下からの衝撃でガチンと上下の歯が打ち鳴らされ、

「――――」

さらに脳を揺らされた兵士が、その場にくずおれ――そんな兵士の胴に刃更は前蹴りをぶち込んだ。意識を失った兵士の身体が、剣を抜いていたもうひとりへと激突し、

「っ……退け馬鹿っ！」「――馬鹿はお前だ」

足を止めているからそうなる。向こうが僅かにモタついている間に、刃更は左右の壁を蹴って跳躍して相手の視界の外へ。さらに宙で身体ごと縦に回転を行ない、兵士の脳天に右の踵を振り下ろした。足の下で衝撃と共にゴスッという鈍い音が生まれ、そのまま右の足を手前へ引くように振り下ろして刃更は着地。すると、こちらの踵落とし

をまともに食らって、白目を剝いた兵士が、ゆっくりと後ろへと倒れていった。

何とか片付いたか――そう思って息を吐いた刃更は、

「っ――――？」

次の瞬間、息を呑んだ。最初の脅しで戦意を失っていた兵士が両手をこちらへ突き出し、魔法陣を展開していた。狭い路地な上に繁盛店の裏だ。警備兵という立場もある――よって周囲の建物や中にいる者へ被害が出るような魔法は使わない位の良識はあると思っていたのだが、追い詰められたあまりまともな判断ができなくなっているのか。

「馬鹿野郎……っ！」

腐っても兵士だろうに――刃更は魔法が発動する前に倒そうと、地面を蹴ろうとした。

――だが、その必要はなかった。

刃更が動くより先に、展開していた魔法陣が消滅したからだ。そして、

「あ……う……あぁ……っ！」

魔法を使おうとしていた兵士は今、地面にへたり込み、恐怖に顔を引き攣らせている。

それが何故かを、東城刃更は理解していた――だから言った。背後を見ないまま、

「落ち着けゼスト――いくら何でも殺すのはやりすぎだ」
「……ですが、この者達は貴方を殺そうとしました」
怒りを滲ませた冷たい声。感じるのはS級クラスのゼストが放つ本気の殺気だ。そして刃更が背後を振り返ると、ゼストは巨大な重層魔法陣を展開していた。こんなものが発動すれば、この辺り一帯がどうなるか解らない。だから、
「俺の事は良い。俺がやりたかったのは、コイツらがお前に二度と手出ししようなんて思わなくさせる事だ。だけど――それは殺す事じゃない。そんな事をして、お前まで俺を殺そうとしたコイツらと同じになっちまう必要はないんだ」
そう刃更が語り掛けると、やがてゼストはゆっくりと魔法陣を解いた。
「……解りました。従います……刃更様がそう仰るなら」
「ゴメンな。お前より先に手を出しておいて、勝手な事を言ってさ」
刃更は申し訳なさそうに苦笑しながらゼストに告げると、地面に転がっている兵士のひとりを見下ろした。それはゼストに乱暴な行為を働こうとして、他の兵士への見せしめと、二度とこんな真似をさせないために特に強く痛めつけた相手だった。
「ぬ……あ……が……く、う……――っ？」
苦悶の声を漏らしていた兵士が、刃更の視線に気が付き表情を凍らせる。そんな彼に、

「安心しろ。関節を外しはしたが、神経までは傷つけていない。アンタが今感じている痛みは、自分で地面を転がったせいだ。詰め所にいる救護士にでも見て貰えば、外れた関節は綺麗に入れて貰えるよ」

「お……が……っ？」

「ああ本当だ。だがこれに懲りたら、二度とこんな真似はするな。もしまた見かければ、今度こそ俺はアンタを許さないし――ゼストがアンタを殺そうとしても止めないぞ」

「っ……っ……っ！」

ガクガクと頷く男に、刃更は「よし」と頷いて、

「俺達はもう行く。他の奴らが眼を覚ましたら、俺が言った事を伝えておいてくれ」

そう告げると、「行こう」とゼストの手を引いて路地を奥へと向かって歩き出した。

下手に路地に入った側から表通りに出て、それを通り掛かった者に目撃されれば、兵士達を倒した事がバレる可能性がある。ここは姿を見られないように、路地を奥へ行って現場を迂回し、少し離れたところから通りへ戻るべきだろう。

そして角を何度か曲がったところで、刃更はふと立ち止まった。澪達のいるカフェに戻る前に、ゼストに注意しておかなければならない事があったからだ。だから、

「なあゼスト、何であんな酷い事をされそうになったのにお前は――」

咎める言葉と共に振り返った刃更は、しかしそれ以上喋れなかった。
ゼストに抱き付かれたからだ――まるでしがみつくかのように。
「っ……申し訳ありません。ですがどうか……少しだけこのままで」
そう言ってギュッとこちらに抱き付いてくるゼストの身体は、僅かに震えていて、
……そうだよな。
東城刃更は理解する。証人保護のようなものとはいえ、かつて現魔王派だったゼストの穏健派における立場は色々と難しい問題を孕んだ複雑なものだ。下手にトラブルを起こせば、一気に危うい立場へと追いやられる。そのためゼストは、自分の今の居場所を守るために、兵士達の蛮行に耐えようとしていたのだろう。だから、
「怖かったな……だけど、もう大丈夫だ」
刃更はゼストの身体を抱きしめ、安心させるようにそっと背中を撫でてやった。
――あのゾルギアの配下だったものの、ゼスト自身は性的な行為を免れていたという。
それは彼女にとって幸運な事ではあるものの、必然的にその手の行為に対する肉体的・精神的な免疫や耐性がない事を意味している。おまけにゾルギアの好色な振る舞いをずっと間近で見せられてきたのだ。その手の行為に対して生理的な嫌悪感を持ってい

たとしてもおかしくはない。それでもゼストは、兵士の行為に耐えようとしていた。

……責任感が強すぎるからな、ゼストは。

或いは自分が問題を起こせば、監督役のシエーラや、ゼストを穏健派に託した刃更に責任が及ぶかもしれないと思い、必死に我慢しようとしてくれていたのかもしれない。

だから、東城刃更は言った。彼女の耳元に直接声が届くように、

「ゼスト――お前は女の子なんだから、もっと自分を大切にする事を覚えてくれないか」

刃更に抱きしめられながら、ゼストは信じられない言葉を聞いていた。

刃更が、ゼストを「女の子」と言って心配してくれたのだ。そして、

「俺が先刻の奴らを許せなかったのはさ……女の子のお前が一番嫌がる事を、連中が無理矢理やろうとしていたからなんだよ」

「……っ」

刃更の腕の中で、ゼストは思わず息を詰まらせた。

……いけない……っ。

少しでも気を抜けば、ゼストは泣いてしまいそうだった。澪達だけではない――ゼストの事も刃更は想ってくれていたなんて。それは澪達への想いには及ばないかもしれないけれど、それでも刃更は今こうして傍に居て、ゼストを抱きしめてくれていた。

ゼストの事を見詰めて――そして想ってくれていた。そして、

「あの時、お前は我慢しようとしてたけど……まさか、こっちに来てからこれまでに、他にもああいう真似をされた事があったのか？」

心配そうに尋ねてくる刃更に、ゼストは彼の腕の中で首を横に振って、

「……いいえ。私はシェーラ様お付きのメイドなので、普段はずっと城におりますから」

「なら、城内の誰かにされそうになった事は？」

「ありません……シェーラ様が良くして下さっていますから」

「――本当か？」

「本当です――私は男の方に触れられた事はありません。信じて下さい刃更様！」

問い掛けを重ねられ、次第に不安を膨らませたゼストは必死になって否定した。

他の誰にどう思われようと構わない。だが、刃更にだけは誤解されたくなかった。

ゼストが震えていたのは、刃更以外の男に触れられそうになったせいなのだから。

「こうして抱きしめられたのも、刃更様が初めてなんです……」

「そ、そうか……大丈夫だったなら良いけど」
こちらの剣幕に押されたのか、刃更は信じてくれたようだった。そう思った瞬間、
「――――」
ゼストは、自分の身体の中からフッと力が抜けてしまったのを感じた。
刃更に、他の男に触れられていたと誤解されてしまう恐怖――それが解消された事で、先程からずっと張り詰めていた緊張の糸が完全に切れてしまったのだ。
「――っと」
腰を抜かしてへたり込みそうになったこちらを、刃更はとっさに抱き留めてくれた。
「大丈夫か……？」
「申し訳ありません……刃更様に信じていただけたと思ったら私、急に力が……」
そう言ってゼストは何とか自分で立とうとしたが、膝にも腰にも全く力が入らない。
「すみません刃更様、すみません……すぐに立ちますので……っ」
刃更にだけは迷惑を掛けたくないのに。ゼストが泣きそうな声で謝ると、
「謝らなくて良いって――よっと」「あ――……」
すると刃更は、あっという間に動けなくなっていたゼストを背負ってしまう。
「だ、駄目です刃更様っ……こんな事、降ろして下さい」

自分は彼を世話するメイドなのに。慌てるこちらに、しかし刃更は苦笑して、
「駄目じゃない。言っただろ――お前は自分を大切にする事を覚えないとさ」
「ですが……っ」
「他の奴の目が気になるなら、この路地を出るまでも良いからさ。試しに俺を少しだけ頼って、自分を大切にするっていうのがどういう事か考えてみてくれ」
そう言って刃更は、ゼストを背負ったままゆっくりと歩き出した。そして、
「……誰かに甘えるってのも案外悪くないだろ？」
笑みを含んだ声で言われたゼストは、冗談じゃないとばかりに、
「私は刃更様のお世話をするのが仕事なのに、こんな事をされて嬉しい訳が――」
すると、刃更は「そうか」と低い声でこちらの言葉を遮って、
「お前が嫌なら止めよう――無理矢理して先刻の連中みたいになるのは嫌だからな」
そう言うなり、あっさりとゼストを地面に降ろそうとする。
その瞬間――突然刃更に冷たく突き放されたと思ったゼストは、
「やっ――だ、駄目っ！」
ギュッと目を瞑り、反射的に刃更を離すまいと彼の肩にしがみ付いていた。

だが、たっぷりと十数秒が過ぎた頃、いつまで経っても刃更がこちらから手を離さないでいてくれる事に、恐る恐る眼を開けたゼストは、

「あ――……」

思わず呆然の呟きを漏らした。眼の前に、刃更の穏やかな表情があったからだ。

それは刃更が時折、澪達へ向けていたのと同じもので――そして、

……私、今……何て。

とっさに出たその反応は、ゼストの中に元からあったもの。本心という名の真実だ。

……あ……。

だからもう、ゼストは己を誤魔化せない。はっきりと意識してしまう。自分は、東城刃更という青年とどうなりたいのかを。心の奥底がどうしようもなく震えるその感情を教えてくれたのは、やはり彼で――だからこそ、ゼストは刃更への想いをより強いものへと変えてゆく。それでも、少しだけ強引だったそのやり方に、

「……知りませんでした。刃更様は意地悪な方だったのですね」

刃更の背にそっと頬を寄せ、少しだけ拗ねたようにゼストが告げた。

すると、刃更は前を向いたまま苦笑の吐息を漏らして、

「ゴメンな……でも今の俺にはそういう部分も必要なんだ」

途中からその声を真剣なものにすると、ゼストを背負ったまま歩き出した。
「刃更様……？」
彼の背中にいるゼストには、刃更の表情を見る事はできない。だが得体の知れない不安を感じて思わず問い返したゼストは、最後に刃更が呟いた言葉を聞き逃す。
それは恐ろしいほど暗く冷たい声で、
「絶対に守ってやる――たとえどんな手を使ってでも」

5

「市街警備担当の兵士の中に、そんな者が……」
カフェで澪達と合流して城へ戻った後。
刃更とゼストが遭遇した市街地でのトラブルを話すと、ノエルは表情を曇らせた。
現在――胡桃の様子が気になる柚希を先に城内へ戻らせた刃更は、澪やゼストと共にウィルダート城の東に設けられた訓練場を見学している。
鍛錬を行なっているのは、近衛騎士など穏健派の中でも選ばれた実力者達だ。
「流石に、城の兵士達はきちんとしているみたいだな……」

刃更が、鍛錬を行なっている兵士達の様子を見ながら告げると、
「勿論です！　ここに居るのは、穏健派が誇る騎士や従騎士達なんですから」
確かにノエルの言う通り、いずれも腕が立ちそうな者ばかりではあった。
しかし――その数はお世辞にも多いとは言えない。
無論、近代兵器で身体能力の差を埋められる人間の戦争と違い、勇者の一族と魔族との戦闘や、魔族同士の戦争で重要なのは、強大な力を持つ『個の存在』だ。先の大戦で戦神と呼ばれた迅が多くの魔族を蹴散らしたり、最強の魔王と謳われたウィルベルトがその絶対的な力で魔界を統べたりと、歴史がその事実を証明している。現魔王派が、歴史の長いタカ派や保守派の高位魔族を中心に、さらにレオハルトという若きカリスマを旗頭に据える事で急速に勢力を拡大しているのも良い例だろう。
穏健派にも万理亜に滝川、それに恐らくルキアを筆頭に、Ａ級からＳ級クラスの実力の持ち主はいる。ウィルベルトの兄であるラムサスも、現在の穏健派のトップという事はかなり腕が立つと考えて良い筈だ。そして現在はゼストもいる。たとえ現魔王派の方が高位魔族やそれに準ずる戦闘力を持つ者は多くても、一方的に敗北するような事は無いだろう。
だからこそ現魔王派も深刻な戦力の消耗や損失を恐れ、これまで全面衝突にまで発

展せずに来ているのだ。異能力者同士の戦いでは、重要なのは必ずしも数ではない。

――だが、全く重要でないかと言えばそれも違う。

互いに実力者が限られる以上、次に勝敗を左右するのはやはり戦力の数なのだ。

そして一般の民衆を守る必要のある防衛戦では、特にその重要性が顕著に出る。

ひとりで全ての敵を倒す事はできても、全ての仲間を守る事はできないからだ。

かつて――ウィルベルトが魔王だった頃、彼のカリスマに惹かれたり、理想に賛同した者達など、魔界中から多くの有能な兵士が集い、穏健派は魔界最大の勢力として栄華を誇っていた。この城はその栄華の象徴だったのだ。だが『争いを止めて魔界に恒久の平和を構築する』――穏健派が掲げ続けているその目標は、最強の魔王ウィルベルトがいて初めて目指す事のできる壮大な理想だった。よって絶対的な主を失った後の穏健派の兵士達は、次第にウィルダートを離れてしまった。最初こそ志半ばで倒れたウィルベルトの理想を、自分達が実現しようと必死に努めたが、残された者達だけで受け継ぐには、ウィルベルトの掲げた理想はあまりにも大きく重すぎたのである。そして、

「つまり、人の血が混じっている者を受け入れるのと同じように、仕方なく新たに外から戦力を募った――刃更達が街で遭ったトラブルは、その急場凌ぎの弊害ってわけ？」

「申し訳ありません澪様……市街地警備隊の責任者には、改めて兵の教育を徹底するよ

う申し伝えますので」

不機嫌そうな澪に、ノエルは平身低頭する。勢力を拡大している現魔王派に対抗するため、一部ゴロツキまがいの連中が交ざるのも覚悟の上で、広く門戸を開放してでも数を揃える必要があったのだろう。これが、かつて最大の勢力を誇った穏健派の実情だった。

……結局は、この状況を打開するための切り札として澪を呼んだって事か。

新たな魔王に据えるにせよ、受け継いだ力を手放すにせよ、澪の存在は穏健派に再びウィルベルトという存在の影響力を及ぼす。市街地に暮らす民衆を守りながら現魔王派と戦ってゆくには、ウィルベルトの一人娘である澪を利用し、かつての兵や仲間らが帰ってくるように働きかけるしか方法がなかったのだろう。残念ながら穏健派は現在、そこまで追い詰められてしまっているのだ。その気持ちは解らなくもないが、

「……」

刃更が無言で様々な思考や感情を巡らせていると、ふと、一台の馬車が市街地の方から正門へと向かって駆けてくるのが見えた。白の車両には豪華な金の意匠や細工が施されており、遠目でも刃更達が乗ってきたものとは明らかに違うのが解る。

「あれは……」

見れば正門前には、ルキアや彼女の部下のメイド達が勢揃いしており、そんな彼女達の前へと白の馬車がやって来て止まった。そして御者が扉を開けると、恭しく跪いたルキア達の前にひとりの男性魔族が馬車から降り立ち、

「っ――――」

途端に刃更の隣に立っていた澪が身を硬くした。現れた男性が、肖像画に描かれたウィルベルトによく似た風貌をしていたからだ。すると兵士達も一斉に鍛錬を止めて跪き、ノエルやゼストもそれに倣った。そんなこちらに気付いた男性魔族が、遠くから視線だけで応えてくる。そして――その視線が刃更と澪へと向けられた。

……マズイな。

刃更も澪も、市街地へ行くために変装した執事やメイドの服を着たままだ。礼儀を弁えない使用人と勘違いされてしまうかもしれない。どうするべきか判断を迷わせていると、ルキアが男性魔族の耳元へ何事かを囁いた――その瞬間、

「――――っ!?」

東城刃更は思わず息を呑んでいた。男性魔族は遠くからこちらを見ているだけだ――それなのに、凄まじい圧力が刃更の下まで届いてきた。

もし――これで向こうが少しでもこちらへ近付くような素振りを見せたら、刃更は

即座にブリュンヒルドを具現化して構えを取っていただろう。しかし、

『――――』

男性はそれ以上何もせず、まるで興味もないとばかりにルキア達メイドを引き連れて城の中へと入っていった。男性の圧力から解放された刃更が嘆息したのとは対照的に、

「……っ」

隣の澪は、容赦なく浴びせられたプレッシャーに完全に気圧されたのか、僅かに身体を震わせながら立ち尽くしたままでいる。だから刃更はそっと澪の肩を抱き、

「澪……もう行った。大丈夫だ」

そう囁きかけると、こちらの腕の中で澪はコクンと頷いた。刃更は男性が消えた城の入り口の方を見ながら、

「戻ってくるのは明日って話だったが――ゼスト、彼がそうなのか？」

「……はい、刃更様」

発したこちらの問い掛けに、静かに首肯してゼストは言った。

「あの方が穏健派の現在の主――先代のウィルベルト陛下の兄君、ラムサス様です」

第3章　新たなる主従契約

1

長時間に亘る枢機院との閣議を終えた後。

レオハルトは己の執務室へと戻り、信頼できる配下達を召集した。閣議の場で枢機院から告げられた今後の方針について、どのように対応するかを話し合うためだ。

毛足の長い紅の絨毯が敷かれ、高級な調度品でまとめられた広い空間は、魔王の執務室に相応しい風格を放っている。レオハルトが閣議の決定を、通り説明し終えると、

「発掘したばかりの英霊を試験的に実戦投入し、穏健派を攻めろ――ですか」

集まった配下の内、まず口を開いたのは副官を務めるバルフレアだった。

「全く……枢機院のお歴々の傍迷惑な思い付きは今に始まった事ではありませんが、今回はまた、段と頭の痛くなるような事を言い出してくれましたね」

「――ルカ、英霊の状態はどうなっている？」

レオハルトの問い掛けに応えたのは、書類を片手に持った幼い魔族の少年だ。
「すみません……昨日ご報告したように、封印の解除には成功したのですが」
ルカと呼ばれた少年はそう言うと、申し訳なさそうに瞳を伏せたものにして、
「あの英霊達の前の主の支配契約を解くのに手こずっていて、こちらと再契約を結ぶためには、もう少し調整に時間が掛かりそうなんです」
するとルカの頭に、大きな手が優しく置かれた。そして、
「気にするな……あの英霊達は魔神戦争時代の遺物だ。あんな古代兵器を相手にコンタクトが図れるだけでも大したものだ。お前はもっと胸を張って良い」
「ガルドさん……」
隣に立つ巨軀の男性魔族が発した労りの言葉に、ルカが泣きそうな顔を上げると、
「ガルドの言う通りだ。ルカが気に病む事はない……無理に急ぐ必要もな」
と、レオハルト。
「それで――お前の見立てでは、あとどの位で再契約まで持っていける？」
「四日……いえ、三日いただければ必ず！」
「無理をして急ぐ必要はないと言った筈だ。ここ数日、睡眠はおろかろくに休息も取っていないだろう。あれをどうにかできるのはお前だけだ。そのお前に倒れられては困る。

事は重要な作戦に絡む問題だ――感情でものを言うのは止せ」
「いいえ陛下、でしたら尚更あの英霊を一刻も早く使えるようにしないと。大丈夫です……僕が倒れても、この王城には古代の魔導技術に詳しい研究者はいますし」
「ルカ……レオハルト様が言っているのは、そういう事ではありませんよ」
「え……？」
苦笑しながらバルフレアに言われ、眼を丸くしたルカに、
「確かにこの城には古代の遺物や兵器に明るい研究者や技術者は少なからずいる。だがレオハルトが信頼し、全てを任せられる者となると話は別だ」
とガルド。するとバルフレアも「そうですね」と頷き、
「己への期待や責任に応えようとするのは構いません――ですが貴方は年は幼くても、私達と同じようにレオハルト様の側近のひとりなんです。そんな貴方の身体を気遣うレオハルト様の気持ちが解らないほど、貴方は子供ではない筈ですが？」
バルフレアの諭す言葉に、ルカはようやく自分が何を言われていたのか解ったのだろう。「……すみません」
「謝る必要はない。お前が尽力してくれている事は、ここに居る誰もが知っている」
シュンとなったルカを、レオハルトは真剣な眼差しで見詰めて、

「お前は俺の臣下だ。途中で仕事を放棄して他の者に手柄や功績を譲るような真似は許さん。もう一度聞くぞルカ――お前が倒れる事なく、英霊共との再契約を果たすとしたら、一体あと何日必要だ？」

「……では二日。二日だけ下さい。そうしたら、必ず再契約まで持っていってみせます！　再契約の作業と並行して英霊の肉体や霊子核の修復と調整は行なっていきますから、再契約を果たして簡単なテストをクリアすれば、すぐに実戦に投入できます」

「解った。お前の判断を信じよう……」

レオハルトの言葉に、「はい！」とルカは笑顔を輝かせて言った。そんな彼の頭をガルドが少し乱暴に撫でると「もー、子供扱いは止めて下さい」とルカは口を尖らせた。

そんなガルドとルカのやり取りを視界の端で見ながら、

……英霊を使用する目処は立った。後は……。

レオハルトが残る問題を思案していると、

「後は――枢機院の無茶な侵攻命令に、どうやって説得力を持たせるかですね」

と、バルフレアが嘆息混じりに言った。その整った顔に苦笑を浮かべて、

「ウィルベルトが死に、勢力としては全盛期などとは比べるべくもない状態ですが……それでも各地には、未だにウィルベルトへの信仰にも似た感情が根強く残っています。

双方の戦力を見れば、穏健派よりも我々の方が間違いなく上でしょうが――だからこそ、侵攻するには周囲を納得させられるだけの正当性を持った『建前』が必要になるかと」

バルフレアの言う通りだった。下手に穏健派に対して侵攻を行なえば、虐殺の誹りを受けかねない。戦争とは単に互いの強さや正義を争うだけではない――その中には、高度に政治的なメリットを睨んだ思惑が複雑に絡んでくる。下手に付け入る隙を与えれば――今は静観している他の勢力の中から、新たにこちらに抵抗したり、反旗を翻したりする者達が出てきてしまう可能性がある。

……老害共が。

枢機院にその名を連ねるような長い時を生きている高位魔族達は、一般の者達を自分達と同じ存在だとは見ていない。彼らは民衆を、自分達を楽しませる娯楽の道具程度にしか見ていないのだ。誰が生き、誰が死のうと関係ない。自分達が快楽を得られればそれで良いのである。だからこそ、連中のような存在は一掃しなければならない。

……そして。

レオハルトは確信する。今の魔界でそれができるのは、間違いなく自分達だけだと。

そのためにも、今はまだレオハルトが魔王の地位を剥奪されない程度には連中に従っ

ておく必要がある。とはいえ、完全に枢機院の思い通りになる訳にはいかない。
レオハルトがどうするべきか思案を深めていると、
「……――穏健派を攻めても騒がれない理由ならあるぜ」
この場に同席しながらも、これまでずっと沈黙を続けていた者が口を開いた。
それはゾルギアが問題を起こした後、新たに成瀬澪の監視役となった者。
人間界に潜入し、滝川八尋という名で同じ学校に通っていた青年だ。
「……どういう事だ、ラース？」
眉を顰めてレオハルトが問うと、ラースはさらりと言い放った。
「ウィルベルトの娘――成瀬澪が今、こっちの世界に来てるんだよ」
「――まさか」
信じられないとばかりに眼を見開いたバルフレアに、ラースは肩を竦めて、
「それが本当なんだな……ウィルベルトが死んだ後、穏健派は深刻な戦力不足で尻に火が付いている状態が続いていた。頭を悩ませていた連中が、その問題の解決方法として

とうとう成瀬澪を呼び寄せたのさ。ウィルベルトの後を継ぐ正当な魔王として祭り上げるのか、受け継いだ力だけを抽出して使うつもりかはまだ解らないが……どちらにせよ成瀬澪を利用して、かつての勢力を取り戻そうとしているんだろう」

よって、

「だったら――こっちはそんな連中の思惑を利用してやれば良い。穏健派は先代魔王の娘と、彼女が受け継いだ力を使って、再びこの魔界を治めようとしている――それを阻止するために攻め入ったとでも言えば、他の勢力への申し訳としては充分だろう」

「成る程……もしお前が言った事が本当ならば、確かに侵攻する理由としては充分だ」

と意味ありげにレオハルトが返すと、

「おや陛下――私の申し上げた話を信じていただけないのですか？」

と、おどけたようにラース。先の大戦で部隊を共にした戦友の悪ふざけに、

「ラース、ここには俺達しかいない――その気持ちの悪い喋り方は止めろ」

「へいへい……で、やっぱり信じられないかレオハルト？　まあ確かにこの情報は、穏健派内でも一般には知らされてない、最重要機密だけどよ」

そう言って笑ったラースに、レオハルトは言った。

「いや信じよう――穏健派が俺達の所へ送り込んできたスパイのお前なら、極秘の情報

が入ってもおかしくはない」

ラースが穏健派の送り込んできたスパイである事を、レオハルトは知っていた。

いつからか――最初からだ。レオハルトは全てを承知でラースを受け入れたし、ラースもまたそうと知りながらレオハルトの下にいる。現魔王派の中では、大戦を共にしたレオハルトに仕えるため穏健派を離れた新参者として過ごし、穏健派の中では上手くこちらへ入り込んだスパイとして振る舞う。それが、ラースが着ける事を選んだ仮面だった。

そして――そんなラースの素顔を知っているのはレオハルト達だけだ。しかし、

「……良いのかラース？」

レオハルトは問い掛けを放った。

「お前にはこちらへのスパイの他に、陰ながら成瀬澪を護衛するという裏の任務があった筈だ。穏健派として育ったお前にとって、ウィルベルトは敬愛してやまない存在だろう」

「まあな……だが、それも終わりだ」

何せ、とラース。

「兄貴達の仇だったゾルギアをこの手で殺せたんだ……これ以上、俺が穏健派に義理立

てする理由はねえよ」

そう――レオハルト達は、ラースがゾルギアを殺した事を本人の口から聞いていた。

ゾルギアの霊子反応が消えた直後、レオハルトがバルフレアに調査を命じたのは、ラースとの約束があったからだ。レオハルトには枢機院の老害共を一掃するという目標がある――そして、ゾルギアはその一員だった。だから兄や姉と慕っていた者達の仇であるゾルギアだけは、時が来たら必ずラースの手で殺させてやる……それが、レオハルトが己の戦友と交わした約束だった。よってゾルギアの霊子反応が消えた時は、その約束を果たせなくなったのかと思ったが――後になってラースの方から「ゾルギアを殺した」と言ってきたのである。それはラースが最大の目的を果たした事を意味する。だから、

「言っただろ。これからは、枢機院の老害共を――ゾルギアと変わらないようなクソ共を始末しようとしているお前さんに協力するって」

とラース。そんな彼の言葉に、嘘の色は感じられない。だが、

「……どうかな」

と、レオハルト。

「ラース……お前がこれまで俺に付いてきたのは、ゾルギアを殺すのに、奴や枢機院の

ような老害共を始末しようとしている俺の存在が目的を達するために都合が良かったからだろう。そしてお前はゾルギアを殺すという目的を達した――ならば、逆にこれ以上お前が俺に付く理由はなくなったと思うが」

そうだろう。

「現にお前は――俺とではなく、ジン・トージョーの息子と共にゾルギアを殺す事を選んだ。ならば今後は、奴と行動を共にする方が自然だと思うが？」

「言っただろ。別にお前さんよりアイツを選んだ訳じゃないって……」

と嘆息しながらラース。そこで声を一段低いものにして、

「ただ――もしあのまま静観を決め込んでいたら、恐らく東城刃更は確実にゾルギアを殺していた。そうしたら俺のこれまでの計画がパーだ。だから、この手でゾルギアを殺すためにはアイツと組むしかなかった。それだけさ」

「ジン・トージョーの息子が、それ程の力を？」

と怪訝そうにバルフレア。

「老いたとはいえ、ゾルギア侯はかつて剣の王と称された程の実力の持ち主です。その東城刃更という少年……貴方の報告にあった情報から推察するに、正面からゾルギア侯を倒せるような力の持ち主とは思えませんでしたが」

「まあな。確かにアイツの力は、ゾルギアを圧倒できるようなものじゃない。それでも、奇妙な確信があるのさ……もし俺が力を貸さなかったとしても、アイツは間違いなく成瀬澪を救い出し、ゾルギアを倒していただろうな」

ラースが発した真剣な声音に、レオハルト達は自然と沈黙する。すると、

「それに――眼の前にあのゾルギアを殺せるチャンスが転がってきていたんだぜ？　そいつを逃す手はないだろ」

と、苦笑してラース。

「まあ、そういう訳だからおかしな気を回してくれなくて良いぜ。心配しなくても、こっちは大戦が終わった時に、これからもお前の事をよろしくって頼まれちまってるしな」

「？　誰がそんな事を――」

「――リアラ様だよ」

間髪を入れずに言われ、

「姉上が……？」

レオハルトは僅かに驚きを得た。すると、

「あの笑顔で頼まれると、どうにも断れないだろ？　何なら、俺が英霊を連れて穏健派

を攻めたって構わんぜ。逆に、信用できないから出てけって言うなら大人しく従うよ」
「どちらもする必要はありませんね。気持ちだけいただいておきます」
ラースの提案に、バルフレアは嘆息して、
「大戦からの付き合いです。貴方の事は信用していますが――英霊を持って行かせたり、追い出したりして、万が一にも穏健派へ寝返られでもしたら事です。貴方がどれだけ厄介かは、私やレオハルト様はよく知っているのですから」
「ああ、そーかい」
その物言いに、ラースがフッと笑いながら肩を竦めてみせた時だった。
「――ならば俺が行こう」
低い声でそう言うと、見上げるような巨軀がぬっと前に出た――ガルドだ。
「副官であるバルフレアが、レオハルトの傍を離れるのは可能な限り避けるべきだ。そしてラースも無理だというなら、後は俺しかいないだろう」
「……すまない、ガルド」
名乗り出た年上の男性魔族に、レオハルトは瞳を伏せた。
「本当なら俺ではなくお前が――いや、貴方が魔王となるべきだったのに」
ウィルベルトと同じ年代の高位魔族であるガルドは、枢機院に属する老人らを除いた

保守派の中で、最も王に相応しい実力と血筋を備えた男だった。

しかし、それまでの保守派・タカ派のイメージを一新して、魔界中に新時代の魔王としてアピールするため、枢機院の老人達が選んだのはガルドではなくレオハルトだった。

――そして、ガルドは一切の異を唱える事なくその決定に従った。

そして、レオハルトを補佐するため自ら側近になると名乗り出てくれたのである。

そんな心優しい男は、ふっと口元に笑みを見せて、

「気にするな。俺はお前の手足になるためにここに来た。あのウィルベルトですら完全に払拭する事ができなかった、枢機院に権力が集中している旧態依然としたこの世界を一から作り直すのだろう。そのためならば、俺は喜んでお前に手を貸そう」

「ガルドさん……」

心配そうな表情を浮かべるルカの頭を、ガルドはもう一度撫でながら、

「ルカが英霊の調整を終了し次第、ウィルダートへ向かう――陥落して良いな？」

「勿論だ。連中が二度とおかしな事を考えられないようにしてやってくれ」

と頷きながらレオハルト。するとバルフレアが「ああ」と付け足すように、

「できれば、現トップのラムサスだけは逃さずに始末してくれると助かります。ウィルベルトの兄という事で一部の民衆から支持を得ているようですし、彼がいなくなればい

よいよ穏健派は瓦解するでしょうから」

「了解した――ウィルベルトの娘はどうする？」

ガルドの問い掛けに、レオハルトは僅かに黙考した後、冷静な声で言った。

「可能な限り、生け捕りにしてくれ。あのウィルベルトの力を受け継いだひとり娘だ。枢機院の老害共に対抗する力を得るためにも、やはり当初の予定通り、その力は有効に利用したい。そうするだけの価値は充分にあるからな」

2

ラムサスが戻ったものの、最初に通された狭い部屋に澪達が戻される事はなかった。

恐らくは、クラウスが色々と手を回してくれたのだろう。

豪華な食堂に用意された贅を尽くした夕食も、人間として育てられた澪や、それこそ人間の刃更達の口に合うよう、細心の注意を払って味付けや調理が行なわれていて――そんな料理の一つ一つを、食事を共にしたクラウスやシエーラ、さらには給仕を行なったゼストやノエルが説明してくれた。そうした持て成しを受ける一方――既に城へ戻ってきているにも拘わらず、夕食の場にラムサスが姿を現す事は最後までなかっ

た。

――そして食事を終え、部屋へ戻ってから、時間ほどが過ぎた現在。

成瀬澪の姿は、柚希や万理亜、胡桃と共に温かなお湯と空気が満ちた空間にあった。

糸纏わぬ姿となる事が正装のその場所は、女性ゲスト用の大浴場だ。

ほんのりと白い湯気が漂う大理石にも似た鉱石で造られた浴場――その豪華な造りと広さは、まるで高級なホテルや旅館のようで、

……どうせなら、刃更も一緒に入ったら良かったのに。

そうすれば澪が誰のものなのかを、この城の連中にはっきりと教えてやる事ができた。

成瀬澪は先代魔王の娘としてではなく――大切な人と今を生きているのだと。

だが、無駄に穏健派の魔族達を刺激するのは避けるべきだと、苦笑混じりに刃更に言われてしまい、仕方なく澪は諦めた。そして現在――壁際にある洗い場に置かれた椅子の一つに、澪は腰掛けていた。それは身体を洗うためなのだが、

「――それでは澪様、失礼いたします」

澪の背後でそう言ったのは、白のタオルを身体に巻いたノエルだ。ウィルベルトの力を抽出すれば、もう用はないと考えているラムサスから毛嫌いされている一方――

新たな魔王にしたいと考えているクラウス達にとっては、澪達は究極のＶＩＰである。よって入浴時も全ての世話をメイド達がすると言い、お湯を流す者、湯船の温度を調節する者、髪を洗う者、身体を洗う者などを、澪・柚希・胡桃の三人にそれぞれ付けると言われた。当然ながら澪達はそんな事をされてはリラックスできないからと、全力でそれを断ったのだが、しかし向こうも、せめて澪の世話だけでも――と譲らず。ならば、昼間街を案内してくれて打ち解けてくれているノエルひとりが行なうなら、という事で妥協したのである。

「うん……じゃあお願いね、ノエル」

澪が頷きを返すとノエルは「はい」と頷いて、まずは木桶に入ったお湯で澪の身体を流してくれた。そして、泡立てた手でこちらの背中を洗ってくる。使用人が王族や貴族の身体を洗う時は、絶対に肌を傷つけないよう優しく手で洗うとの事だった。しかし、

「……んっ、あ……んう」

ぬるりとした感触で背中を撫でられ、つい澪は艶っぽい声を漏らした。すると、

「まだお背中なのに……澪様ってば敏感なんですね。マリアの魔力で刃更殿と主従契約を結ばれているそうですけど、やはりその影響ですか？」

「そ、そんな事っ……！」

悪戯っぽい声でノエルに言われ、澪は顔を赤くして焦った。

……やだっ、あたし……っ。

異界の地でお風呂に入れる事が解ると嬉しくて、気を抜いて油断してしまっていた。

――刃更と主従契約を結んで以降、これまで澪は刃更によってたっぷりと屈服させられてきた。その度に性感が開発されていった結果、今では澪の躰は信じられないほど敏感になっている。それでも家で入浴する分には問題ない。一人で入る時は自分で加減する事ができるし、万理亜の策略や柚希に対抗する形で刃更と一緒に入る時は、澪がどんなに乱れても誰も咎めはしないからだ。そして澪は、これまでにも刃更の手で全身を洗われた経験が何度かあった。だからつい、その時の反応が出てしまったのである。

「もしかして入浴のお世話をするメイドの数を減らすように言ったのは、この事を知られるのが恥ずかしかったからですか？　だったらお気になさらないで良かったのに」

「っ……それ以上言ったら、アンタも追い出すわよ」

恥ずかしそうに睨むと、ノエルは「失礼しました」とフフッと笑って、そこからは黙って澪の身体を洗ってくる。そして当たり前の事だが、使用人が洗うのは背中だけではない。脇や胸、尻といった敏感な場所まで成瀬澪は洗われてゆく。

「っ……、ん……ふぅ……、……あ……やぁ……ん」

唇を噛んで必死に堪えるのに、それでも甘い声が漏れるのを止められない。しかし、……平気。こんなの、刃更がしてくれるのとは全然違うんだから……っ。

そうだ。刃更が自分の事を滅茶苦茶にする時の指使いとは全然違う。彼はいつも大胆だけど優しくて、強引だけど愛があって――乱暴だけど決して痛くしたりしなくて。

だから澪は、いつも身も心も蕩けてしまうのだ。それに比べれば、ノエルなど全然だ。……刃更なら、もっと……。

刃更の大きな手、刃更の逞しい腕や胸板、刃更がくれる狂おしい程の快楽と、世界中で最も落ち着く彼の温もり。彼にされている時の事を思うと、どこを洗われても恥ずかしさやくすぐったさを得るだけで、澪は我慢できるようになった。胸の谷間も、胸の下も、脇も臍も、尻の間さえも、ノエルよりも先に刃更によって洗われていたからだ。

だから澪は平静を取り戻し、ノエルに己の身体を任せた。全身をきれいにされた後は、長い髪の毛を洗われる。優しく手で梳くようにされ、美容室にも似た心地良さを澪が得ていると、

「あの、澪様……」

と、ノエルが声を掛けてきた。またこちらをからかうつもりか、と澪が身構えると、

「あちらでラースがどのようにしているのか、何っても良いですか？」

「ラース……って、ああ滝川の事？」

滝川八尋という印象が強すぎて、とっさに名前が繋がらなかった。

「そうね……刃更とは仲良いみたいよ。学校ではよく、緒につるんでるみたいだし、結構気が合うのか男同士で色々と悪巧みとかもしてるみたい」

まあ、あの白仮面の正体が滝川だった事を知らされているため、澪や柚希としてはそれが面白くなかったりする。刃更に重傷を負わせ、彼の心の傷を抉る言葉をぶつけた滝川に対して、澪と柚希は未だにあまり良い感情を抱けずにいるからだ。

「でも、何でアイツの事を……？　もしかして知り合いか何か？」

「……はい。私とラースは、同じ孤児院の出身なんです」

とノエル。どこか思い詰めた声音で、

「彼……自分だけで色々と抱え込んじゃうところがあるんです。だから、ひとりで現魔王派へ潜入するなんて危険な任務、私は絶対反対だったのに……でも、一度決めたら私の言う事なんて、ラースは全然聞いてくれないですから」

「……そうなんだ」

その口ぶりに、澪はノエルが滝川に対してどんな感情を抱いているのか察する。

……あたしと同じだ。

自分も、刃更が密かに滝川と手を組んでいたと聞かされた時、同じような事を想った。

万理亜と二人で、夜の街で低級のはぐれ悪魔を狩っていたと知らされた時もそうだ。

どうして自分に黙ってそんな危険な真似をしていたのか、問い詰めたくなった。

だができなかった。彼がそんな危険な真似をしたのは、他でもない——澪を守るために必要だったからだ。現に、滝川の助けがなかったらゾルギアに捕まっていたシエーラが命を落としていたかもしれない。万理亜が悲しむ結末にならずに済んだのは、刃更が滝川と密かに手を結んでいたお陰だ。そう思うと、澪は刃更に対して何も言えなかった。

しかし——今のノエルの苦しみを解消する方法はある。そしてその鍵を、他ならぬ澪が握っていた。だからこちらの髪を洗い流し終えたノエルに、

「ねえ、ノエル——……」

と、澪は背後を振り向こうとして——そのタイミングで、洗い場の隣の椅子に腰を下ろした者がいた。透き通るような美しさを湛えているその少女は、澪と同じく刃更と主従契約を結んでいる野中柚希だ。

「——ここ使わせて貰う」

こちらを見ずにそれだけを言うと、柚希はタオルで自身の身体を洗い始めた。

柚希は何も言っていない。しかし、どこかその場が気まずい空気になって、

「……あの、澪様……それでは一旦私はこれで失礼致します」

どこか申し訳なさそうな声で、背後のノエルが立ち上がった。

「ゆっくりと湯船に浸かって、存分に疲れをお癒やしになって下さい……私は脱衣所の方で待機していますから。――柚希殿、お先に失礼致します」

「ん……」

柚希が身体を洗いながら静かな頷きを返すと、一礼したノエルは顔を上げて浴場から出て行った。そして、

「――自分がクラウスに頼めば、滝川の潜入任務がなくなるとでも思った？」

呆れたような口調で柚希に言われ、

「そんなつもりは……」

と、俯き言葉を濁した澪に、

「豪華な部屋や食事の用意は、私達が頼んだものじゃなく彼らが勝手にやった事。その見返りを求められても、こちらは断る事はできる。でも、こちらから何か要求してしまえば話は別。見返りを求められたら断る事は難しい。それ以上に――何かを頼むという事は、相手に弱みを教えるという事」

忘れたの？

「あのクラウスという魔族は、かつてウイルベルトの参謀を務めて『賢老』と呼ばれた程の策略家。豪華な部屋や食事も、ホールでの盛大な歓迎も、全ては澪を新たな魔王にするための演出。そんな相手に、自分が情に弱いと教えたらどうなると思う？　滝川を今以上に危険な任務に就かせたくなかったら。幼馴染みの無事を想う優しいメイドの願いを叶えてあげたかったら。――澪が情に訴えれば落ちると解れば、すぐに彼らはそうやって交渉や取り引きを持ち掛けてくる。それでも駄目なら、相手はもっと残酷な取り引きを持ち掛けてくるかもしれない……」

そう言って、柚希は胡桃と共に湯船に浸かっている幼いサキュバスを見て、

「それこそ万理亜を貴女の護衛から外して、確実に命を落とすような任務に就かせる事だってできる――母親やお姉さんがいる彼女には断れない事を見越して」

「……ごめん」

全く反論できない――澪が申し訳なさを得て項垂れると、

「謝る必要はない……ただ、忘れて欲しくないだけ」

忠告する口調で、柚希はこちらへと告げる。

「――ウィルベルトの力をどうするかはまだ決めてなくても、成瀬澪がどうしたいかの

結論はとっくに出ていた筈。自分が何者なのかを忘れないで」

その言葉に、澪はしっかりと頷いた。

「……うん。そうね……解ってる」

今の自分は先代魔王の娘ではない。刃更の家族で、妹で――そして彼の下僕なのだ。

たとえ何があろうと、彼の傍を離れたくない。それだけが、成瀬澪の望みだった。

だからこそ、そのためには何としても皆であの家に帰らなくてはならない。すると、

「覚えているなら良い。そのためなら私も力を貸す――それは刃更の望みでもあるから」

澪と立場を同じくする柚希が言ってくる。彼女は澪にとって絶対に負けたくないライバルで――同時に、誰よりも澪の想いを理解してくれる同志だった。だから、

「……ありがと柚希」

心強さを得た澪が、素直に感謝を告げると、

「別にお礼はいい……それより」

ん、と柚希はこちらへ泡だったタオルを差し出して、

「……澪、背中洗って」

まるで姉が妹に命令するかのような柚希の自然な物言いに、澪は思わず眼を丸くする。

少しこちらに説教できたからと調子に乗っているらしい。だから澪はフンと笑って、

「高くつくわよ……」

柚希からタオルを引ったくると、彼女の後ろへと回った。そして澪は床に膝立ちになると、柚希の背中を洗ってあげた――ただしタオルは使わず、自分の手で。

刃更に屈服させられ、性感を開発されているのは何も澪だけではないのだ。だから、

「――っひあぁぁぁんっ!?」

可愛らしい悲鳴を上げて、柚希がビクンと木製の椅子から飛び上がった。

野中胡桃は、洗い場に居た姉の柚希が悲鳴を上げて飛び上がったのを湯船の中から見た。

すると視線の先、床に尻餅をついた柚希が、

『……』

無言で背後を振り返ると、勝ち誇るように笑みを浮かべていた澪に対して反撃に出た。

強引に澪を床へと押し倒し、馬乗りの体勢になって彼女の巨乳を滅茶苦茶に揉んだのだ。

『っ――――』

たまらず悲鳴を上げ、柚希の下で身体を反らせて腰を浮かした澪は、それでも負けじとばかりに柚希の尻を両手で鷲摑みに。

『――――っ』

すると今度は柚希が、澪の腰の上でビクンと上体を反らして――そこから二人は、互いの女の意地を懸けた勝負を始めていた。そんな姉達の様子を見ていた胡桃は、

「……」

触らぬ神に祟りなし。胡桃は湯船の中で身体の向きを変え、柚希と澪のいる洗い場に背を向けた。そして、

「んー……っ」

湯船の中で伸びを一つすると、お湯の温かさがさらに体内へと入り込み、胡桃は自分の身体が芯から温まる感覚を得た。そして心地の良い息を吐くと、両手で湯船のお湯を掬ってみた。ほんのりと青い透き通ったこのお湯は、地下から源泉を汲み上げたものらしく、当然かなりの魔素を含んでいた。しかし、

……うん、結構平気になってきたかも。

魔界に着いた頃の不快さが嘘のように、今の胡桃はリラックスを得ていた。それは魔

界の魔素に慣れてきたというのもあるのだろうが、一番の原因は恐らく他にある。だから、

「……」

胡桃は湯船の中から己の左手を出し、そこへ意識を集中させた。すると光の粒子と共に、霊操術の籠手だけが具現化された。籠手には複数のスロットが設けられており、そこには色とりどりの球体が嵌まっている。英霊とコンタクトを取るためのエレメントだ。

――そして胡桃の籠手には現在、これまでは無かった闇色のエレメントが嵌まっていた。

それはルキアの執務室で、刃更によって胡桃が密かに抱えていた苦しさを、快楽による屈服で楽にして貰った後の事――眼を覚ますと、胡桃は別室のベッドの上にいた。

隣にはこちらへ寄り添うように万理亜が眠っていて、自分が何をされたのかを思い出した胡桃が、恥ずかしさに布団の中で縮こまって悶えていると、こちらの様子を見にルキアがやって来た。思わず警戒した胡桃に対し、ルキアは冷たい表情と口調のまま「マリアと仲良くしてくれて感謝します」とお礼の言葉を告げると、胡桃にあるものをくれた。

それが、この闇色のエレメントだ。ルキアがくれたこのエレメントには、魔界の高位精霊の加護が宿っており、勇者の一族の胡桃が魔界で精霊魔法を使用する際に、胡桃が契約している以外の精霊ともコンタクトが取れるようにしてくれるものだという。

しかも高位精霊の加護があるため、通常よりもずっと力を借りやすいらしい。

刃更と主従契約を結んでいないため、主従関係の強化による戦闘力の向上が行なえない胡桃にとって、それは喉から手が出るほど欲しいものだった。

穏健派とはいえルキアは魔族だ。おまけに澪を邪険にしているラムサスの副官でもある。

そんな彼女から施しをされ、それを受けるような真似をする事には抵抗があったものの、それでも胡桃は最終的に受け取る事にした。今の自分にとっては、勇者の一族のプライドよりも、刃更達の足手纏いになりたくないという想いの方が大切だったからだ。

だから少なくとも今回、魔界にいる間だけでもこのエレメントを使おうと思う。

……こんな事、思うようになるなんてね……。

野中胡桃は、自分は変わったと思う。きっと、刃更と再会したせいだろう。

以前の自分なら監視対象の澪や、魔族である万理亜と一緒に暮らしたり、それこそ共闘するなんて事は考えられなかった。

……それに。

同居生活の中で、胡桃は万理亜から毎日のようにいやらしい事をされながらも、柚希や澪に追いつくためと、それを受け入れていた。万理亜だけではない――刃更や柚希にもされた事がある。それこそ今日などは、ルキアの執務室であんな淫らな行為を許し、信じられないほど乱れた己を晒してしまった。

そして――それを恥ずかしいと思いながらも、だけど拒めない自分がいて。

……嫌じゃないんだ、あたし……。

柚希や澪のように、自分が少しずついやらしくなってきている事を胡桃は自覚した。

それだけではない。これまでは夢の中だけだったのに、胡桃は今日とうとう刃更と本当にキスをしてしまった。最初は夢だと勘違いしての事だったし、正気に戻った後もルキアを納得させるためにした事だったとはいえ、胡桃は自分から刃更に唇を重ねて――そして女の官能に溺れながら、いやらしく舌を絡めて、貪るように刃更を求めたのだ。

そっと手で唇に触れると、その時の刃更の温もりと、彼のくれた快楽が鮮明に蘇り、

「……っ」

恥ずかしさのあまり赤面して、湯船の中に口元まで浸かった胡桃は、吐き出す息でブ

クブクと湯面に泡を作る。そのため、背後に忍び寄ってきていた存在に気付かず、
「……――胡～桃さんっ♪」
「っひぁぁぁぁぁんっ!?」
いきなり背後から万理亜に抱き付かれ、胡桃は思わず悲鳴を上げた。
「ちょっ、驚かさないでよ！」
「だって、胡桃さんてばずっと、人で悶々としてるんですもん。構って貰えなくて、私はとっても寂しいです」
「あ、アンタはあっちを――お姉と澪のアレを見てれば良いじゃないっ」
こちらの言葉に、万理亜はふふっと笑って、
「勿論見ますよ。でも、ひとりで見てもつまらないじゃないですか。だから、胡桃さんと、緒に鑑賞しようと思いまして――いつも、緒にHなビデオを見る時みたいに」
「あ、あれはアンタが勉強だから見ろって無理矢理……！」
「ええそうです……だから、これも勉強ですよ」
そう艶っぽく笑うと、こちらの胸を揉み出し、さらに首筋に舌まで這わせ始めた。
「やっ、駄目……っ、あっ……あぁんっ、やぁ……んぅ、ふぅっ……あぁっ！」
万理亜に攻められ、胡桃はお湯の中で己の躰を暴れさせた。湯面をバシャバシャと

乱れさせながら逃れようとするものの、万理亜は胡桃を離してくれない。
「んふふ……もう何回もしてるのに、こうやって毎回恥ずかしそうにしてくれるから、胡桃さんは可愛いですね」
嗜虐の火が付いた瞳で、万理亜が言ってくる。
「さあ胡桃さん、脇です。脇をお出しなさい。貴女の弱い所を私がぺろぺろしたげます」
「っ――――……！」
いけない。このままでは万理亜に、またお得意の嵌めコンボを決められてしまう。
とっさに胡桃が、助けを求めるように洗い場の柚希と澪へ視線を送ると、
『――――』
少し見ていない間に、向こうも凄い事になっていた。身体を泡まみれにして、甘い息を漏らしながら、それでも相手に負けたくない心で、互いの弱点を攻め合っている。
その瞳と声が蕩けたものになり、肌が桜色に染まっているのは、お湯で逆上せたせいではないだろう。当然、二人とも胡桃のピンチなど眼中になかった。それを見た万理亜が、
「ふふふ、残念でしたね……さあ諦めるのです、この無力で淫らな女勇者め～」
「っ～～～～～～！」
左脇に唇を寄せられ、胡桃はまたいつものように快楽を刻まれそうになり、

「……ん？　何ですそのエレメント？　見た事ない色ですけど」

ふと万理亜が、こちらの籠手に嵌まっている闇色のエレメントに気が付いた。

そして、野中胡桃もまた思い出す――このエレメントをこちらへ渡す時、ルキアが自分に何と言ったのかを。まだ胡桃の隣で眠ったままの万理亜を見ながら、

『――これからも、妹をよろしく頼みます』

ルキアは確かにそう言っていた。だから、

「――――っ！」

万理亜をよろしく頼まれた胡桃は、闇色のエレメントによろしく頼んだ。

と、同時――湯面に魔法陣が展開され、

「へ――――？」

それを見た万理亜が間抜けな声を上げた瞬間――お湯の飛沫を巻き上げながら、湯船をカタパルトにしてロリエロサキュバスが射出された。そして万理亜は壁際の洗い場へと突っ込み、柚希や澪を巻き込んで盛大に木製の椅子や桶を撒き散らす。

「ど、どうしましたっ？　凄い音がしましたけどっ」

ノエルが慌てて中へ駆け込んでくるが胡桃は構わない。

顔を赤くしながら、ザバッと湯船で立ち上がり、

「ありがたく使わせて貰うわ……ふんっ」
そう言い捨てると、野中胡桃は一人で先に浴場を後にした。

3

ウィルダート城の自室にて、ひとりでの夕食を終えた後。
部屋を出たラムサスは、とある場所へとやって来ていた。
それは市街地を一望できる場所――城の中で最も高い主塔の屋上だ。
「……」
ここへ来て既に一刻、眼下に見える街の灯りをラムサスは無言で眺めていた。すると、
「本当によろしいのですか……澪様とお会いにならなくても」
ふと、傍らに控えていたルキアが口を開いた。忠実な臣下の言葉に対し、ラムサスは彼女を振り返らず、ジッと市街地の方を見詰めたまま、
「……何のためにだ」
低い声で答えたラムサスに、ルキアはそれ以上の言葉を寄越す事はなかった。ただ彼女はやがてそっと一礼をすると、ラムサスをひとりにするため下がっていった。

そして――そのまま佇み、夜風に吹かれる事しばし。

「――――」

不意にラムサスは、己の両眼を僅かに細めた。

それまであった風とは別に、異なる空気の流れが生まれたのだ。それは、普通ならば気付かないようなほんの些細な差異――背後からラムサスに、視線が向けられている。

――ルキアではない。そして彼女の配下である他のメイド達でも。

すると、視線に続いて新たに生じたものがあった。まるでこちらに自身の存在を知らせるかのように、屋上の床面を踏みしめる足音が、ゆっくりと近付いてくる。そして、

「――知っていますか？　澪が今、俺らと暮らしている所にも、この屋上みたいに街の灯りを眺められる場所があるんですよ」

そんな言葉と共に、ラムサスの横に並んできたのは、一人の青年だった。

東城刃更だ。この場所を教えたのはルキアか、或いはシエーラか。いずれにせよ余計な真似を。意に介さぬ事にしたラムサスに、刃更はこちらと同じものを眺めながら、

「昼間……メイドのノエルさんに案内されて、街を一通り見てきました。ここから見える景色が、弟さんと――その後を継いだ貴方が守ってきたものなんですね」

「……」

ラムサスが無言を返すと、刃更はゆっくりとこちらへ向き直り、
「その守るべきものの中に――どうして澪を入れてやる事ができなかったんですか？」
その言葉に、僅かに暗い感情を込めて言ってくる。
「弟さんが死んだ後――彼が信頼して澪を託し、養父母となった配下の男女がゾルギアに殺された。そして澪がゾルギアに奪われそうになった所を、間一髪万理亜が助けはしたものの、ゾルギアはすぐにシエーラさんを拉致して万理亜を脅迫してきた……」
それなのに、と刃更。
「滝川の――ラースの話では、貴方はその状況を知っておきながら静観する事を選んだそうですね。他の方達がどれだけ澪をもっと大切にすべきだと訴えても、新たな助けは一切寄越さず、ゾルギアに脅迫されている万理亜と、現魔王派へ潜り込んでいて表立っては動けない滝川という当初の二人以外には、新たな護衛を増員しようとしなかった」
何故です？
「澪は弟さんの娘だ……貴方にとっては姪でしょう。そんな彼女に明確な危機が迫っていると知りながら、どうして何の手も打とうとしなかったんです？」
真っ直ぐな瞳で問い掛けてくる刃更に、ラムサスは言った――はっきりと、

「――その必要が無かったからだ」

「必要が無かった……？」

ラムサスが澪を疎ましく思っている事は知っている。

それでも敢えて刃更がここへ来たのは、せめてその理由ぐらいは聞いておきたかったからだった。奇しくもルキアが言っていたのと同じだ。ラムサスにも彼なりの事情や想いがあるだろう。それを聞く事ができれば、たとえ納得はできなくても、その行動や感情を理解することぐらいはできると思っていた。だが――ラムサスが今こちらに対して放った言葉は、刃更にとって断じて聞き捨てならないものだった。

「ゾルギアの脅迫に悩み苦しんだ末に、万理亜が澪を裏切らなきゃいけない羽目になったのに？　澪は拉致されて、もう少し助け出すのが遅れたらゾルギアに何をされていたか解らなかったのに？　それでも貴方は、増員の必要が無かったって言うんですか？」

「彼女は助かったと報告を受けている。それ以上の何を望む必要がある」

「それは、俺達が……っ！」

ゾルギアから澪を救い出す事ができたのは、刃更達が必死に知恵を振り絞り、さらに

命懸けで必死に戦ったからだ。結果、ゾルギアに何かされる前に澪を取り戻す事ができたし、捕まっていたシェーラを無事救い出す事もできた。それを考えれば、最上と言っても差し支えない結果かもしれない。だが――ラムサスがクラウスら配下の言葉に耳を貸し、もっと多くの護衛を派遣するなど有効な手を打ってくれていたら、そもそも澪がゾルギアに拉致される事はなかったかもしれない。

そして滝川はゾルギアの隠れ家や、シェーラを監禁していた建物の場所まで摑んでいた。精鋭を揃えて両方へ同時に襲撃をかけていれば、もっと早くに元凶であるゾルギアを討つ事ができた可能性だってあるだろう。それをせずに静観しかしなかった奴が何を言う――カッとなって食って掛かろうとした刃更に、ようやくラムサスはこちらを見て、

「お前達が――何だ？　聞けばゾルギアを退けた直接の原因は、お前達ではなく、ウィルベルトの力を暴走させた彼奴の娘なのだろう？　暴走のきっかけはシェーラが殺されたと誤解したからだそうだが、ゾルギアが下手に手を出そうとすれば彼女は激しい拒否反応を示した筈だ。ならば、お前やお前の幼馴染みの少女がいなくとも、どのみち彼女は助かったと考える方が自然だと思うが？」

「……そうかもしれません。別に俺達が何もしなくても、澪やシェーラさんが助

かっていた可能性は確かにある」

でも、と刃更。ぐっと語気を強めて、

「それは、実際に澪達を助け出した俺達だけが口にして良い言葉だ――何もせずに黙って見ていただけのアンタが、自分に都合の良い過去の可能性を語るなよ」

「……」

こちらが痛い所を突いたのか、黙り込んだラムサスに対し、

「……貴方の判断の正否を問うつもりはないです。貴方の言うように、澪もシエーラさんも無事だったし、万理亜やゼストをゾルギアの支配から解放する事もできたんだから。俺が知りたかったのは、貴方が本当に澪の事を疎んじているのかどうかです」

と刃更。

「でも、もう良い――もう良く解った。アンタと弟さんの間に何かしらの確執が存在するとか、それ以外に何かしらの理由があるとか、考えられる可能性は幾らだってあるけれど……何を言われたって、俺が納得する事はない。俺は澪を――妹になった彼女を、家族になったアイツを守ると決めた。だから、アンタが並べる理屈や御託がどれだけ大層なものだったとしても、そんなものは俺の知った事じゃないし、どうでも良い事だ」

「――ならば、お前はクラウスの言うようにあの娘が次代の魔王になるべきだと？」

低い声で問われた刃更は、ゆっくりと首を横に振った。

「いいや……クラウスさん達は確かに親切で、・見澪の事を想ってくれているみたいだけど――実際は先代魔王の力を受け継いだ、たった・人の娘というエピソードを添えて、澪に王としての資質があるかどうかとか、アイツにどんな意思や想いがあるかとか、そんな事は・切お構いなしに政治の道具として使おうとしているだけだ」

澪は普通の女の子で、静かに暮らす事ができればそれで良いのに。

それだけをウィルベルトも願って、自分から離れた人間界で暮らさせていたのに。

それなのに――ウィルベルトを敬愛していると語るクラウスは、己の主の遺志を無視して澪を新たな魔王に据えようとしている。聞けば現在の魔王も、枢機院という高位魔族の老人達によって祭り上げられた存在らしいが、それと何も変わらないではないか。

……おまけに。

自分の主の娘と、大戦の敵だった男の息子が主従契約を結んだというのに、クラウスは刃更に対して不自然な位に好意的だ。ひょっとしたら、止むを得ず結んだ刃更との主従関係すら、ウィルベルトが前の大戦を止めて軍を引いたからこそ、勇者の・族の戦神と恐れられた迅の・人息子と結びつきができたのだと、新たなウィルベルトの功績や美

談として利用しようとしているのかもしれない。よって、

……どいつもこいつも同じだ。

結局は、自分達の都合しか考えていない――だからこそ東城刃更は許せない。

許さない。

「貴方にもクラウスさんにも、それぞれ色々な想いや事情はあるんでしょう。穏健派の中でもお偉い貴方達の考えを、配下の方達が尊重するのも理解できます。だけど――アンタ達は澪を利用しようとしているだけで、アイツの事を見ていない。澪が一番苦しんでいる時に、それを知っていて助けようとしなかったアンタも。そんなアンタに従って結局は澪を放っておいたクラウスさん達も、結局は同類だ。俺からすれば、アンタ達は誰も彼もが等しくクソったれだよ」

魔界に来いと言われてから、これまでずっと我慢してきたが、もう限界だ。

言う。

「はっきりと言っておく。アンタらの都合でアイツを振り回すな。今まで澪を邪険にして、遠ざけておいて……今さら現魔王派との戦争に勝つために必要だから、お前の中にある力か、お前自身のどちらかを利用させろ？　ふざけるなよ。あの力は、アンタの弟さんが死の間際に、自身から遠ざけてまで守ろうとした愛娘の助けになればと託した

ものなんだ。澪はこれまでに周囲の都合や思惑で色々なものを失ったり、諦めたりしてきている。もう充分なんだよ」

良いか。

「こっちはもう、アンタ達に何も望まない。何も期待しない。だから、せめてこれ以上アイツから何も奪うな。澪にとって、あの力は実の父親の形見で、唯一の絆のようなものだ――それをアンタらにどうこうできる権利や資格は断じてない！」

刃更がぶつけてくる言葉を、ラムサスは黙って聞いていた。

……これがあの男の息子か。

成る程。確かに、報告にあった勇者の一族の《里》から追放されているという話もこれならば頷ける。確かにこの少年は、勇者には向いていない。

……こうも青臭くてはな。

だから、ラムサスは感情任せの理想を吠えるだけの少年に現実を教えてやる。

「王族は自分のために生きるのではない。民のために生き、そして死ぬ――その血の宿命からは誰も逃れる事はできない。あの娘もウィルベルトの娘である以上、王族の端く

れだ。民のために己にできる事をするのは当然の義務だろう」

「だから！　散々放っておいて、今さら『王族だから』とか、そんな勝手な理屈が――」

「――庶民として暮らしていた者が、王族の血を引いていると判明した途端に連れ戻され、その後の生涯を変えさせられる事など別段珍しくもない」

そして、とラムサス。

「私とクラウスらとでは考えや方法こそ違うが、ここから見える景色全てが、民の上に立つ我々が守らなくてはならないものだ。昼間、実際に市街地へ行ったのならば見てきただろう。お前はあの娘を守るというが――その結果として、お前達が街で見た物、出会った者全てが失われてしまうかもしれないという現実を理解できているか？」

「そんな事ぐらい――」

反論しようとした刃更に、ラムサスは淡々と告げる。

「ならば構わないだろう。大体、お前は先刻あの娘が多くのものを諦めたり失ったりしていると言っていたが……彼女はこれまで、政治的ないざこざや揉め事など無縁の場所で、幸せに暮らしてきていた。それは、彼女がウィルベルトの娘だったからできた事だ。そのウィルベルトが死に、その存在が必要になったから呼ばれた――それは時が来た

という事だ。これまで向き合う事を免れてきた、己の血と責任に相対する時が」

「っ……」

こちらの言葉に、苦い表情で黙り込んだ刃更に対し、

「まあ貴様の言葉に、頷ける部分が全くない訳ではない。あの娘にEの資質があるか疑問だと言ったが――」

ラムサスは告げる。

「確かにその通りだ。勇者の里から追放されるような小僧と主従契約を交わし、快楽に縛られた卑しい下賤の存在に身を窶した小娘に、Eとしての資質などある筈がない。だから、大人しくウィルベルトの力を渡せと言っているのだ」

そう口にした途端、その場の空気に異変が生じた。刃更がこれまでこちらに向けていた悪感情を、より鋭利で冷たいものに変えたのである。

それは殺意だ。そして、

「取り消せ……さもないと」

そう言った刃更の右の手がラムサスへと伸びた――その瞬間。

「――そこまでです」

刃更の首元に無数の槍先が突き付けられた。それは、一瞬の内に刃更を取り囲んだ

メイド達によるもの。そんな武装したメイド達を束ねるルキアが、ラムサスの隣へと並び、

「ラムサス様に対する、先程の侮辱の言葉も聞き捨てなりませんが――それ以上の不敬を働くというなら、たとえ澪様やマリアの恩人である刃更殿であろうと容赦しません」

冷たい口調で言い放つと、

「……」

刃更は俯き、沈黙した。ところが、

『――――っ？』

刃更へ槍を向けていたメイド達が、ギョッとしたように身を硬くした。

それまで以上に、刃更の殺気が膨れ上がったのだ。そして、

「侮辱……侮辱だと。それはこっちの台詞だ。澪を――妹をあんな風に侮辱されて、その言葉を取り消させずに、この程度の忠告で俺が引き下がると思っているのか？」

周囲のメイド達を完全に怯ませた刃更の右の手に、光の粒子が漂い始める。

それは自身の武器を具現化するもので、

「……残念です。貴方はもう少し賢いと思っていました」

そう告げたルキアがスッと眼を細め、配下のメイド達に命令を下そうとした時だった。

「――はいはーい、そ・こ・ま・で♪」

横合いから、張り詰めたこの場の空気に不似合いすぎる明るい声が発せられた。

ラムサスがそちらを見ると、そこにはゼストを伴ったシエーラが立っており、

「母上……」

眉根を寄せたルキアがシェーラへ視線を送ると、
「ねえルキアちゃん……こんな所で始めれば、すぐに澪ちゃん達にバレるわよん。それでここへ駆け付けられでもしたらどうするの？　よしんば気付かれる前に刃更君を無力化したところで、どのみち刃更君にした事はバレちゃうわ。地下牢に閉じ込めておいたところで、澪ちゃんと柚希ちゃんは刃更君と主従契約を結んでいるんだもの」
「だったら――」
「――位置探知でバレないように結界を張る？」
反論しようとしたルキアに、笑みと共にシェーラが先回りして言った。
「無駄よ。そんな事したら、余計に不信感を抱かれるだけ。そうしたら、いよいよ澪ちゃんから協力は得られなくなるわよ？」
「――――」
ルキアが沈黙を返すと、シェーラは次に刃更へと視線を移し、
「刃更君もその辺にしておきなさいな。ここでルキアちゃん達やラムサスと戦えば、勝つにせよ負けるにせよ貴方は無事では済まない。貴方が大切にしている澪ちゃんは優しい娘でしょう。貴方が自分のために怒り、傷付いたと知ったら――きっと彼女は自分の事を責めるでしょうね。そうなっても良いのかしら？」

「……」

その言葉に、刃更はしばし無言だったが――程なくして殺気を放つのを止め、武器の具現化の兆候を解いた。それを見たシエーラが「良い子ね」と笑うと、途端にメイド達の表情が、胸を撫で下ろしたものになる。そして、最後にシエーラはラムサスを見て、

「それじゃあ、刃更君は連れて行くわ――構わないわね？」

「……好きにしろ」

こちらがそう言い放つと、シエーラは「それじゃあ」と刃更とゼストを連れて去っていった。そしてシエーラ達が屋内へと消えると、

「――申し訳ありませんラムサス様。母がご無礼を」

ルキアがこちらへ頭を下げてくる。そんな彼女に、

「構わん……あの女の奔放は今に始まった事ではない」

ラムサスはそれだけを告げると、今度こそひとりにしろとルキアらを下がらせた。

そして、ラムサスは再び街の方を眺め始めた。

視線の先では、まるで大地を星々が彩るかのように、多くの灯りが煌めいている。

シエーラに連れられて、ゼストと共にラムサス達のいる屋上を離れた後。

東城刃更は、彼女達に案内されてある場所へと来ていた。

男性ゲスト専用の大浴場だ。魔界へ来る前に風呂には入っていたし、今は一人になりたかったため刃更は最初断ろうとしたが、

「――このままラムサスに苛立ったままじゃ、眠れないと思うわよ？」

というシエーラの言葉には反論できなかった。今日は魔界へ来てから色々な事があったし、意識している緊張感の他にも、無意識での精神的なストレスもあるだろう。

リラックスしすぎて気を抜くような真似は絶対に避けなければならないが、かといってこちらにどれ位の期間滞在するのか現状まだ読めないのだ。過剰に気を張り続けて消耗した結果、いざという時にロクに動けなくなるような事になってはお話にもならない。

よってシエーラの提案を受け入れ、入浴させて貰う事にしたのだが、

「……やっぱり、こうなりますよね」

あの万理亜よりも奔放な母親なのだ。サキュバスの本能にも正直なのだろうと思ったが、案の定シエーラは刃更と入浴を共にしてきた。勿論、ゼストも一緒だ。

すると堂々と裸をこちらに晒しているシエーラは、ふふっと笑って、

「当たり前じゃない……ゼストちゃんは刃更君のお世話をするメイドなんだし、私はそのゼストちゃんの主なのよ？　見習いメイドのゼストちゃんが、失敗せずにきちんと刃更君をお世話できるか、この眼でしっかりと監督する義務があるもの」

凄え……強引な万理亜と違って屁理屈をこねるのが上手すぎる。何つー質の悪さだ。

このまま万理亜が成長して、将来シェーラみたいになったらどうしよう――と刃更が一抹の不安を得ていると、

「……それでは、失礼します」

とゼストが言って、刃更の背中を洗い始めた――大きくなった彼女の胸で。

「――ちょっと待てっ！　いきなり自然な動作で何やってんだゼスト!?」

思わず刃更が背後を振り返ると、胸を泡まみれにした裸のゼストが泣きそうな顔で、

「も、申し訳ありません……まだこういう事に不慣れで。もしや痛かったでしょうか？」

「え、いや……そんな事は」

どこの世界に女の子の胸で背中を洗われて痛がる男がいるんですか――思わず敬語で突っ込みたくなったが、あまりにもゼストが申し訳なさそうにしているので何も言えない。

「上手くできずに申し訳ありません、刃更様……主の身体はこうして洗うものだと、

シェーラ様よりきちんと教わっていたのですが」
「解った……大丈夫だ。それに別に全然下手とかじゃ――じゃなくて、お前は悪くない」
と刃更は慌ててゼストに告げると、そのままシェーラを睨み、
「シェーラさん……ゼストに何をきちんと教えてくれてるんですか？」
「あら刃更君、そんな怖い顔でこっちを見て……何かおかしい事でもある？」
と、悪びれずに笑顔でシェーラ。
「殿方の身体を洗う時に、女が自分の身体を使う事以外のやり方を私は知らないのだけれど。きっと人間と魔族の文化の違いね」
「いや、どう考えてもアンタらサキュバスだけの文化だと思いますが」
他の種族の魔族に謝れ、このロリ母サキュバス。
「とにかく、人間達の間では『郷に入っては郷に従え』という言葉があるんでしょう？ここは一つ、刃更君にはこちらの文化に慣れて貰わないとね」
「……『郷』というより、『業』な気がしますが」
深すぎんだろ。
「どうしてもと言うなら自分で洗って貰っても良いけど……」

残念そうにシェーラは言って、
「その場合は、メイドとしての仕事ができなかったという事だから……ゼストちゃんには後でお仕置きしないといけないわね――それはもう、キッツい奴を」
「……っ、解りましたよ。じゃあ、ゼスト……悪いけど頼む」
「はい……！」
申し訳なさそうに言うと、ゼストは嬉しそうな顔になって、刃更の身体を再び柔らかな胸で洗い出した。やばい……凄い柔らかい、大きくて気持ち良い。そして、これまで同じようにして刃更の身体を洗ってくれた者達の誰とも微妙に違う。刃更は女の子の胸に、一つとして同じ感触がない事を改めて知った。これは深く考えると理性が色々危険すぎる――取り敢えず「国民の祝日」か「素数」をカウントして気を紛らわそうとしていると、
「……んー？　何だか刃更君、あまり動揺してくれないのね」
つまんない、とシェーラに言われ、東城刃更は嘆息する。
「甚だ遺憾なんですけど……最近ちょっと慣れてきました」
「あらまあ、凄い台詞だわ。女の子の胸で身体を洗われる事に慣れましたなんて……その若さで随分と良いご身分ね」

「八割方、おたくの娘さんのせいなんですけど……」

これまで、万理亜の提案によって主従契約を結んだ澪や柚希にも、胸で身体を洗われた経験は何度かある。またそんな二人を嫉妬させて主従契約の呪いで催淫状態にするため、わざと万理亜が澪達に見せつけるようにしてきたり、挙げ句には胡桃までそれに巻き込まれて彼女にもされた事がある。――残る二割は、唯一の例外である養護教諭の長谷川千里だ。長谷川だけは主従契約や戦いなどに関係なく、万理亜に巻き込まれて仕方なくでもなく、彼女自身の意思で自分から刃更にそうした行為をしてきている。すると、

「……失礼します」

背後のゼストがそう言って、しっかりと柔らかな胸を押し付けて洗うために刃更の腹の前に回していた彼女の手を、そっと下へと降ろした。泡まみれのゼストの手が、刃更の腰に巻いたタオルの下からぬるりと中へ入れられ、

「ま、待てゼストっ、流石にそこは自分でできるっ！」

「し、失礼しました……っ」

堪らず刃更が悲鳴を上げると、ゼストが慌てて手を引こうとした――その瞬間、

「――続けなさいゼスト」

温かな浴場に、ゾッとするほど冷たい声が響いた。ふざけるのは止めて下さい、と刃更はとっさに言おうとした――だができなかった。シェーラが、その幼い外見からは考えられない程の迫力を湛えて、こちらを見ていたからだ。

「できる事を、それでも代わりにやるのがメイドの仕事で、存在意義よ……続けなさい」

「っ……される側が必要ないと言っているんですが？」

刃更が息を呑みながら、それでも反論すると、

「それは、メイドの仕事と存在意義を否定する事ね刃更君。『お前が傍にいる必要がない』と言っているのと同じよ。大体、刃更君は少し勘違いしているみたいだけれど……」

と冷たい口調でシェーラ。

「ゼストは、私が刃更君の世話をするように命じた私のメイドよ。彼女の主は私であって、君じゃない。もし私が命じれば、他の男の身体だって洗わなくてはいけないし……」

笑う。

「それこそ、街でトラブルになった兵士の相手をして来いと私が命じれば、それに従って貰う。誰かのメイドになるというのは、そういう事なのよ」

その言葉に、刃更は不快さを滲ませて、
「冗談にしては悪質ですね……だったらゼストに、貴女のメイドを辞めさせれば良い」
「だから、そんな権利は貴方にはないのよ刃更君。貴方がゼストを、私達穏健派に預けて、彼女は今私のメイドをしている……よって、彼女に関わる一切の決定権は私にあるわ。それは、他でもない――貴方の決断によって迎えた結果よ」
「それは……っ」
とっさに刃更は反論しようとした――ゼストには、何か問題があればいつでも東城家へ戻って来いと言っていた。ゼストの実力があれば、逃げるくらいの事はできるだろうからと。しかし、それはあくまでゼストに対して告げた言葉であって、シェーラに対して通じる言葉ではない。苦い表情になる刃更に、
「勝手よねえ……自分の知らない所ではゼストちゃんがどうなろうと構わないけれど、自分の眼が届くところでは都合良く幸せに振る舞って欲しいだなんて」
とシェーラが酷薄に笑った。
「まさか――ゼストちゃんが城内で孤立している事に気付いていないなんて言うつもりはないでしょうね？」
「……」

刃更は黙り込んだ。それは薄々、感づいていた事だったからだ。シエーラやルキア以外に城内でゼストに話し掛ける者は見かけなかったし、街を案内された時もノエルはゼストとほとんど会話しなかった――恐らくノエルの性格からすると、自分の意思というよりは上からの命令に従ってそうしているのだろうが。やはり、かつて現魔王派だったゼストが、穏健派で居場所を作るというのは並大抵の事ではないのだ。そこへ、

「――言っておくけれど、ゼストちゃんの立場はもうすぐ今以上に悪くなるわよ」

と、聞き捨てならない事をシエーラが言った。

「ど、どうしてですか？」

「解らない？　澪ちゃんの決断が、ラムサスの意に添うものだったとしても、クラウスの意に添うものだったとしても、どちらにせよ、方からは反感を買う事になるわ。既に先刻、刃更君はラムサスに考えなしに食って掛かってしまったしね。それこそ、どちらも嫌だなんて言ったら、この穏健派に貴方達の味方はいなくなるわ」

だから、

「もしこれで貴方達が無事に人間界へ帰れたとしても……その後、貴方達へ抱いた敵意の矛先が誰に向かうかは解るでしょう。ゼストちゃんは、貴方が私達に預けたのだから」

「そんな……」

刃更は呻くように呟いた。そんなつもりはなかった――澪のために怒った事が、ゼストの立場を悪くしてしまうなんて。思わず言葉を失くしたこちらに、

「全ては刃更君の決断が招いた事よ。今の君には、ゼストちゃんの行動を止める権利はない……それでも、どうしてもゼストちゃんに言う事を聞かせたいのなら。ゼストちゃんが、彼女自身が望まぬ相手に穢されるような可能性から彼女を守りたいというのなら」

シェーラはふふっと笑って、

「刃更君――貴方がゼストちゃんの主になり、彼女を自分のものにするしかないわね」

「俺が、ゼストの主に……」

刃更がゼストを見ると、俯き瞳を伏せたものにしていたゼストが、そっとこちらと視線を合わせてくる。彼女の瞳には、刃更を拒絶する雰囲気はない――むしろ、シェーラの言った事を望んでいるようにも見える。しかし、

「でも主従契約魔法は、満月の日にしか使えないでしょう……次の満月はまだ先で」

「あら……じゃあ刃更君は、ゼストちゃんと主従契約を結ぶ事に異論はないの？」

「ゼストも――彼女自身もそれを望むなら、ですが」

刃更はシェーラに対して言い切った。ゼストと主従契約を結ぶ――その選択肢は、この魔界へ来る前から刃更の中にあったものだからだ。

「――――」

刃更の言葉に、ゼストが驚いたようにこちらを見る。そして、

「――あら、だったら何の問題もないわね」

とシェーラが言ってきた。

「満月の夜という縛りは、あくまで人間界で使う時のものよ……魔界では、主従契約魔法はごくポピュラーなものだから、いつでも使う事は可能なの。そして、私が気まぐれで奔放な事は皆が知っているから、私が主従契約魔法で関係を結ぶ事を認めたと言えば、あのラムサスやクラウス達であっても文句は言えない筈よ」

「……そうなんですか」

シェーラの言葉に刃更は納得の呟きを漏らした。そして、同時にシェーラが何故いきなり態度を豹変させてまで、このような事を言ってきたかを理解する。きっとゼストの立場は、刃更が想像しているよりもずっと危ういものになっているのだろう。だから、

……もうチャンスは今しかないって事か。

ゼストの事を、本当の意味で守ってやれるかどうか――刃更は今、その分水嶺に

立っていた。しかし、シェーラの言うように「何の問題もない」訳ではない。だから、
「ゼスト……聞かせてくれ。お前は、俺と主従契約を結ぶのは嫌じゃないのか？」
東城刃更は、眼の前のゼストに問い掛けた。すると、
「それは……私の、存で決めるべき事では。澪様達にもご許可をいただかないと」
ゼストは唇を噛んで俯いた。そんな彼女に、東城刃更は言ってやる。
「――許可ならもう取ってある」
「え――――……？」
驚き、顔を上げてこちらを見たゼストに、
「他の奴らにはこっちへ来る前に、必要があると判断したらゼストを連れ戻すつもりだと言ってあったし――賛成もして貰っている」
そして、
「当然その中には――澪も含まれている」
「澪様が……？　……本当、なのですか？」
呆然となるゼストに、刃更はふっと笑顔で教えた。
「本当だよ。そんなアイツだから、俺は絶対に澪を守ってやりたいって思うんだ……だからお前さえ良ければ、これからは俺と一緒にアイツの事を――自慢の妹を守るため

に力を貸して欲しいんだ、ゼスト」
頼む。
「もしも、お前がアイツを守るために力を貸してくれるなら……そんなお前を、これからは俺が全力で守るから」
そう言って、東城刃更はゼストの事を見詰めた。すると長い長い沈黙の後、
「……嫌です」
刃更が耳にしたのは、消え入りそうな声で発したゼストの拒絶の言葉だった。
だから、そうか――と刃更は言おうとして、しかし言えなかった。
ゼストの言葉には続きがあったからだ。それは彼女がずっと抑えていた感情で、
「私も澪様をお守りします。ですが……私自身が刃更様に守っていただくだけなのは嫌です。それでは主従契約を結ぶ意味がありません。私は刃更様のメイドに、本当の配下になりたいです……貴方のために生きる、貴方と運命を共にする者に」
「ゼスト……」
己の想いを告白してきたゼストに、刃更がその名を呼ぶと、
「お願いします、刃更様……どうか私を、ずっと貴方の傍に置いて下さい」
そう言って、ゼストはそっとこちらの胸に縋り付いてきた。

だから、刃更は「解った」とゼストの耳元で囁くと――自分達の決断を伝える。

「……シェーラさん、お願いします」

そう刃更が言った瞬間――刃更達の足下、大浴場の床に魔法陣が展開された。

それは刃更とゼストが主従契約を結ぶためのもので、

「――用意しておいたものが無駄にならなくて良かったわ」

まるでこうなる事を全て見越していたように、幼くも妖艶なサキュバスが笑った。

「澪ちゃんや柚希ちゃんと同じになりたいなら、契約はサキュバスの魔力が良いものね」

そうシェーラが言うと同時、刃更の右手の甲に魔法陣が出現する。

そして――そこから先はもう、言葉は要らなかった。

「――――」

「――――」

刃更がゼストに右手の甲を差し出すと、ゼストは刃更の前に恭しく跪いて――

そのまま刃更の右手の魔法陣にそっとキスをした。

すると刃更とゼストの身体が同じ光に包まれた。主従契約が結ばれたのだ。

……これで。

ゼストは刃更の配下となった。だがそれは、今後ゼストを守れるかどうかも刃更次第になったという事だ。その責任の重さを感じながら、刃更はゼストの腕を引いて彼女が立つのを助けてやろうとした――すると、

「やっ――ふあぁぁあぁあんっ！」

甘い嬌声を上げながら、ゼストが刃更の胸へとしなだれ掛かってきた。見れば、ゼストの喉に主従契約の呪いが発動した際に出る、首輪のような痣が浮かび上がっていた。

ゼストは刃更の腕の中で、信じられないような甘い悦楽に全身を震わせた。

……っ、これが……。

苦しいのに、それ以上の幸せな感覚が、躰の奥からどんどん溢れて止まらない。

甘い疼きと痺れを得ながら、ゼストは初めて知識ではなく実際に体感する。

自分が得ている甘美な感覚――これが女の快楽なのだと。すると、

「な、何でだ……？　契約は上手くいった筈じゃ？」

こちらを抱きしめながら、刃更が困惑したような声を上げた。これでは、まるで澪や

柚希と主従契約を結んだ時と同じだと。ゼストは澪達と違って、魔法陣が消える前にきちんと刃更の手の甲にキスをしているというのに――ゼストも同じ疑問を得ていると、
「あらぁ……こんな事もあるのね」
これには予想外とばかりにシエーラが言った。
「刃更君から大丈夫だと言われはしたけれど、真面目なゼストちゃんの深層心理は、自分が配下になれば刃更君の迷惑になるんじゃないか、って想いがあったみたいよ」
「なっ――……!?」
ゼストが感じた後ろめたさの理由に、刃更が思わず絶句した。
「っ……も、申し訳ありません……刃更様のお言葉を、疑った訳では……んうっ」
ゼストは泣きそうになりながら、刃更の腕の中で甘く喘ぐ。すると、
「あのね刃更君、ちょっと言い難いんだけど……私は全盛期より力を失っているけれど、それでもサキュバスとしての力はまだ万理亜より上なのね。だから多分、催淫の呪いの効果は澪ちゃんや柚希ちゃんのものよりも強く出ちゃうと思うの」
「ええ、そんな事だろうと思いましたよ！」
と、ゼストを抱きしめてくれながら恨めしそうに刃更。
「まあ……ゼストちゃん自身の力は澪ちゃん達より上だし、そこまで深刻な後ろめたさ

じゃないでしょうから、彼女達よりも長い時間耐える事はできると思うけど」
「慰めになるのかならないのか、よく解らない情報をありがとうございます」
刃更は嘆息すると、そっとゼストを浴場の床に仰向けに寝かせてくれた。
「っ……刃更、様……？」
初めての快楽に抗う術を知らず、ゼストがとろんとした瞳で刃更を見上げると、
「ゼスト、少しだけ我慢してくれ。なるべく早く屈服させて、お前を楽にしてやるから」
だから、と東城刃更は言った。
「俺を――お前の主として受け入れてくれ」
その言葉は、ゼストが一番欲していたもので――だから、激しい快楽に震えながらも、
「……はい、刃更様」
それでもゼストは微笑んで、そして両手を広げて言った。心の底から従順な声で、
「ゼストは刃更様のメイドです……その事を、私にたっぷりと教えて下さい」
そう告げると、刃更は頷きを一つして――そっとゼストの胸へと手を伸ばしてきた。
……あ……。

ゾルギアはおろか、他のどんな男にも触れられた事のない肢体――刃更と離れている間に、彼を想い続けて、いつか彼に触れられる日を夢見て、それだけでこんなにもいやらしい大きさの胸になって。昼間には、市街地の警備兵に触られてしまいそうになったが、それを刃更は阻止してくれた。ゼストの操を――初めてを、守ってくれたのだ。

……ああ……っ。

だからゼストは、ついに己の乳房を刃更に触れて貰える瞬間が訪れる事に、胸を甘く高鳴らせた。刃更の手が近付いて来る――それだけでもう感じてしまう。

そして、いやらしくたわわに育ったゼストの乳房を、刃更の手が揉んだ――その瞬間、

「っ――――……！」

初めて胸を揉まれた女の、震えるような絶頂によって、ゼストの屈服が始まった。

眼の前が真っ白になり、刹那に意識の空白を得たゼストは、やがて戻ってきた視界の中に、変わらず刃更の姿があるのを見て、

……嬉しい、やっと私も刃更様に……！

気が遠くなりそうな程の幸せに打ち震えた。

――以前、ゼストは刃更が柚希と主従契約を結び、その後、東城家の浴室で澪や万

理亜も加わって湯船を共にしていた。部始終を見た事がある。その時からずっと決めていたのだ。もし刃更に屈服する時は、絶対に浴室でして貰おうと。その望みが叶い、ゼストは刃更の名前を呼んでその事を伝えようとした。だが、こちらを一刻も早く屈服させようとしているためか、最初は優しかった刃更の指使いがすぐに強引になり、

「あぁっ、やぁん……んっ、ふぁあんっ、はぁ……やぁ、あっ……はあぁぁんっ♥」

両の乳房を滅茶苦茶に揉みしだかれ、ゼストは甘い嬌声を上げる事しかできない。あっという間に全身が快楽に染まり、官能で火照ったゼストの褐色の躰が艶めく。

それでも自分の悦びを伝えようと、ゼストは身をよじらせ、甘えた声を上げながら、

……凄い……私の胸、こんないやらしい形に……っ。

刃更の手で揉まれ、彼の指を埋められる度に、大きくなったゼストの胸は淫らな形へと変化して——そしてゼストは己の乳房の柔らかさを知った。

いやらしかった。刃更に揉まれている乳房も、それで感じている自分も。そして、そんな自分を刃更に見られている事に、ゼストはより一層の強い快感を得る。そしてゼストは、自分の胸の先端が快楽に悦び、ぷっくりと張り詰めているのを見た。快楽にとろけそうなほど柔らかくなったゼストの大きな乳房で、そこだけが硬くなっている。

そうして敏感になった先端を、刃更はこちらの胸を滅茶苦茶に揉みながら、親指と人

差し指で摘まんで、擦り上げた――その瞬間、

「やっ――ふあぁぁぁぁぁぁぁぁんっ♥」

一度目など比ではない程の絶頂を得て、ゼストは全身をわななかせながら達した。自然と躰が弓なりになり、腰がはしたなく浮いてしまう。そんなこちらの腰の下へ刃更の右腕が回されると、ゼストは強引に躰を起こされた。そして、ふわりと浮遊感を得たと思った時には、ゼストは刃更と向かい合う対面座位のような体勢になっていて、

気が付けばゼストは、己の胸の先端を刃更に吸われていた。

「あ――あぁ……っ」

突然の事に、思考が感覚に追いつかない。それでもゼストは、自分が何をしなければいけないか女の本能で理解していた。だから刃更の頭の後ろに両手を回し、さらに彼の腰に両脚を回してギュッとしがみ付く――と同時、不意にゼストの視界から刃更が消えた。一瞬、彼が自分を置いてどこかへ行ってしまったのかと不安になる。

だがそうではなかった。刃更は今もゼストの眼の前にいた。

――それを教えてくれたのは、鏡張りになっている浴場の天井だ。

ゼストは、激しい絶頂に喉を見せて上半身を仰け反らせている自分と眼が合った。

……これが、私……？

そこに映し出されていたのは、いつもの冷徹なゼストではなかった。激しい絶頂に嬌声を上げながらも、淫らな笑みを浮かべている――快楽に陶酔した、ただの女だ。

――だが、ゼストは構わない。今のゼストは、己がどれだけ淫らな顔をしていようと関係なかった。そんな事よりも、刃更がこちらの胸を吸い、さらには両手で尻を滅茶苦茶に揉んできてくれている――そうして得られる快楽の方がずっと大切だった。だが、

「やっ、あぁ……んっ、ど、どうして……私っ、熱いの止まらな……ふぁあんっ」

これだけ絶頂を重ねても、ゼストの呪いが解ける事はなかった。絶頂を重ねて限界まで上半身を反り返らせたゼストの視界は、いつしか己の背後になっていて、

……あ……。

そこにシエーラが居た。ゼストがはしたなく達している姿を見た彼女は、幼い容姿に不釣り合いな程の妖艶な笑みを浮かべていた。その口が、何かを告げるように動くと、彼女は浴室の出口の方へと向かってゆく。

……シエーラ、様……？

ゼストが刃更に完全に屈服するのを見届けずに行ってしまうのだろうか。甘い絶頂に意識を蕩けさせているゼストは、シエーラが何を言ったかは解らない。あまりに強すぎ

る快楽で、聴覚が飛んでしまっているようだった。だが――その答えをゼストはすぐに知る事になった。刃更がゼストの肩を抱き寄せ、強引に躰を起こさせたからだ。

そして、眼の前でこちらを見詰めている刃更の口がそっと動く。

「……？」

ゼストは、読唇術を使えない。

それでも、「耳」と「行くぞ」というワードだけは辛うじて読み取れて。

そして――ゆっくりと刃更がこちらの耳元へそっと唇を寄せてきた。

……刃更様、一体何を……？

既に自分は胸も尻も、全身を滅茶苦茶にされている。だからゼストは、今さら刃更が何をしようとしているのか解らなかった。

そして次の瞬間、ゼストは一つの事実と真実を知った。

耳が立派な性感帯である事と――そして己の弱い場所が一体どこだったのかを。

「……あのー、刃更殿？　まだご入浴中ですか？」

メイドのノエルは、男性ゲスト用の大浴場の中へと呼び掛けを放った。

入浴後、刃更の戻りがあまりにも遅い事を心配した澪達に頼まれ、様子を見に来たのだ。

刃更の服だけでなく、ゼストやシエーラの服もそれぞれ脱衣を入れる篭にあった。

中にいる事は間違いない。とはいえ、こんなに戻りが遅いとなると、

……湯船で逆上せて、中で倒れているとか？

刃更達が無事か確認しに中へ入るべきだろうか――ノエルが思考を迷わせていると、

『――――――っ♥』

浴場の中から、ゼストのものと思われる凄まじい嬌声が聞こえてきた。

「っ――だ、大丈夫ですか……――っ!?」

体何事かと、慌ててノエルは浴場の中へと足を踏み入れ――そして見てしまう。

刃更の膝の上で左耳を噛まれ、激しく達しているゼストの艶めかしい姿を。腰から尻にかけてをぶるぶると震わせ、大きな胸を快楽にわななかせている彼女の淫靡な姿に、

「……あ……」

ノエルはぺたんとその場にへたり込んだ。腰が抜けてしまったのだ。そこへ、

「――タイミングの良すぎる娘ね」

ふと耳元で笑みを含んだ声がした。すると後ろから伸びた小さな手に、ノエルは両眼を目隠しされる。そして、まるで耳から心の奥にまで染み渡ってくるような声がした。

『でも、ここで見た事は忘れなさい。貴女はこれから澪ちゃん達の部屋に戻り、刃更君は今夜は戻らないけれど、何も問題はないと伝えて安心させるの――良いわね？』

「……はい」

ノエルはぼんやりと頷きを返すと、その言葉に従ってふらふらと浴場を後にして。

そして澪達の部屋へ向かった。今夜は刃更は戻らない――そう彼女達に伝えるために。

そしてノエルを追い返す事に成功したシエーラは、

「さて……これでもう、誰の邪魔も入らないわね」

と楽しそうに笑った。すると、

「……あの、シエーラさん」

と、ゼストを抱きかかえながら刃更がこちらを呼んできた。
「貴女の言うように、ゼストの弱点は耳だったみたいです……ありがとうございます」
刃更に耳を噛まれ、完全に意識を飛ばしたゼストの首にはもう呪いの痣はない。だが、
「あら刃更君……お礼を言うのはまだ早いわよ？」
「？　それは、どういう……」
キョトンとなった刃更に、シエーラは告げる。
「君が今したのは、あくまでゼストちゃんの意識を快楽で飛ばしただけの、一時凌ぎの応急処置でしかないわ。ゼストちゃんは自分が配下になる事で、君の迷惑になってしまうかもしれないと想って呪いを発動させてしまったのよ？『自分は刃更様の迷惑にならない』『刃更様の役に立てる』って事をきちんと実感できない限り、意識を取り戻して冷静になったら、きっとまた後ろめたさを感じて呪いを発動させちゃうわよ」
「そんな――じゃあ、何のために俺はこんな」
「安心なさい……貴方がやった事は無駄ではないから」
とシエーラは言うと、刃更達の下へと歩み寄った。そして、そっとゼストの頬に触れ、
「さあ、ゼストちゃん……起きなさい」
そう優しく告げると、ゼストはゆっくりと両目を開けて、

「……あ、……シェーラ様……私、は……」
「覚えてない？　貴女は刃更君にご奉仕している途中で、気を失ってしまったのよ。だからさあ、早く刃更君に続きをなさい……貴女は刃更君の迷惑になりたくないんでしょう？　だったら、きちんと彼の役に立てる事を証明しないとね」
「刃更様の……迷惑……？」
ゼストがとろんとした瞳で言うと、その喉元に薄っすらと首輪のような痣が浮かぶ。
「シェーラさん、何を……っ？」
ゼストに主従契約の呪いが発動しかけて慌てる刃更を、シェーラは手で制して、
「大丈夫よ……今のゼストちゃんは、強い絶頂の後でまだ意識がはっきりとしてないから、強い後ろめたさは感じないわ。それより、協力しなさい刃更君。主従契約の呪いは、主への忠誠を再確認するためのものでもあるから、たとえどれだけ意識がぼんやりしていても、呪いが出ている間の記憶は鮮明に残るわ。だから、彼女が冷静になってまた自分を責めだす前に、君の役に立てたと心の底から思えるような事をゼストちゃんにさせてあげなさい。彼女が、君の配下として傍にいても構わないと思える自信を付けるために」
何せ、

「今は軽い酩酊状態で本音や本心が出やすいから、それを実行させてあげられれば、たとえ彼女が正気を取り戻して冷静になっても、呪いが発動する事はなくなる筈よ」

それが、ゼストが刃更の配下として生きてゆくための、唯一の方法だ。すると、

「っ……――解りました」

やがて刃更は、意を決したように了承の頷きを返してくる。だから、

「さあ、ゼストちゃん……早くご奉仕して、刃更君の役に立たないと」

「……はい……」

「そのためには、貴女が彼の配下として胸を張れるような立派な事をしないとね……さあ、早くそれを刃更君にしてあげて。彼は貴女のご奉仕を待っているわ」

「……」

シェーラの言葉にゼストはコクンと頷くと、刃更の首の後ろに両手を回して、

「刃更様――……」

蠱惑的な笑みを浮かべると、彼女はそのまま刃更の唇へと己の唇を重ねた。

絶頂の残滓で思考を甘い熱に冒されながら、ゼストは刃更にキスした。

刃更の配下となる以上、可能な限り自分を捧げるのは当然の事だと思ったからだ。

「んっ……おい、ゼストっ……んぅ？」

慌てる刃更に、ゼストは夢中でキスを続けてゆく。すると、

「刃更君、ゼストちゃんの好きにさせてあげて……それと、彼女は君が悦んでくれると思って自分の初めてのキスを捧げているのよ。主として、きちんと応えてあげないと」

窘めるように、シェーラが何かを言っていた。すると、

「――――っ」

刃更は僅かに身を硬くした後、ゼストの事をぐっと強く抱き寄せてくれて。

そして――まるで恋人のように、主と配下になるための時間が始まった。

――だが、最初はゼストが一方的に刃更へ奉仕するだけだった。

こちらが液状のボディソープでヌルヌルにした乳房でいやらしく刃更の身体を洗っても、刃更は黙ってこちらのされるがままだった。それでも、不安になったゼストが、

「……刃更様がどうすれば満足されるのか、私の躰に教えて下さい」

と、懇願しながらキスをすると、こちらの想いが通じたのか、刃更の方から積極的にゼストの事を求めてきて――そこからゼストは、無数の絶頂を刻まれていった。

胸を揉まれながら耳を噛まれ、尻を鷲摑みにされながら耳を噛まれ、その度にゼストは自分でも驚くほど簡単に快感を極まらせ、己の絶頂する姿を刃更に晒していった。

それを嫌だと思う事はなかった。どれだけ恥ずかしくても、それ以上に快楽と幸せを感じてしまったからだ。そして、浴場の壁に埋め込まれた時計の針がゆっくりと一周した頃、

「は……んむ、ちゅ、んちゅっ、ちゅぷ……はぁっ、刃更様ぁ……んふっ……れちゅっ」

ゼストと刃更のキスは、もはや激しく舌を絡めて唾液を交換するのが普通になっていた。

背後から胸を滅茶苦茶に揉まれながら、腰を捻って肩越しにするキス――それは少しだけ苦しい体勢ながらも、それ以上の幸せと強烈な快感をもたらしてくれて。いよいよゼストは女としての本能を強め、本格的に乱れてゆく。すっかり官能に瞳を蕩けさせながら、

「刃更様、しゃぶって……ゼストの胸を、澪様よりいやらしく敏感にして下さい」

ゼストが甘えるように胸を揺らすと、刃更はすぐに応えてくれた。自身の膝の上で向かい合うようにゼストを乗せると、こちらの両尻を揉みながら硬くなった胸の先端を含み、音を立てて吸ってくれる。敏感な場所を、同時に強引に攻められ、

「やあっ、あぁん……ふぅっ、んぁあっ、……ん、んふぅっ……ふあぁあっ♥」

ゼストは刃更の膝の上で腰を揺らめかせ、夢中になって主の愛撫に甘く悶えた。下腹部の奥は少し前からずっと灼けそうな位に熱く蕩けきっていて、快楽にすっかりぐしょ濡れになったゼストの敏感な場所はいやらしい雫を溢れさせ、内股へと伝わせていた。

男の膝の上でいやらしく尻を振る――それは世界で最も淫乱な女のダンスだ。自分は、体どんな淫らな腰使いをしているのか。視線を落としたゼストは、そこでようやく気が付く――刃更もまた、男の反応をして自身を大きくしていた。

……刃更様が、私なんかでこんなに……。

自分などで、刃更がこんなにも興奮してくれていたなんて――その事実に、極限まで敏感になっていた筈のゼストの躰は、さらなる高ぶりを得た。すっかりいやらしい温度になった口の中に、とろりとした唾液が、気に溜まってゆく。

それをゼストはゴクリと喉を鳴らして飲み込むと、

「刃更様……あ」

そう言って、ゼストは刃更の膝の上からゆっくり下りると、彼の腰の前に跪いた。

自分だけが快楽に溺れ、主を満足させられない配下など何の意味もない。だから、ゆっくりと上目遣いに刃更を見上げ、ゼストは己の望みを潤んだ瞳だけで告げた。

刃更は何も言わなかった。ただ、

「――――」

やがてゼストの頭を、穏やかな表情でそっと優しく撫でてくれた。

それだけで充分だった。言葉はなくても、刃更は自分にさせてくれるのだと解って。

――だからゼストは、己の口で刃更のそこを奉仕させて貰った。

その先はただもう夢中で――ゼストは両眼を瞑ると、己の舌と口とで刃更に尽くす事に己の全神経を集中していった。そして、

「……――――え？」

気が付くとゼストは、刃更といやらしく脚を絡めながら浴場の床に横になっていた。互いに裸のままだった。刃更はこちらの乳房に顔を埋め、穏やかな寝息を立てている。

体何が――思わずゼストが呆然を得ていると、

「――気が付いた、ゼストちゃん？」

穏やかな声がこちらを呼んだ。見れば、浴槽の縁に腰掛けたシェーラがおり、

「シェーラ様、私は……」

「覚えている筈よ――たとえどれだけ快楽に酩酊していても、あの時の貴女は主従契約の呪いが発動していたのだから」

「……あ」

その言葉に、ゼストは先程までの己の記憶を鮮明に思い出す。噎せ返るような刃更の雄のフェロモンにくらくらしながら、それでも彼のをいやらしく咥えて、

『んぁ……ンむ、ちゅりゅ、れる、ちゅるっ……刃更様ぁ♥　はぷ……んぁむ、ぢゅる……ん……はぁふ、ちゅうる……ぴちゃ、……えるんっ……んは……あ、ぷちゅ……っ』

ゼストが舌で奉仕し、口に含んで美味しそうにしゃぶると、その度にこちらの口内で、硬く逞しい刃更のが気持ち良さそうに脈打って――そして、もっと刃更に悦んで欲しくて、陶酔を深めたゼストはどうすれば刃更が悦んでくれるか試行錯誤をして、

『んっ……あぁ……んぅ、刃更、様……はぁ、っ……あぁん……ふぁんっ♥』

そうだ――途中からは口だけでなく、ゼストは自分の大きな胸も使用した。隙間もない程に刃更のを胸の谷間で挟み、己の乳房でいやらしく刃更に奉仕したのだ。

乳房で挟んで擦る度に、口でする時とは異なる、くちゅくちゅという淫らな音が胸で生まれた。そして刃更に奉仕する悦びと、自分で胸を滅茶苦茶にしている背徳感にゼス

トは、より官能を高めてひたすら夢中になっていって――そして、
「私――……」
ゼストはいよいよ、先程自分が刃更と迎えた歓喜の瞬間を思い出す。こちらの胸で果てようとした刃更に対し、ゼストは強引に彼を浴場の床へ押し倒すと、その腰へ両手を回して密着し――再び刃更のを、己の口の中へと迎え入れたのだ。
――そしてゼストの脳裏に、その瞬間の事が鮮明に蘇った。
思い出す――刃更の熱い奔流がゼストの口いっぱいに広がった時の事を。そして、
（……刃更様、刃更様っ、刃更様あっ……♥）
その全てを、ゼストは心の中で何度も彼を呼びながら飲み干した。刃更を想って喉を鳴らす度に、どろどろの快楽の塊がゼストの体内へと流れてゆく――その感覚だけで絶頂を得て、幸せのあまり躰が震えたのだ。そして、その全てがゼストの喉を通り過ぎて、
「……あ……」
その先の事も思い出し、ゼストが快楽にも似た寒気を得てぶるりと躰を震わせた。
「――思い出した？」
シェーラが見透かしたように笑いながら言う。

「凄かったわよ、本気で乱れた貴女……初めてなのに、回じゃ満足せずに、刃更君からまるで離れようとしないで。そのまま口で二回に、合間に胸でも二回だなんて将来有望すぎるわ。刃更君も疲れていたでしょうに――逞しい貴女の主に感謝しなさい」

「……っ、……はい」

恥ずかしくて消え入りそうになりながらゼストは頷いた。幾ら快楽に溺れていたとはいえ、あそこまで我を忘れてむさぼるように求めてしまうとは。それでも、ゼストは覚えている。刃更がゼストの胸や口で果てる度に、こちらの名前を強く呼んでくれたのを。

確かに自分を求めてくれたのを。だから、

「……」

ゼストは、ふと己の喉元に触れてみた。そこにはもう、主従契約の呪いが発動した時に出る首輪のような痣はない。催淫による甘い疼きもだ。それは自分が、メイドとしてきちんと刃更に奉仕する事ができた何よりの証拠で――だからもう我慢できなかった。

意識を失う前、互いの脚をいやらしく絡ませ合いながら、最後に刃更がそっと自分の耳元に囁いてくれた言葉を口にする。愛おしむように、

「……私、なる事ができたのですね。刃更様の配下で――そして家族に」

穏やかな寝顔の刃更をギュッと掻き抱き、ゼストはそっと呟いた。すると、

「生まれ変われたみたいで何よりよ、ゼストちゃん……念のために聞くけれど」

とシェーラが言った。

「――まだ刃更君の配下として、彼の傍に居る事に不安はある？」

前の主からの問い掛けに、ゼストは「いいえ」と涙ぐみながら首を横に振った。

刃更の配下になれた事に、後ろめたさではなく――確かな幸せを感じながら。

第4章　吹き抜ける戦場の風の中を

1

静謐に満ちた場所があった。

ウィルダート城の背後にある丘の上――巨大な岩盤を掘削する事で造りだして構築されたこの広大な空間は、魔王ウィルベルトの霊廟だ。

――そして野中柚希は現在、偉大な魔王の魂が眠るこの場所を訪れていた。

無論、一人ではない――柚希がここに来たのは付き添いだ。

隣には、柚希と同じく付き添いとしてこの場所を訪れている胡桃がいる。

そして柚希の視線の先にはもう一人。ウィルベルトの巨大な墓碑のすぐ手前で、毅然とそれを見上げている少女がいた――澪である。

「――――」

ここへ来てから、もうかれこれ二十分。澪は無言のまま動かずにいる。しかし、

……満足できるまで居れば良い。

初めての、実の父親の墓参りなのだ。澪のこれまでの生い立ちや、現在置かれている状況をよく知る柚希は、澪の中に様々な想いや複雑な感情があるのを知っている。ならば――心の中で、たとえ一方通行だったとしても言いたい事はあるだろう。隣の胡桃も、その事を解っているから、文句一つ言わずに柚希と共に待っている。そして、

「……ありがと。もう良いわ」

澪はそう言うと、ウィルベルトの墓標に背を向けて柚希達の方へと戻ってきた。

「……少しは気が晴れた？」

柚希の言葉に、澪はふっと苦笑して、

「どうかな。ただでさえ会った事がない相手なのに、おまけにそのお墓だからね。これが貴女の父親のお墓ですって言われても、あんまりピンと来なくって。……薄情だね」

「別に、あたしはそれが普通だと思うけど？」

と頭の後ろで両手を組みながら胡桃。ウィルベルトの墓標を見上げながら、

「会った事ない父親の墓参りをして、ボロボロ泣いたりする方が不自然だし嘘臭いよ」

「……うん。そうだね」

ありがと――そう言った澪が、浮かべている苦笑を深いものにした。本人は普通に

振る舞っているつもりなのかもしれないが――それは酷く寂しげな表情だった。

「……」「？　何よ柚希？」

ジッと見詰めるこちらに、澪がキョトンと問い返してくる。その表情はもう、柚希や胡桃がよく知るいつもの澪だった。だから「別に」とだけ返した柚希は、

……たとえ強がりだったとしても、それでも。

澪のこういう所に関しては、素直に大したものだと思う。生まれた時から、自分が勇者の一族であり、その使命を当然のように教わってきた柚希達と、澪とでは根本的にスタート地点が異なっている。澪はこれまで、ずっと普通の少女として生きてきたのだ。

ある日、いきなり両親を殺されて――自分が人間ではなく魔王の娘だと知らされた。それでも成瀬澪という少女は、基本的に泣き言や不満を漏らさない。悩み、苦しみ、迷う事はあっても――それでも彼女は、ずっと前を向いてきた。それは今回、魔界に来て自分の生い立ちと改めて相対しても変わる事はなかった。

「それで……ここへ来た事で、どうするか少しは考えがまとまった？」

「……ううん。色々と考えてはいるんだけど、やっぱりまだ」

そう言って、澪は首を横に振った。

――澪が心を決めれば、否応なしに状況は動き出し、もう後戻りはできなくなる。

よって――魔界へ来た日から既に二日が経過したものの、未だに澪は決断できずにいた。事は澪だけでなく、彼女の傍にいる刃更や柚希達にも影響を及ぼし、魔界全体の行く末を左右する事にも繋がるものだ。だから、迷ってしまうのは仕方がない。それに、

……澪が迷っているのは、あの男のせい……。

野中柚希が脳裏に浮かべたのは、穏健派の現トップであるラムサスだ。彼の思惑が未だに判然としないのである。何せ毎日のように顔を出しては澪と話をしてゆくクラウスに対し、ラムサスはこの二日間、頑なに澪と顔を合わせる事を拒み続けていた。

一方だけとしか話せなければ、きちんとした判断を下す事など不可能だ。実際――澪は魔界に来る前から、新たな魔王になるつもりはないと柚希達には明言していた。よって現実的に、選択肢はラムサスの要望通りウィルベルトの力を穏健派に渡すか、それもせずに元の世界へ帰るかの二つだけ。そして、ラムサスがこちらとの対話を拒んでいる以上、もう答えは出ているようなものだった。

……だけど。

それでも澪が迷っているのは、穏健派の要望をどちらも拒んでしまえば、自分達が追い込まれてしまいかねないからだろう。これまで澪が現魔王派の手から逃れてこられた

のは、万理亜のお陰――ひいては穏健派のお陰だ。そしてゾルギアは辛うじて撃退できたものの、現魔王派は未だに健在であり、いつまた澪を狙ってきてもおかしくはない。

そんな状況にある中、穏健派から挙がっている要望をどちらも拒むような決断をすれば、自分達は一気に孤立する事になる。勇者の一族は澪を魔族とみなしており、現魔王派が彼女を狙ったところで、魔族同士の争いとして静観する立場を取っているからだ。

……それに。

穏健派との関係がこじれれば、万理亜が苦しい想いをする事になる。万理亜自身は、いざとなれば穏健派を離脱してでもこちらと行動を共にすると言っているが、シエーラが無事に生きていた事を知り、ゾルギアの脅迫から解放された時の万理亜を――彼女の涙を見ている澪としては、そんな事はさせたくないのだろう。家族との繋がりを手放させるような真似を、それを失い――刃更と出会うまで苦しみ続けた澪が、万理亜に自分と同じ想いをさせたい訳がない。そして、

……魔界へ来るまで、刃更はゼストの事も気にしていたけれど。

とはいえ、彼女の事はもうそこまで心配する必要はなくなった。何せゼストは、自分達が魔界へ来たあの日の晩に、シエーラの発案で刃更と主従契約を結んでいる。彼女はもう、柚希や澪と同じ立場にあるのだ。以前は敵だったゼストが刃更と主従契約を結ん

だ事について、柚希達に全く想うところがなかったと言えば嘘になるが、

……でも。

柚希達は魔界へ来る前段階で、もしもの場合はゼストを連れ戻すかもしれないという、刃更の考えを聞かされていた。よってゼストと主従契約を結んだと聞かされても、大きく心を乱される事はなかった――唯一、胡桃だけが不満そうにしていたのを除いて。

……だけど。

刃更は自分を騙していた澪を受け入れ、さらにはゾルギアに手を貸してしまっていた万理亜ですら許してきたのだ。そんな彼が、ゼストを受け入れる決断を下したとしても不思議はないし、似たような立場だった澪や万理亜が文句を言える筋合いはないだろう。

そして柚希もまた――自分が大切だと想い、守ると決めた相手にはどこまでも優しい刃更だからこそ、彼に惹かれたのだ。ゼストも今では心から刃更に心酔しているようだし、今後の事を考えれば、戦闘力の高いゼストが仲間になってくれるのは心強くもある。

何せ――後になって聞かされた事だが、刃更がゼストと主従契約を結ぶきっかけとなったのは、ラムサスと一触即発の状況になった事が原因なのだという。刃更がこの場にいないのもそのためだ。穏健派トップのラムサスと対立してしまった事で、刃更は

現在このウィルベルトの霊廟へ入る許可が出ないなど、部行動が制限されており、ゼストや万理亜と共にウィルダート城に残る羽目になっている。しかし、衝突があったとはいえ、元勇者の一族である刃更がこの霊廟を訪れる事ができないのに、現役の柚希や胡桃には許可が下りるという判断は理解できなかった。まあ――柚希達も完全に自由という訳ではなく、霊廟の外では見張り役として付いてきたルキアとクラウスの配下のメイドがそれぞれ一名ずつ待機しているが。だがそれでも、

「あのラムサスって男……一体何を考えてるんだろうね」

外へと続く仄暗い通路を戻りながら、柚希と澪の前を歩く胡桃が言った。

「あのクラウスって爺ちゃんが時間稼ぎをするなら、まだ解るんだけどさ……」

「……うん」「……」

胡桃の言葉に澪は頷き、柚希は同意の無言を放った。こちらを長く滞在させる事で、澪にウィルベルトやウィルダートの街や民など、穏健派への想いを強めさせて得をするのは、澪を新たな魔王としたいクラウスの方だ。反対に澪からウィルベルトの力を抽出しようとしているラムサスは、むしろ事を急いでくると思っていたのだが、

……あの男、一体何を……？

傍目には、ラムサスにとって都合の悪い状況を、彼自身が作り出しているようにしか

見えない。こちらが解っていないだけで、何らかの思惑や狙いがあるのだろうか。

「――――」

得体の知れない気持ち悪さを覚えながら、柚希達が無言で通路を戻っていた時だった。

大気を震わす低音と共に、霊廟の地面が縦に揺れたのは。

「――地震っ!?」

ギョッとなって周囲を見回した澪に対し、とっさの判断を行なった柚希は叫ぶ。

「走って――早く外へ！」

駆け出した柚希に続き、胡桃と澪も出口へと向かって走り出す。

――この霊廟は岩盤を削って作られた、洞窟のような空間にある。

そして、偉大な魔王の霊廟という事もあり、不埒な輩が破壊工作などおかしな真似ができないよう、内部にはあらゆる魔法を使用できなくする結界が張られていた。無論、墓標の周りには自然災害への対策が何かしら練られているだろうが、とはいえ通路までもが万全とは限らない。よって天井が崩落し、瓦礫で閉じ込められでもしたら自力での脱出は不可能になってしまう――だから、柚希達は霊廟の通路を、気に駆け抜けた。

幸い途中で揺れは収まったが、いつまた揺れ出すか、次はもっと激しい揺れが来るかも解らない。よって安全を確保するためにも、何が起こっているのか状況を知るため

にも、一刻も早く外に出る必要があった。そして、

「――見えた、出口だよっ！」

胡桃が叫ぶと、視界の先に外の光が見え――次の瞬間、柚希達は霊廟から外へと脱出した。そして、まず最初に行なったのは状況の確認だ。

「――ふたり共、大丈夫っ!?」

叫ぶような澪の問い掛けは、柚希と胡桃ではなく、付いてきたメイド達に向けてのものだ。外で柚希達が戻ってくるのを待っていた彼女らは、幸いにも無事だった。だが、

『……』

メイド達は、心配した澪の問い掛けに答えなかった。

棒立ちになって、丘の上からウィルダートの街の方を見ている。だから次の瞬間、メイドらの視線を追った柚希達もまた、同じ光景を目の当たりにした。

「あれは――……」

ウィルダートの街の外壁が破壊され、敵が市街地へと侵入していた。

だが――単に敵に侵入を許した程度なら、メイド達が立ち尽くす事はない。むしろ霊廟内にいる澪を避難させようと、中へ入ってきてこちらに危機を知らせただろう。

ならば――そうしなかったのは何故か？　その答えは、柚希達の視線の先にある異

常な光景にあった。この丘は、ウィルダート城を挟んで市街地とは反対側にある。だが、それだけの距離があるにも拘わらず、柚希達は肉眼で『敵』の侵入を確認できていた。

「……何なの、あれ――……」

隣の胡桃が呆然と呟いた。その視線の先には、俄には信じられない光景があった。

二十mをゆうに超えるような巨人が二体、ウィルダートの街へと侵入しているのだ。

2

ウィルダートの城下街が激しい混乱に陥った様を、冷静に見詰めている者が居た。

二体いる巨大な英霊――その内の一体の肩に立って、悲鳴を上げて逃げ惑う民衆達を見下ろしているのは、今回のウィルダート攻略を自ら進んで引き受けたガルドだ。

……大したものだな。

ガルドは心の中で、この短期間で本当に調整を終えたルカを賞賛した。あの幼い少年は、たったひとりで英霊の修復からガルドを新たな主としてインプリンティングするまでを完了させ、実戦に投入できるレベルに仕上げていた。他にもより強力な力を持った英霊が何体か発掘されていたが、力が大きければそれだけコントロールが難しく

なる事もあり、今回の作戦には再契約が間に合わなかった。しかし、恐らくこれで充分だろう。

「――クソっ、化け物めっ！」

民衆が避難する時間を稼ごうと、市街の警備兵と思しき一団がこちらに対して攻撃を仕掛けてくる。地上に沢山の魔法陣が展開し――無数の光の槍がガルドと英霊に向かって解き放たれた。しかし、

「……――叩き潰せ」【【【――――――】】】

ガルドが発した一言に、英霊達は即座に反応した。右のオーバーハンドブローを、地面の警備兵達に向かって振り下ろしたのだ。それは宙を飛んできていた光の槍を全て蹴散らし――次の瞬間、落雷にも似た轟音と共に衝撃が弾けた。まるで爆発したかのように地面が吹き飛び、一気に砂埃が舞い上がる。そして――英霊達が振り下ろした拳を上げ、砂煙が晴れた時、そこにあったのは衝撃でクレーターが穿たれた地面と、先程まで警備兵だった者達と思われる大量の血と肉片だ。その一部始終を見ていた民衆は、

『っっ――うあああああああああああああ!!』

それまで以上のパニックに陥りながら、一目散に逃げ始める。

その様子をガルドが無言で見詰めていると、
「いやいや……これは凄い」
ふと近くの建物の屋根の上から呑気な声が発せられた。ガルドが視線を向けると、そこにはひとりの若い高位魔族の姿がある。今回の英霊を使用したウィルダート侵攻作戦をレオハルトに命じた枢機院が、その成否を見極めるために派遣してきた見届け役だ。
「素晴らしい完成度ですねえ。この調子なら、私の出る幕はなさそうだ」
「当然だ……最初から貴様の力など当てにはしていない」
「これは失敬。しかしガルド殿――我々は先程ウィルダート城に対してウィルベルトの娘を差し出すよう通告しました。その情報はすぐに周辺勢力にも伝わり、我々の侵攻の大義名分を認める事でしょう――なのに、何故むざむざ民衆を見逃すような真似を？」
「……どういう意味だ、ネブラ？」
質問の真意を問うガルドに、名前を呼ばれた見届け役は薄く笑って、
「通告には拡声魔法を使用しました。彼女の存在は最早、この街の民衆達も知るところとなった。ただでさえ新たなトップのラムサスに不満を抱いている者が少なくなかったのに、偉大な先代魔王の娘が来ていたなんて大切な事を知らせてくれなかった――そ

してその娘のせいで、この街は襲撃されているんですよ。民衆の不満は、きっと怒りへと変わり始めている事でしょう」

だから、とネブラ。

「ここは駄目押しとして――民衆を虐殺すべきです。そうすれば、いよいよ穏健派は内部から崩壊してくれる。この好機を逃す手はないと思いますが？」

「……良いかネブラ」

「はい、何でしょうガルド殿？」

低い声で呼び掛けたこちらへ、笑顔を返してきたネブラに、

「枢機院がお前に命じたのは、英霊の戦いぶりを見届ける事だろう。いらん手出しや口出しは無用だ。もし余計な真似をしたら――貴様も肉塊に変わると思え」

「……解りました。ウイルベルトの次の魔王候補の中で、最右翼だった貴方を敵に回すほど私は愚かじゃありませんからね。余程の事があれば話は別ですが、基本的には見届け役として貴方の戦いぶりを見学させていただきますよ」

「……」

おどけるように肩を竦めたネブラに、ガルドは無言を返すと、

「敵がウィルベルトの娘を差し出してくるまで、二手に分かれて侵攻する。民衆には構

うな。無益な殺生をレオハルトは好まない。ただし――立ちはだかる者は全て薙ぎ払え」

【【【――――――】】】

こちらが発した命令に、それを受理した英霊達の瞳が暗く光る。

そして英霊の肩に立つガルドは、前を見据えながら言った。

「破壊目標、ウィルダート城――進撃せよ」

3

丘の上にいる成瀬澪の視線の先で、巨人達が一斉に動き出した。

「いけない――このままじゃ！」

敵の狙いを察した澪達が、慌ててウィルダート城へ戻ろうとすると、

「――澪様っ、ご無事ですか!?」

息を切らしながら丘を駆け上がってくる者がいた――メイドのノエルだ。

眼の前にやって来た彼女は、安堵したように大きく息を吐き、

「……良かったです。皆さん、お怪我はありませんね？」
「あたし達は平気。それよりノエル、一体何が起きてるのっ!?」
見えぬ状況を尋ねた澪に、厳しい表情でノエルが言う。
「現魔王派による侵攻です。澪様が我々の下へ来ている情報をどこからか入手したらしく……ウィルベルト陛下の力を受け継いだ澪様は、新たな争いを生む危険因子であり、この侵攻は未来の禍根を断つためのものだと」
そして、
「もし侵攻を止めて退いて欲しければ――澪様を差し出せ、と」
「何なの、その無茶苦茶な理屈……穏健派が力を持っていたら脅威だけど、自分達が持つ分には危険はないとでも言うつもりな訳？」
胡桃が苛立たしげに言うと、
「以前から、陛下の力を手に入れようと澪様を狙っていた位です。魔界における支配力を増大させるために、形振り構わぬ行動に出た可能性が高い――そうルキア様が」
そんなノエルの説明に、
「――事情は理解した。それより、あの巨人は一体何？」
柚希が険しい顔で尋ねた。敵の思惑を推測する事はできるが、どれだけ考えたところ

で真実は解らない。そんな事よりも、優先すべきは眼の前にある明確な危機への対処だ。
「確証はないのですが――クラウス様の見立てでは旧時代の英霊ではないか、と」
「要は敵って事でしょ……良いわ、百回殺して後悔させてやるわよ」
ノエルの言葉に、フンと澪は言い放ち、
「刃更達は？　城に居た筈よね」
「緊急事態という事で、お力をお貸し下さると市街地へ――刃更殿はゼストと共に、マリアはルキア様と共にそれぞれ迎撃に向かっています」
穏健派と現魔王派が戦争状態にある以上、襲撃を受ける可能性は考えられた事だ。そのため、いざという時にどう動くかについて、澪達は予め決めていたのである――もしも民衆が戦闘に巻き込まれるような事があれば、自分達も戦いに出ると。よって、
「刃更殿から伝言です。柚希殿と胡桃殿のお二人は、西側を来る。一体を頼むと」
「了解した――胡桃」
「――任せて」
ノエルの言葉に、二人は一瞬も迷う事なく動いた。柚希が呼び掛けた時には、胡桃はもう飛行魔法の詠唱を終えていて――次の瞬間にはもう、二人は空へと飛び立っていた。

「ま、待って――行くならあたしも一緒に！」

人の背に澪が叫ぶと、ノエルが押し止めるようにこちらの腕を摑んで、

「いけませんっ。澪様は戦いが終わるまで、ここで身を潜めていていただきます！」

「離して……っ、何でよ、クラウスさんの指示なのっ!?」

キッと睨んだ澪に、ノエルは真っ向からこちらを見据えて、

「そうです――ですが、ルキア様や刃更殿もクラウス様の意見に賛成されています」

「嘘……どうして？」

澪が呆然と問うと、

「ここで澪様が出れば、敵の襲撃の大義名分を通させる事になります。私達が現魔王派の暴挙を追及するには、襲撃の理由自体が過ちだった事にするのが一番なんです」

「だからって……そんな嘘を吐いたら、穏健派の正義はどうなるのよ？」

「仰りたい事は解ります。でも感情の問題ではありません――これは政治なんです澪様。相手のカードを無効化し、それを逆手に取るための方便は、政治における定石です」

「でも……あたしだけ隠れて見てるなんて、そんな――」

「お気持ちは充分に解りますっ！　ですが、澪様はウィルベルト陛下の霊廟に入られていたため御存じないでしょうが、敵は侵攻の理由と澪様の身柄の要求を、拡声魔法で街の者達にも聞こえるように行ないました。現在、一部の兵士達が街から逃げてくる者達の避難を手伝っているのですが、民衆の間には動揺が広がっており、どういう事かと兵士に詰め寄る者も出ているそうです」

よって、

「この状況で澪様が出れば、民衆の感情の矛先が澪様へと向いてしまいかねません。そして、たとえこの襲撃を乗りきったとしてもラムサス様やクラウス様に対する民衆の信頼は失われ、深刻な政治不信から暴動へと発展する可能性さえ出てきてしまいます。ここは澪様に自重していただかないと、全て敵の思う壺なんですっ！」

「そんな――」

悲痛なノエルの叫びに、澪は思わず立ち尽くした――その瞬間、再び大地を揺らす程の轟音と衝撃が生まれた。

「っ――!?」

背後で起きた衝撃に、ノエルが思わず身を縮める。そして、

「何て事……」

その瞬間を見ていた成瀬澪は、呻くように呟いた。中央の通りを行く英霊が放った地面を抉るような蹴撃が、行く手を阻んでいた無数の兵士達を空へと吹き飛ばしたのだ。

宙を舞った時にはもう、兵士達は原形を留めていなかった。まるで赤い花火のように、肉体を弾けさせた兵士達の残骸が、ウィルダートの街の上に広がって――直後、蹴撃によって生じた衝撃波が、英霊が足を振り抜いた先にあった建物を一気に薙ぎ払った。

4

英霊が放った蹴りで生じた衝撃に巻き込まれた者達がいた。

市街地警備担当の兵士達だ。英霊を側面から攻撃しようと、進行ルートの一本隣にある通りから接近を試みていた彼らは、既に交戦していた隊の巻き添えを食った形で壊滅していた。そして、

「……ぐ、……は、う……く、そ――……っ」

家屋と共に吹き飛ばされた兵士達の中に、どうにか息のある者がいた。カフェ裏の路地でゼストに手を出そうとしたところを刃更によって叩きのめされた、あのグレンだ。

頭や肩などから血を流しながら、それでもグレンは立ち上がり周囲の惨状を見た。

辺りの街並みが、見るも無惨な姿へと破壊されてしまっている。

そして――同じ隊の兵士の中に、グレン以外に息をしている者はいなかった。

「……何なんだよ、これは……」

グレンがこのウィルダートへ来たのは、ウィルベルトが死んだ後――穏健派が大規模な兵士募集を行なった時だった。本当なら勢力を伸ばし始めた現魔王派へ行きたかったが、ウィルベルトを失った穏健派が深刻な兵士不足に陥ったこのタイミングならば、大戦で目立った戦功を挙げられなかった自分でも職にあり付けるに違いないと思ったのだ。

その目論み通り、グレンは市街地警備の兵士として採用された。とはいえ、仕方なく所属を選んだ勢力だ。グレンにとって、この街や己の仕事に対する強い思い入れや帰属意識のようなものはない――少なくともそう思っていた。だが、この街での生活が、たとえどれだけつまらないものだったとしても、それでも日々を積み重ねてゆけば、行きつけの店ができ、仲間との付き合いも深くなる。それは仕方なく穏健派の兵士となる事を選択したグレンが、それでもこの街で得る事ができたものだ。

それらの悉くが――今、グレンの眼前で失われていた。現魔王派の巨大英霊に

よって。

「っ――――」

ギリっと奥歯を噛み締めたグレンは、支給された軽装鎧の背面に仕込まれている飛行魔法を起動。そのまま空へと上昇すると、隣の通りをウィルダート城へ向かって歩く英霊の姿を確認した。その肩には、英霊を操っていると思しき高位魔族の姿もある。これだけ街を破壊し、兵士を殺しておきながら、彼らはまるで何事もなかったかのように前進を続けていた。だから、

「っ……、体何なんだよ、テメエらあああああっ！」

グレンは己の激情を叫びへと変えると、そのまま英霊へと攻撃魔法を放った。グレンの右手から解き放たれた雷球が、周囲の大気に放電を行ないながら宙を、直線に走り、激しいスパーク音と共に英霊の側頭部に命中した。

「はぁ……はぁ……っ、ざまあみやがれ……――っ？」

渾身の一撃だった。矢報いる位はできたと思っていた。だが、そんなグレンの想いを嘲笑うかのように、英霊の進行速度は変わらなかった。足止めにもならない――その事実に愕然となったグレンに対し、英霊はこちらを見ないまま右の裏拳を一閃した。それは近くにあった建物の巨大な煙突部分を根元から吹き飛ばし、

「――――あ」

轟音が響いた時にはもう、巨大な煙突の塊がグレンの眼前に迫っていた。

眼を閉じる暇さえなかった。死を覚悟したグレンに煙突が激突する――だがその直前、グレンを庇うように魔法陣が前面に展開した。その魔法陣に激突すると、煙突は一瞬で石の塊から砂へと分解され粉々になる。俄に何が起きたか理解できずにいたグレンに、

「貴方の歯が立つ相手ではありません――ここは我々に任せて退避を」

上から静かな声が投げ掛けられた。とっさにグレンがそちらを見上げると、

「……っ、お前……？」

見た事のある女がいた。間違いない。街で会った時のメイド服こそ着ていないものの、その女はグレンが乱暴を働こうとした相手――ゼストだ。しかし、ゼストはこちらを見なかった。彼女の視線はグレンではなく、他のものに定められていた。それは、英霊のいる通りの建物の上を巨大な魔剣を片手に凄まじい速度で駆ける青年で、

「アイツは――」

その青年をグレンは知っていた。自分をこっぴどく痛めつけた相手を忘れる筈がない。

しかし――忌々しさより先に、グレンが覚えた感情は驚きだった。

迎撃のために振り下ろされた英霊の拳を、青年は、瞬早い跳躍で回避。轟音と共に建物が破壊され、屋根の瓦が宙へと撒き散らされる中――英霊の腕に着地した青年は、気に肩へと駆け上り、高位魔族へと斬り掛かった。放ったのは縦への振り下ろしだ。

「……」

対する高位魔族は、右手を一閃して障壁を展開して青年の斬撃を防ぐ。しかし、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

気合いの篭もった叫び声と共に、青年は前進の勢いそのままに魔剣を強引に振りきった。障壁が断ち斬られ、そのまま青年の魔剣の刃が高位魔族へと迫り、

「――――」

防御に失敗した高位魔族は、止むなく回避を強いられた。英霊の肩から後方へと飛び、そのまま宙に退避する。その後を追い、英霊の肩を蹴って跳躍した青年は宙を駆けた。

「あれは……」

飛行魔法ではない。英霊に破壊された建物が形状を変え、宙を昇る足場となっていた。それは、グレンの真上にいるゼストの魔法によるもので、

「もう一度言います――退避を」

最後までこちらを見ないままそれだけを言うと、ゼストは翼を大きくはためかせて

英霊に向かって飛んでゆき――そして青年と高位魔族、ゼストと英霊の戦闘が始まった。

グレンには決して手の届かない場所で。

ガルドは、人間の少年が上の魔法で作られた足場を蹴ってこちらへ迫るのを見た。

……ゼストの仕業か。

眼下では、ガルドが乗っていた英霊と有翼の女魔族が交戦を開始していた。

――枢機院の一員だったゾルギア。その側近だったゼストの事はガルドも知っている。

戦闘しているところを実際に見た事はなかったが、確か上系統の魔法を得意としていた筈だ。英霊と戦いながら、同時に仲間のサポートまでこなすとは。ゾルギアが死んだ後、穏健派に身を寄せたと聞いてはいたが――この戦いぶりを見るに、どうやら主を失った影響は全くないらしい。ガルドが英霊にゼストの排除を命じると、

【――――】

英霊は明確にゼストを敵と認識し、あちらは本格的な交戦が始まった。

……後は。

ガルドは、こちらへ駆ける人間の少年へと意識を戻した。向こうが距離を詰めるより先に、ガルドは自身の周囲にずらりと魔法陣を展開――そして次の瞬間、無数の火炎球を生み出し一斉に少年へと解き放った。すると、

「っ――――」

迫る火炎球の大群を前に、少年は即座の対応を見せた。ゼストが作った足場に対して、右手の魔剣の峰打ちを連続で放ったのだ。巨大な剣身の魔剣の峰打ちは、斬撃ではなく打撃となって岩の足場を破壊。細かく散らばった破片がチャフとなり、

ズドドド

甲高い激突音をウィルダートの空に響かせた。少年と宙で対峙したガルドは、
「……東城刃更だな」
こちらの言葉に、少年は僅かに表情を硬くした。
「報告は受けている。ウィルベルトの娘には、ジン・トージョーの息子が付いていると」
「……」
少年は無言を返してくる。だが、それが肯定の沈黙なのは明らかだ。
スピードタイプとは聞いていたが、高速に身を置きながら、瞬で的確な状況判断を行ない、最少の手数で回避と防御を実行。前進を止める事なく攻撃へと繋げるとは、
……成る程、悪くない使い手だ。
ラースの報告では、ゾルギアと辛うじて渡り合えていたという話だったが――この反応速度ならば互角とまでは行かなくとも善戦はできるレベルだ。ゾルギアとの戦いからまだそれほど日は経っていないが、この短期間でも成長していたという事だろう。だが、
「……――迂闊だな」

ガルドは眼前の刃更に言った。
「たとえウィルベルトの娘が姿を見せなくとも、お前がのこのこ出てきてしまっては、彼女もこのウィルダートに居ると言っているようなものだろう」
「そうかな？　俺がいたからと言って、必ずしも澪までいる事にはならないだろ。何せアンタが言っているのは証拠のないただの推測だ。アンタ達がこの街に攻めてきたのは、澪を隠しているからって理由らしいが――」
眼の前の少年はようやく口を開くと、僅かに笑みを浮かべながら、
「――まさか、ジン・トージョーの息子がいたから、ウィルベルトの娘もいる筈だと判断してこの街を襲ったなんて言うつもりはないよな？　そんなおかしな理屈を公表したりしたら、他の勢力から笑いものにされるぞ」
刃更の言葉に、ガルドは淡々と、
「お前や他の仲間を排除して、その後で見つければ侵攻の正当性は幾らでも証明できる」
「だったら――逆にここでアンタとあの英霊達を倒せば、澪はおろか俺がここに居た事さえ証明できなくなり、アンタ達の侵攻の正当性は失われるって訳だ」
「――できると思うのか？」
「どうだろうな……」

そう言った刃更は、ふと表情を真剣なものにして、
「でもやるしかないなら、やってやるさ――俺はそのためにここに居るんだ」
力強い眼差しで、こちらを見据えて言ってくる。刃更の眼には、ガルドに勝てるという自惚れはなかった。ただ、何としても勝つという意志が込められていた。だから、
「……良いだろう、相手をしてやる東城刃更」
とガルド。
「だが――本当にこちらを倒すつもりなら、他の仲間も戦闘に参加させるべきではないのか？　下はゼストが足止めしているようだが、英霊は他にも二体いる。ぐずぐずしていると先にウィルダート城がなくなるぞ」
こちらの忠告に対し、刃更はハハッと笑って、
「ご忠告どうも――言われるまでもねえよ」
そう言うと同時、ガルドは遠くで轟音が生じたのを聞いた。
見れば、東ルートを進んでいた英霊が側頭部を横殴りにされ、たたらを踏んでいる。
刃更とゼスト以外にも、既に英霊と交戦している者達がいるのだ。
英霊の周りを動く二つの影――その姿を捉えたガルドは、スッと眼を細めて言った。
「あれは――サキュバスの姉妹か」

東ルートを進んでいた英霊の足を止めたのは、ルキアとマリアのコンビだった。

「女は大きい男は好きですけど、大きすぎるのは嫌いなんですよ――木偶の坊さん♪」

英霊の頬に、その巨体を揺らす程の強力な拳の一撃を叩き込んで笑った妹に対し、

「戦闘中に余計な無駄口を叩くのは止めなさい、マリア――」

自らも戦闘用の服を身に纏ったルキアが冷静に言った。街灯の上に立ち、圧倒的な巨大さを誇る英霊を前にしながら、

「――大体、狙うなら頬ではなくここです」

そう言ってルキアが振るったのは、右手に持った鞭だ。その瞬間、パァン！　という大きな炸裂音と共に、斜め下方向からの衝撃が英霊の顎を撃ち抜く。マリアが拳を放ったのとは逆側からのその一撃は、倒れ掛けていた英霊の巨体を垂直へと戻した。

「こうした方がより相手の脳を揺らせます。肉弾格闘士の貴女がこんな初歩的な事を理解していないとは……」

嘆くようにに言ったルキアは、

「しかも、これは防衛戦です。敵を倒す事も重要ですが、可能なら周囲への被害をなるべく抑える事も考慮して動きなさい。他の方達はまだ仕方ないにしても、せめて私達はなるべく自分の故郷の街を壊さぬよう配慮しなくてどうするのです」

通りの建物が壊れるのを防いだルキアに、

「ああっ、すみませんルキア姉さま――でしたら」

焦るように言ったマリアが、近くの建物の壁面を蹴って英霊へと向かった。だが、

【……】

その狙いを読んだ英霊が、マリアを払い落とすかのように左手を振るった。

ヴウウン！　と大気を震わせながら、巨大な手の一閃が接近するマリアを迎撃する。

……いけない！

反射的にルキアは、マリアを助けるために己の鞭を振るおうとした。宙にいるマリアに足場はない――そしてルキアの知る妹の実力では、あの攻撃を避ける事は不可能だと思ったからだ。ところが、

「――おっと」

一方のマリアは焦る事なく宙で身体を横方向へと回転。その動作によって振られたマリアの尻尾が迫る英霊の手を打ち――その接触点を支えに、マリアは振り払われた英

霊の手を下へとかいくぐった。風圧でマリアの長い髪が激しくなびくが、ダメージはない。

「――――」

マリアの反応の速さにルキアが驚きを得る中、下への回避を強いられ、直接顎を狙えなったマリアは、それでも己の狙いを諦めなかった。英霊の左の鎖骨に片手を掛けると、腕の力だけで強引にぐるんと縦へと回転――そこから上へと飛んだのだ。そして、

「やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

気合いの声を発しながら、英霊の顎を真下から思い切り蹴り上げた。ズドン！　という重い衝撃音と共に、顎をかち上げられた英霊の巨体が仰け反るように後ろへ倒れてゆく。

「こんな感じでどうですか姉さまっ、こんな感じでっ！」

こちらを振り返るマリアの顔は、ルキアのよく知る表情だった。それでも、少し離れていた間に生じた確かな妹の成長に、

……随分と、強くなりましたね。

きっと刃更や澪らと共に激闘を潜り抜けてきたのだろう。報告でその事実を知っては

いたが、実際にマリアの成長を目の当たりにしたルキアは、誇らしさと――そして僅かな寂しさを得た。自分が妹を守ってあげる必要はもうないのかもしれないと。しかし、

「それでは倒れる方向が変わっただけで、街が壊れてしまうのは変わらないでしょう」

こちらの顔色を窺ってくるマリアに、「馬鹿ですね」と嘆息したルキアは、次の瞬間にはもう街灯を蹴って傍の建物の屋根の上へと着地。そして英霊の真横へ回り込むと、再び鞭を一閃した。炸裂音と共に、今度は後頭部に鞭の打撃を与えて英霊の巨体を前へと戻らせたルキアは、

「良いですかマリア――こういう巨大な敵は、なるべく倒さずに倒すのです」

「えっと、それって殴らずに倒せって事ですか姉さま……そんな事が？」

「いいえ。以前、研究のために読んだ人間達の書物の中に、こういう敵を相手にした際に役立つとても良い手段が記述されていました」

確か、

「右の頬を殴ったら、左の頬も殴っておけというニュアンスだったと記憶しています。つまり――一回ずつ攻撃すれば何の問題もありません。右から攻撃したら左からも。上から攻撃したら下からも。そうやって、後ろから前からやってしまえば良いのです」

「な、成る程。あの本、絶対そんな意味で書かれてませんが。でも、あの一節からそん

な戦い方を見出すなんて……さすが姉さま冴えてますね」

「当然です。私も最初に読んだ時は、確実に止めを刺せという意味かと思いましたが。まさか人間の書物に巨大な敵との有効な戦闘方法を教わるとは思いませんでした」

と、感心しながらルキア。屋根の上にいるこちらを振り向いた英霊を見据えて、

「別々にやっても構いませんが、折角ふたりなのです――合わせなさいマリア」

「――はいっ！」

頷きを返してきたマリアと共に、ルキアは本格的に英霊への攻撃を開始した。

鞭を使ったルキアの打撃と、肉体を駆使したマリアの打撃。

全てを対にしたサキュバスの姉妹の攻撃が、衝撃の嵐となって英霊の巨体を襲う。

まるで大小のドラムを打ち鳴らすかのように、重い殴打音と甲高い炸裂音が交互に繰り返され――そして、そのテンポが上がり出す。呼吸の合った姉と妹による英霊への攻撃は、即興のセッションとなり、二種の攻撃音がビートを刻むような旋律へと変わってゆく。

【――――】

ルキア達の連撃は、英霊に回避や反撃はおろか防御さえも許さなかった。

ところが、興が乗り過ぎたのか、英霊の肩を蹴って跳躍したマリアが、

「あははは――そーれっ！」

英霊の右頬に胴回し回転蹴りを叩き込んだ。生じたのは、際大きな重低音。

すると凄まじい威力の蹴撃を喰らった英霊の巨体が、ルキアの鞭による通常攻撃では相殺しきれない程の勢いで、左へ転倒するように傾いた。だから、

「む……いけません」

こちらを無視した妹のアドリブに、ルキアは即座に対応した。鞭を振るう対象を英霊からマリアへと変更。しかし、それは攻撃のためではない。ルキアは鞭の先の方を、胴回し回転蹴りを放ったマリアの右足――その足首に一瞬で巻き付かせる。そして、

「え……ひいいいやぁあぁあぁ――っ!?」

次の瞬間、マリアが悲鳴を上げた。ルキアが足首に鞭を巻き付かせたマリアごと、強引に右手を振るったのだ。モーニングスターよろしくマリアを振り回したルキアは、調子に乗っていた妹に鉄球の代役を求め、その身体を英霊の左頬へとぶち込んだ。

びたーん、と形容するには大きすぎる衝撃音と共に、倒れかけていた英霊の巨体が水平へと戻ってゆく。その左頬には、大の字状態のマリアの身体の跡が綺麗に浮かんでおり、

「ううっ……ルキア姉さま、いくら何でもあんまりですよぅ……」
「貴女が私を無視したアドリブをするから、こちらもアドリブで返したまでです」
涙目で文句を言ってくるマリアに、ルキアが冷たく返した時だった。
市街地の反対側で、新たな動きが生じた。
『――――』
ウィルダート城を目指して西側ルートを進んでいた英霊が、真上からの攻撃を受けて地面に両膝をついたのだ。
そして――そんな英霊を目掛けて、上空から急降下してくる影があった。
「……彼女達も間に合いましたか」
眼の前の英霊に対して鞭を振るう攻撃の手を休める事なく、ルキアは言った。
間違いない――あれは、この戦場を駆けるもう一組の姉妹。
野中柚希と野中胡桃の勇者姉妹だ。

6

野中柚希が『咲耶』から解き放った衝撃波は、巨大な英霊の足を止める事に成功し

た。

だがそれだけだ。英霊はすぐに立ち上がり、空のこちらを見上げてくる。その事実に、……やっぱり富士からの加護が届いてない。

柚希は表情を苦いものにした。霊刀『咲耶』は、富士の霊峰の力が凝縮された神木の中から生まれたものだ。よって人間界でも、富士に近付く程に本来の力を発揮できるのだが――柚希が今放った衝撃波の威力は、それには遠く及ばぬレベルだった。

やはり、魔界という人間界とは次元が異なる場所の影響は大きい。特殊な空間を構築し、結界も張られていたゾルギアの館でも同様の傾向は見られたが――それでもこの魔界と比べれば、まだあちらの方がきちんと戦う事ができた。

……でも。

泣き言を言っても始まらないし、端からそのつもりもない。普段の人間界に居る時は、魔族である万理亜や、ウイルベルトの血を引く澪が同様のハンデを負っているのだ。

――そして、これまで彼女達は立派に戦っていた。ならば、今度は自分の番だ。

最終的に魔界へ付いてくる事にしたのは、他ならぬ柚希自身なのだから。刃更のためにも、澪のためにも――そして自分のためにも、足を引っ張る訳にはいかない。よって、

「胡桃――当初の作戦通りに行く」
「でも、お姉……やっぱり今の『咲耶』じゃ」
こちらを抱えて飛行魔法を発動している胡桃が心配そうな声を上げたが、柚希は小さく首を横に振って、
「心配いらない。私は私の仕事をする――だから胡桃も自分の仕事をして」
「……っ」
「――胡桃」
窘める口調で柚希が言うと、胡桃は一つの動きを見せた――魔法陣を展開したのだ。
「行くよお姉……」「ん――お願い」
柚希が頷くと、胡桃はとある魔法を使用した。それは空気の塊を撃ち出す疾風魔法。それを柚希の周囲の空気を使って発動させたのだ。そして次の瞬間、
「――――」
野中柚希は、風の塊と共に超高速で下へと向かって射出された。文字通り風になった柚希は『咲耶』を一閃――すると英霊の巨体ギリギリのところを通過しながら、斬撃が頭から下までを一気に駆け抜ける。すると力強い手応えがあった。だからこそ、
「――――っ」

柚希は、気に表情を険しくした。『咲耶』の柄を通して伝わってきた手応えが強すぎる。この手応えは、刃が通らず弾かれた反動によるものだ。胡桃の魔法の力を借りて、高速によるパワーを乗せて斬撃を繰り出した――それでも英霊の身体に刃が通らない。

だから柚希は、地面に着地するなり即座に横へと跳躍した。直後、柚希が着地した場所の地面が暗くなり――ズウウウン！　と衝撃と共に割れ爆ぜた。英霊の左足が、地面を踏み抜いたのだ。辛うじて回避だけは間に合った柚希だったが、

「くっ……！」

宙で俄に体勢を崩してしまう。英霊の巨大な足が、勢いよく地面を踏み抜いた拍子に生じた空気の奔流――それが宙にいた柚希の身体を浮かせたのだ。そして、

【――――】

振り下ろされた英霊の左足は、攻撃だけでなく次の動作に繋がっていた。踏み込んだ左足を軸足にして、繰り出されたのは右の蹴撃。巨大な英霊の足の甲が想像以上のスピードで迫り、宙の柚希を襲う。回避は間に合わない。

とっさに柚希は『咲耶』で五芒星を描くように剣閃を走らせた。そして激突寸前のタイミングで完成した防護障壁が、辛うじて柚希を英霊の蹴りの直撃から守る――だが、

「っっあああぁあああ――――っ!?」

柚希は弾丸のような速度で宙を飛ばされ、悲鳴を迸らせた。英霊が放った蹴撃が、展開した障壁もろとも柚希を吹き飛ばしたのだ。

……っ、いけない。この勢いだと……っ！

まるで乱気流に巻き込まれたかのような状態で、野中柚希は刹那に思考を焦らせた。英霊の蹴りの直撃で潰される事だけは避けられたが、この速度で石造りの壁に激突したら結果は同じだ。とてもじゃないが柚希の肉体は原形を留めていられない――即死だ。

……間に合って！

柚希は必死に力を振り絞り、『咲耶』を振るって己の背面に障壁を展開しようとする。不完全でも構わない。骨折や内臓損傷で済んでくれればそれで充分だ。しかし、

「っ――――？」

想像より早く背中に衝撃が来た。反射的に死を覚悟しかけた柚希だったが、しかしすぐにその認識を改めた。柚希の背中が受けたのは、建造物の壁面への激突ではなく、

『……水？』

水中にも拘わらず、柚希の呟きは確かな声となった。呼吸可能な酸素を内包した水

の塊がクッションとなり、宙を飛ばされていた柚希を受け止めたのだ。
魔法によるフォロー。こんな事ができるのは、
『胡桃――……』
離れた建物の屋上に胡桃の姿があった。心配そうにこちらを見ている妹に、
『――ごめん、足を引っ張った』
柚希は唇を噛みながら謝った。予定では、『咲耶』の力を使えない柚希が囮となり、その隙にルキアから魔界の精霊をコントロールできる闇のエレメントを貰った胡桃が、強力な魔法で英霊を仕留める――そういう作戦だったのに。
しかも柚希が発案し、胡桃に了承して貰った作戦だったのに。ロクに囮をこなせないばかりか、こちらを助けるために、胡桃に攻撃魔法の詠唱を中断させてしまうとは。
胡桃は澪のような、己の魔力を使用するタイプの魔法使いではない。精霊の力を借りて魔法を発動させる精霊魔術師なのだ。これで胡桃は、ただでさえ魔界の精霊に慣れていないというのに、再び・から精霊に力を貸すように頼まなくてはならなくなった。
「……っ」
情けない。柚希は己の不甲斐なさに怒りにも似た感情を覚えながら、胡桃が張ってくれた水のクッションから出た。前髪から水の雫を滴らせながら、それでも再び遠くの

英霊を見上げると、『咲耶』を握る右手にギュッと力を込めて――そして次の瞬間、野中柚希は、気に駆け出す。

「――お姉っ！」

悲鳴のような声を上げた胡桃に、柚希は一瞬だけ視線を送った。

任せて――無言の瞳でそう告げる。今度こそ自分は、しっかりと囮の役目を果たしてみせると。それは何も根拠のない強がりではない。自分ならばやれる筈なのだ。

――確かに、魔界で富士の加護を得られず『咲耶』の力は弱まってしまっている。

だが――だからといって、柚希自身の力までもが弱まった訳ではない。

刃更と離れていた五年の間、厳しい修行に耐えて身に付けた力。

刃更と再会を果たし、主従契約を結んだ事で手に入れられた力。

そうして、これまでに得る事ができた力は――決して柚希を裏切らない。

労せず、容易く手に入れたものなど何一つありはしない。

だから己と、己の力を信じて柚希は行った。そんなこちらに対し、

【――――】

英霊は力任せに、右の拳の裏拳を振り抜いた。柚希との間にはまだかなりの距離がある。いかに英霊が巨大とはいえ、まだ完全にリーチの外だ。それでも英霊の放った一

撃は、柚希に対する攻撃となった。英霊の裏拳は、その軌道上にあった建造物を全て薙ぎ払い――その結果として生じたのは、大量の土砂と衝撃が合わさった津波だ。しかし、

「――――」

こちらを飲み込もうとする土石流にも似た奔流に対し、柚希が見せたのは非常にシンプルな動作だった。それは、野中柚希がこれまで幾万と繰り返してきたもの。

真っ直ぐに振り上げた『咲耶』を、同じように真っ直ぐに振り下ろす――それだけだ。

綺麗な剣筋。その結果生じた鎌鼬現象を伴う剣閃が、前方へと放たれた。

その剣閃は、最早柚希の眼前にまで迫っていた土砂の津波とぶつかり――斬ッという鋭い切断音を発した。するとザッと土砂の波が割れ、柚希の左右へと流れてゆく。

――それは霊刀『咲耶』の力に頼る事なく、野中柚希が繰り出した純粋な剣技。

全応型剣士という技タイプの戦闘スタイルである柚希が、己の基本に立ち返って放った珠玉の斬撃だ。そして今――野中柚希の前には、確かに道が拓けていた。

だから行った。身を低くして地面を蹴ると、その動作が瞬発を生み、あっという間に柚希をトップスピードへと至らせる。そうして、気に英霊との距離を詰めた柚希に、

【……】

英霊は裏拳で振り抜いた右の拳を、肩を回すようにオーバーモーションで振り下ろしてきた。対する柚希は左へのサイドステップを行ない、さらに英霊の拳が地面と激突する直前に跳躍。宙で身を捻りながら、英霊の右の拳とすれ違いざまに『咲耶』を一閃した。その剣撃は英霊の手首の腱を切断。握る力を失った英霊の拳が地面に激突して上砂を巻き上げたが、破壊の衝撃は抑えられ――さらに巻き上げられた上砂に乗る形で柚希は上昇。とっさに峰打ちの横薙ぎを繰り出し、英霊の右肘を破壊した。

【――――】

たまらず英霊が苦悶の叫び声を上げた。しかし、柚希はそれを無視し、

「――まだ終わりじゃない」

呟きを虚空に捨て、英霊の脇を潜り抜けて背後へと回ると――横に駆け抜けながら×字に交差する剣閃を一連で放った。それは英霊の両脚のアキレス腱をそれぞれ切断し、支えを失った巨体が後ろへ倒れ、轟音と共に英霊が地面に尻餅をつく。

右手を破壊され、両脚のアキレス腱をも切断された。そうなれば、反射的に唯一無事に残った左手を支えに立ち上がろうとするのは本能だ。野中柚希はその動きを先読みした。英霊の左腕――その手首の腱を『咲耶』を横薙ぎに一閃して斬り裂く。

そして柚希が時間稼ぎの囮の役目を超え、完全に英霊の動きを封じた時。

「――お姉、後は任せて」

静かな声と共に、胡桃が尻餅をついた英霊の眼前に姿を現した。精霊術の籠手のメインスロットには、ルキアから貰った闇のエレメントが嵌められており、その手の先には勇者の一族の緑と穏健派の青――二重の輝きを放つ立体交差型魔法陣が展開されており、

【……】

本能的に己の生命の危機を感じ取ったのだろう。英霊は最後の足掻きとして、眼の前の胡桃を噛み殺そうとガバッと口を大きく開いて迫ろうとし――そのタイミングで、

「――させない」

柚希は『咲耶』を、真横から英霊の顎へと目掛けて叩き込んだ。敢えて鞘に収めてのその一撃は、与えるダメージを打撃とするためだ。適切なタイミングで、適切な場所に、適切な力で叩き込まれたその衝撃は、英霊の顎の関節を外すには充分だった。

【――――】

突然の事に眼を見開いた英霊は、無防備なまでに口腔内を大きく晒していて、

「踊れ――魔界の炎の精霊よ」

胡桃がそう告げると同時、巨大な漆黒の炎が開いたままの口の中へと叩き込まれ――英霊の頭部を内側から焼き尽くした。

7

東ルートの万理亜とルキア、西ルートの柚希と胡桃。

彼女達が英霊を相手に、それぞれ戦闘を有利に進め始めていた頃。

中央ルートの刃更とゼストは、苦戦を強いられていた。

他のルートが、英霊一体につき二人ずつという配置なのに対し、刃更は英霊をコントロールしている高位魔族と、ゼストは英霊と、単独での戦闘を行なっていたからだ。

――だが、厳しい状況を嘆いても仕方がない。

万理亜と組んでいるルキアに、主であるラムサスのいるウィルダート城からかなり

離れているここまで出て来て貰うのは難しい。また『咲耶』の加護が得られない柚希や、ルキアから闇のエレメントを渡されているとはいえ、魔界の精霊を操る事にまだ不慣れな胡桃にこの難敵を任せる事は避けた方が良いだろう。何より、英霊には驚異的な回復力があり、ダメージを与えても少しすれば肉体を修復してしまう。捕縛での拘束が難しいサイズである事を考えると、彼女らが駆け付けてくれる事を期待するのは難しい。

そして――現状、澪を戦場に立たせる事はできない以上、この強敵は刃更が相手をするのが最も適任だった。戦いの舞台を、複雑な形状をした劇場らしき巨大な建物の屋上へと移した刃更は、

「おおおおおおおおおおおおおおおっ！」

石造りの床面を、高位魔族へと向かって疾走する。

「――――――」

対する高位魔族は無数の魔法陣と共に火炎球を生み出し、それらを解き放つ事で刃更を迎撃してくる。対象が燃えて高熱を発している以上、引火や火傷を避けるためには紙一重の回避は不可能だ。刃更は、迫り来る火炎球に対し大きめのサイドステップで回避。

避けるのが難しいものはブリュンヒルドの斬撃で対応するのだが、

「くっ……！」

ガキンッ、という硬質な音と共にブリュンヒルドの柄を通して伝わってくる手応えに、刃更は顔を顰めた。重い――ただの火炎球ではなく、何らかの岩石か鉱石に炎を纏わせているのだろう。斬る事はできず、辛うじて弾くのがやっとだ。こんなものを何発も剣で受けていたら、あっという間に手が痺れて使い物にならなくなってしまう。

《無次元の執行》を使用する時以外は、刃更は通常ブリュンヒルドを片手持ちで振るっているのだが、この高位魔族との戦闘では常に両手持ちを強いられていた。大振りのブリュンヒルドの持ち方が異なれば、当然身体の動きも変わってきてしまう。体捌きが重要な意味を持つスピードタイプの刃更にとって、それは致命的なハンデとなるものだ。

……っ、《無次元の執行》さえ使えたら！

完全消去は無理でも、この火炎球の炎を掻き消し、手に負担を掛ける事なく岩の部分を砕く程度の事はできるだろう。しかし刃更は現在、《無次元の執行》を封印して戦っていた。不利になる事は解っているが、使うに使えない理由があるからだ。

――ゾルギアとの戦いの後、刃更は滝川から一つの忠告をされていた。

それは今後、現魔王派との戦いにおいて《無次元の執行》を使う事は極力避けるべきというものだ。対象の天元を断てば全てをゼロ次元の彼方へと完全に消し去れる《無次元の執行》は、様々な魔法や特殊能力の中でも非常に異質なものだ。見方によっ

ては、澪が受け継いだ最強の魔王ウイルベルトの力以上の脅威になる。現にゾルギアなどは、澪だけでなく刃更の《無次元の執行》にも興味を持ち、手に入れようとしていた節があった。

よって、刃更がそんな特別な力を持っている事が明るみに出れば、澪以上に狙われるようになる可能性が出てきてしまう。それでも刃更は当初、自分が狙われる事になるのは構わないと思っていた。澪達を守るために必要なら、自分の力を行使する事を東城刃更は躊躇わない。そのためならば、たとえ残酷な行為や卑怯な手段に手を汚す事になっても構わない。綺麗事などクソ食らえだと思っていた。しかし、

……問題なのは。

澪に執着していたゾルギアが、人質を取って万理亜を利用していたように――刃更に力があると解れば、敵が刃更の周囲を狙ってくる危険性がある。

そんな事にだけはさせる訳にはいかなかった。自分のせいで、澪達の身が狙われ、彼女らが人質に取られてしまうような事になったら――その可能性を思うと、東城刃更は心の底からゾッとする。だから、どうしても《無次元の執行》を使う事は躊躇われた。

よって刃更は今、己のスピードと剣技だけでの勝負を強いられていた。

相手の放つ厄介な火炎球をかい潜り、どうにか己の間合いにまで接近して、

「――せあぁっ！」

刃更はブリュンヒルドの斬撃を繰り出した。両手持ちでの攻撃だ。通常よりも威力はずっと上――だが、それなのに通じない。避けられるのではない。斬撃は当たっている。

ただ、まるでダメージを与えられないのだ――高位魔族の肉体が余りにも強靭で。

……クソっ！

何度となくブリュンヒルドの斬撃を叩き込むのだが、甲高い硬質な音が生まれるだけ。斬れないどころか、傷さえ付けられなかった。

――相手の攻撃はいずれも火炎魔法だ。恐らくは魔力タイプの筈。

しかし魔法が得意な反面、身体能力はそれほど高くない筈の魔力タイプで、ここまで頑強な肉体を持っているとは。ゾルギアが剣だけでなく魔法も得意としていたように、この高位魔族は魔法だけでなくパワータイプのような頑強な肉体を持っているのだろう。

以前――ゾルギアと戦った時、刃更は終始押されっぱなしだった。刃更だけではない。澪や柚希も、ほとんど相手にならなかった。よってあの戦いの後、学校から帰宅した後や休日の大半を刃更達は修行に費やしてきた。現魔王派には、ゾルギアの他にも高位魔族がいる――無論、主従契約の関係強化による戦闘力の向上も行なってはいた

が、それだけに頼る訳にはいかない。先々の事を考えると、戦闘力のベースアップはどうしたって必要だった。その過程で起きた体育祭に絡んだ坂崎の一件では、胡桃を人質に取られてしまった事もあり不覚を取った一幕もあった。だが想いをすれ違わせて衝突する羽目になってしまった橘との前哨戦では、ヴァンパイアハーフの橘をあそこまで圧倒する事ができた。

それは間違いなく修行の成果の一つだ。そして――体育祭以降も刃更は修行を続けてきた。間違いなく以前よりもレベルは上がっていると思う。それなのに、そんな刃更の剣が通用しない。こちらが弱いのではない。相手が圧倒的に強いのだ――それも、……間違いなく、ゾルギアより上だ……！

ゾルギアの放つ圧力やその剣技にも圧倒はされたが、少なくとも攻撃が当たればダメージを与える事ぐらいはできた。それは倒せる可能性があったという事だ。しかし、眼の前の敵にはこちらの攻撃が通用しないのである。これでは八方塞がりだ。そこへ、

「……物解りが悪いな」「――――っ！」

高位魔族が嘆息混じりに言った瞬間、刃更は反射的に右への跳躍を行なった。すると、刃更の脇すれすれの所を火炎球が抜けてゆき、制服の脇腹の辺りを僅かに燃え焦げさせる。こちらの攻撃が通じていないため、こういう不意打ちのような真似をする余裕

があるのだろう。今のは運良く回避できたが、このまま至近距離に居続けるのは危険すぎる。

「――だからって退がってたまるかっ！」

しかし、刃更は敢えて敵の眼前に留まった。ダメージを与えられないからといって、ここで距離を取ればどの道ジリ貧だからだ。それでは最終的に行き着く先は敗北しかない。だから東城刃更は退くのではなく、どうすれば相手にダメージを与えられるかへと思考を切り替える。そうして、導き出される答えは一つだ。

攻撃し続けるしかない。ダメージを与えられるまで――かつて柚希が、滝川の障壁を断ち斬った時のように。刃更は腰を低く落とし、手始めには神速の連続斬りを放った。

「はあああああああああああああっ」

糸を引くように無数の剣閃を走らせながら、高位魔族へブリュンヒルドを次々に叩き込む。響くのは、全て剣戟のような音ばかり。それでも攻撃の手を緩めずにいると、こちらの連撃を受けていた高位魔族が、刹那の合間を突いて魔法を唱えてきた。だが、

「――っ」

刃更はショートステップで横へ跳躍。滑るように屋上の床に着地すると、再び高位魔族へと斬り掛かり、攻撃を連撃へと繋げてゆく。行なうのは攻撃と、高速のステップ。

そこにストップ&ゴーを織り交ぜて繰り出す、攻撃と回避の同時実行。
敵がこちらのあらゆる攻撃を弾くというなら。
こちらは敵のあらゆる攻撃を回避するまでだ。
すると、そんなこちらの狙いを察したのか、
「――下らん作戦だ」
切って捨てるように高位魔族は言い放つと、新たな攻撃へと出てきた。火炎球による攻撃を止め――自身の足元から炎の柱を生み出したのだ。
ぐるりと周囲を覆うそれは、まるで巨大な炎の壁。
「っ……！」
とっさに背後へ飛び退った刃更は、相手の動きに警戒しながら炎が収まるのを待った。
――恐らくこの魔法は、こちらに距離を取らせるために使用したものだ。
目的は攻撃ではなく防御――ならば少しでも炎の勢いが収まる兆候が現れたら、即座にこちらから再び仕掛ける。そう考えて機を窺っていた刃更は、
「これは――……」
すぐに自分の考えが誤っていた事に気が付いた。炎の柱は収まるどころか、どんどん

勢いを増していたからだ。そして――天へと向かって燃え上がる炎の柱は、やがて
「とある生物」を形作った。それは、
「炎の龍か……っ！」
刃更の眼の前で、巨大な炎龍が生まれようとしていた。その凄まじい熱量に、一定
の距離を置いていてなお刃更の前髪がチリチリと焼け焦げ始める。こんな炎の化け物を
解き放たれたら、それこそウィルダートの街が火の海になってしまう。
「くそっ――やるしかないのか！」
とっさに刃更はブリュンヒルドを構え、《無次元の執行（ワンダウト）》の態勢に入った。すると、
『――――』
炎の龍が甲高い鳴き声と共に舞い上がり、そこから一気に急降下して、
「え……？」
こちらの見ている前で巨軀の高位魔族を呑み込み、極太の炎柱を巻き上がらせた。
自滅――刃更には一瞬そう見えた。だが、何故か劇場の建物は燃える事はなく、
「――いつまでも、お前の子供騙しのような動きに付き合うつもりはない」
渦巻く炎の中から低い声がして――直後、轟っと炎を巻きながら、中から高位魔族

の巨軀が現れる。大きな両翼と尾が生え、額から伸びた一本の角と、太い両腕――その両方を炎と同じ紅へと染めたその姿は、まるで炎の魔神のようだった。

……つまり。

先程までとは異なる高位魔族の姿に、東城刃更は理解する。炎龍が高位魔族を呑み込んだのではなく――高位魔族が炎龍を取り込んだのだと。視線の先で、ウィルダートの街を呑み込める程の炎を体内に吸収した高位魔族が、凄まじい熱気と圧力と共に、

「行くぞ――」

短く言い放った――そう思った時には、刃更の眼の前に巨体があった。

「なっ――――？」

信じられない程の速度。これだけの巨軀にも拘わらず、スピードタイプの刃更を上回るような速さだった。そして反射的に生まれたとっさの困惑さえ、強大な力を持った敵との戦闘中には致命的な隙だ。しまった――刃更が己の反応を呪った時にはもう、触れただけで大気を燃やすような高位魔族の右の豪腕が迫っていた。とてもじゃないが避けきれない。

そして次の瞬間、激突によって生じたのは轟音を伴う破砕と爆炎だった。

――だが、高位魔族の右の拳が捉えたのは刃更ではない。

命中する直前で、刃更の足元周辺――屋上の石床が、まるで柱のように、気に盛り上がり、刃更を上方へと逃したからだ。自分の代わりに砕かれ燃え上がった足下の石柱に、

「――ゼストっ!?」

東城刃更は、とっさに自分を救ったのが誰かを理解し、その名を叫んだ。見れば、ゼストはまだこちらから少し離れた場所で巨大な英霊との戦闘を続けている。だが、

『――――』

そんな彼女と、瞬だけ眼が合った。ゼスト自身も厳しい戦いを続けているのに、それでも刃更を助けるため、とっさに魔法を使ってくれたのだ。刃更は心の中でゼストに礼を述べながら、根元を砕かれて倒れ始めた石柱から飛び退こうとして、

「っ――――？」

刃更はギョッとなって息を呑んだ。超高熱を帯びた高位魔族の豪腕が砕いた石柱の根元が激しく燃え出し、上にいる刃更を追い掛けるように、気に炎が迫ってくる。

刃更が慌てて背後へ飛び退いたのと、石柱が完全に炎に包まれて焼き尽くされたのは同時だった。そして、辛うじて宙へと逃れた東城刃更は聞く。

「――終わりだ」

すぐ真後ろからの声が、完全に動きを読まれ、先回りされた事を教えてきて――直後、振り返るより先に刃更の背中に信じられないような衝撃が叩き込まれた。

刃更を襲ったのは重い拳の衝撃だけではなかった。高位魔族に破壊された石柱が燃え上がったのと同じく、超高熱を帯びた拳撃を食らった刃更の全身が一瞬で炎に巻かれ、

「があああああああああああああああああああああ――――っ!?」

まるで落下する隕石のように、刃更は絶叫と共に全身を焼かれながら高速で墜落。

屋上を突き破り、轟音と共に劇場の床へと激突した。その衝撃でホールに並べて設置されていた座席が大量に吹き飛び、バラバラになりながら宙を舞う中、

「――――」

露出した劇場の地面に仰向けに倒れた状態で、東城刃更は見る。自分が激突した事で生じた屋上からホールへと通じた穴から、こちらを追って高位魔族が降りてくる。

その太い右腕に――先程の炎の龍を纏わせながら。

「……――刃更様っ!?」

刃更の絶叫を聞いたゼストは、反射的に劇場の建物を仰ぎ見た。
そしてゼストが目の当たりにしたのは、高位魔族の一撃を受けた己の主が、全身を炎に焼かれながら墜落してゆく姿だ。
「――――っ！」
反射的にゼストは上の魔法を発動していた。先ほど石柱を作り出した時のように屋上へと干渉していては間に合わないと判断し、建物の内部へと意識を集中――床へと激突しようとしている刃更を救うため、少しでもその衝撃を和らげようと地面へと干渉する。
ギリギリ魔法の発動が間に合った――そう思った。だが、高位魔族の拳撃を受けて墜落した刃更の落下速度はあまりにも速すぎて。直後、刃更が劇場内の床に叩き付けられるようにして激突したと思われる衝撃と轟音が、離れた場所にいたゼストまで届いてきた。
「あ……あ……っ、刃更様――――っ！」
ゼストは悲鳴のような声を上げ、刃更の下へと駆け付けようとした。
だができなかった。まるで行く手を遮るようにして、ゼストの眼の前に巨大な英霊が回り込んできたからだ。

――この英霊との戦闘が始まってから、ゼストはずっと劣勢を強いられていた。

柚希と胡桃、万理亜とルキアがふたりがかりでようやく倒せた敵を、ひとりで相手をしなければいけないという事もあったが、それ以上に厄介だったのは、刃更が戦っていた高位魔族――ガルドの存在だ。英霊をコントロールする指令を出していたガルドは、ゼストと眼の前の英霊との戦闘が見える位置で刃更と戦っていた。そのため、「敵を排除しながらウィルダート城を目指せ」という大まかな命令を受けていた他の二体と違い、ゼストが相手をしていた英霊だけはリアルタイムで戦術命令が更新され、ゼストを追い詰め続けていたのだ。ひとりで相手をする事は難しい強敵――だが今のゼストには、先程までの苦戦など頭の外に消えていた。心の底からどうでも良かった。

視線の先では、ガルドが刃更を追って劇場の中へと降りてゆく姿が見えた。

自分の大切な主に――刃更に危機が迫っている。だから、

「……邪魔です……退きなさい……っ」

俯いたゼストは、まるで絞り出すようにして声を震わせながら言った。すると、

【――――】

眼の前の英霊が応えた。無言のまま巨大な拳を振り下ろしてきたのだ。

そして――次の瞬間、凄まじい質量を伴った拳撃によって大地を震わせるような衝

撃と轟音が生じた。しかし、

【……】

英霊が僅かに首を傾げる。己の拳が、大地はおろかゼストすら叩き潰す事ができなかった事を理解したからだ。英霊の拳はゼストに届いてはいなかった。その直前で、ゼストが展開した魔法陣によって受け止められている。

そして――ようやくゼストは顔を上げた。普段は冷静なその顔に激情を露わにして。

叫ぶ。

「そこを……退けえええええええええええっ！」

ゼストが放った絶叫――それに周囲の瓦礫が一斉に呼応し、瞬く間に英霊を上回る巨大なゴーレムを形成した。そして両の瞳に意志の光を宿したゴーレムは、

《――――》

祈りを捧げるように組んだ両手を、眼の前へと振り下ろした。その一撃は、英霊の頭部を胴までめり込ませ――そのまま押し潰すように地面へと叩き付ける。英霊を戦闘不能にしたゼストは、組んだ両手を振り下ろしたゴーレムをそのまま重しにして、

「刃更様……っ！」

今度こそ刃更の下へと駆けた。もう自分を遮るものはない――劇場の壁を破壊して

中へ飛び込み、ガルドとの戦闘に入るつもりだった。だが、

「――困るんですよねぇ、あんまり出しゃばられると」

不意に真横で声が生じた――と同時、

「っ――きゃあああああぁぁぁぁっ!?」

とっさに宙で身構えたゼストを、背後からの不意打ちが襲った。

容赦なくゼストを呑み込んだ凄まじい衝撃が、そのまま通りを一気に駆け抜けた。

9

「……」

ガルドは無言で劇場内へと降り立った。

その目的はただ一つ――眼の前の敵に止めを刺す事だ。

――仰向けに倒れている刃更の手にはもう魔剣はなかった。既に具現化できない程のダメージを負ったのだろう。しかし、だからといって敵に情けを掛ける訳にはいかない。

それでも敵とはいえ、未来ある若者の命を奪う事に、倒れている刃更へ向かって、

「……悪く思うな」

ガルドは低く呟くように告げると、せめて苦しませないように――そして敵として戦った相手に敬意を表する意味も込め、炎龍を纏わせた己の右腕を振り上げた。

――それは、魔王の筆頭候補にもなったガルドが放つ己の最強の攻撃だ。

その一撃は刃更を木っ端微塵にした上で、この劇場の建物や周囲一帯もろとも霊子レベルまで焼き尽くすのに充分すぎる程の威力を有していた。

……これで。

恐らく、近くで戦っているゼストも同時に始末できる筈だ。傍にいる英霊も失う事になるが、他の二体も敵によって既に無力化に近い状態にされている。折角封印を解いて再契約まで持ち込んでくれたルカには悪いが、あの英霊は所詮そこまでのレベルだったという事だ。今回の作戦には間に合わなかったが、研究所にはまだ遺跡で発掘された英霊の中でもより強大な力を持ったものも残っている。無理に英霊を残そうとして時間を掛けるよりも、ガルド自身が残る敵を全て排除して目的を達する方が手っ取り早いだろう。だから、

「――安らかに逝け、戦神の子よ」

冥界への手向けの言葉と共に、ガルドは己の右腕を振り下ろした――その時だった。

「――――」

仰向けに倒れていた刃更の右腕が一瞬揺らめいて――ガルドが気が付いた時にはもう、肩まで装甲化された腕が振り上げられていた。その手には、先程の魔剣が再び具現化されて握られている。一体何が――眼の前で起きたのに、まるで知覚できなかったその現象に、燃え盛る右の拳を振り下ろしながら、ガルドは刹那に疑問を得た。

――その瞬間、遅れてきたものがあった。

キンッという甲高い金属音だ。まるで透き通るようなその音を知覚した瞬間。

ガルドの右肩に白線が走り――振り下ろしていた右腕が根元から断たれた。

……斬られた……だと？

痛みはない。斬られたという感覚も。だから回転しながら宙を舞う己の右腕に構わず、ガルドは自分に何が起きたかを分析した。

見れば、刃更の魔剣――その剣身の周囲の大気が揺らめいている。

否、大気ではない。揺らめいているのは、魔剣の周囲の空間そのものだった。

そして今の甲高い音――その一つの事象を結びつける事で導き出される答えは何か？

……『居合い』か。

だが居合いとは通常、鞘走りを利用して繰り出す技だ。そして刃更の魔剣には鞘がない。それ以上に――普通の居合い程度でガルドの腕を断つ事など、不可能の筈だ。

――ならば、一体何が起きたのか？

その答えのヒントは、魔剣の周囲で揺らめく空間にあった。武器の具現化は、異空間や次元の狭間といった別次元から武器を生み出す行為である。刃更は恐らくそれを利用した。

つまり――魔剣を具現化しながら超高速の斬撃を繰り出す事で、次元の境界を利用して通常の鞘走り以上の効果を得て魔剣を走らせ、剣速を超音速の領域まで上げたのだ。

ガルドの右腕を断ったのは、『次元斬』とでも言うべき究極の居合いだった。そして、

「――――」

状況の推測を行なっていたガルドに生じた、ほんの僅かな思考の空白。

その隙を突くように、眼の前の刃更が動いた。瞬の跳ね起きから魔剣の具現化を解除――そして次の瞬間にはもう腰だめの姿勢へと移っている。

先程の仰向けと違い、完全な状態であの居合いを放つための準備体勢。

刃更が放とうとしているのは、ガルドの胴を上下真っ二つにする横薙ぎの剣閃だ。
冷たい色を宿したその瞳は、先程までとはまるで別人だ。
しかし――刃更が放とうとした、究極の居合いが発動する事はなかった。
「な――…？」
僅かに大気が震えたのと同時、ガルドと刃更を閃光が包み込んで。
次の瞬間――ふたりのいた劇場がまるごと吹き飛んだ。

10

刃更やガルドもろとも劇場を吹き飛ばした衝撃が収まった後。
美しかった周囲の街並みが瓦礫へと変わったのを見下ろしながら、
「やれやれ、少しやりすぎましたかねぇ……」
そう言って笑った者がいた。
枢機院の命を受け、ガルドの侵攻に帯同していたネブラだ。
――現在、ネブラは高い視界を得ている。だが、それは宙に浮いているからではない。

ガルドが使役していたものより、さらに一回り巨大な英霊の肩に乗っているからだ。

ルカが間に合わせられなかった、より強力な力を持った上位型の英霊の調整と再契約

――それを枢機院はレオハルト達に気付かれぬよう実行し、完遂していたのである。

そして侵攻の見届け役というネブラの任務は、あくまで表向きのもの。枢機院から与えられた本来の指令は別にあった。その一つが、ウィルダートの侵攻に乗じたガルドの暗殺だ。

――最近、レオハルトの求心力が急速に高まってきている。

レオハルトを新たな魔王に据えたのは枢機院ではあるが、かといって必要以上に民衆や兵士達から支持を得られても厄介だ。人形は華やかな方が眼を引くものの、かといって大人しくしていなければ意味がない。よってレオハルトの力を削るため、枢機院は今回の侵攻を命じたのである。数で押す作戦にはせず、敢えて発掘したばかりの英霊を使用させたのは、そうすればレオハルトの配下が誰かしら前線に出ると踏んだからだ。レオハルトが信頼できる臣下は少ない――よって戦場に出た者を始末し、レオハルトの力を削ぐ事にしたのだった。

そのため、侵攻の指揮をガルドが執る事になったと聞いて枢機院は大いに喜んだ。

レオハルトが強気でいる事ができ、また求心力を高める事もできている要因の一つは、

有力な魔王候補だったガルドが陣営に入り、後見役のように付いて貰えていた事にあったからだ。レオハルトにとって、ガルドはそれこそ実質的にも精神的にも様々な意味で貴重な戦力となっている。よって、

「そんな貴方を失えば――レオハルト陛下も少しは大人しくなると思いまして」

とネブラ。その瞳の先には、こちらと同じ視線の高さに浮いているガルドがいる。

「……ネブラ、貴様……！」

「ああ、やっぱり怒ってますか。まあ、そうですよねぇ……」

激怒の表情でこちらを睨んだガルドに、ネブラは笑みを返した。

今のガルドにはもう、いつものような圧倒的なオーラや存在感はない。ネブラが操る上位型英霊による不意打ちをまともに食らい、その全身は傷だらけ――さらには、力の象徴ともいうべき右腕を失ってしまっているからだ。

「でもそれは自業自得というものでしょう。いかにジン・トージョーの息子とはいえ、貴方が人間の少年ごときに不覚を取るだなんて……流石に心配になってつい介入してしまいました。レオハルト陛下の後見役なんかに落ち着いて、丸くなりすぎたんじゃありませんか、ガルド殿？」

嘲笑うように言ったネブラに、

「……言っておいた筈だ」
とガルドは言った。
「余計な手出しをすれば――貴様を肉塊へ変えると」
そう口にしたのと同時に、ガルドの姿が掻き消える。だから、
「ええ。でも、私はこうも言った筈です――」
ネブラは言った。己の真横に出現したガルドに構わずに、
「――余程の事があれば話は別だ、と」
そう告げた瞬間――攻撃の態勢に入っていたガルドが再び消えた。だが、それはガルドの意思によるものではなかった。それを証明するように、刹那の後に轟音と衝撃が生まれた。上位型英霊の振るった右の拳が、ガルドの側面に叩き込まれたのだ。
ウィルダートの街の建物を薙ぎ払うようにしてガルドが吹っ飛び――通りを三つ破壊してようやく止まった。そして衝撃と共に舞い上がった砂煙が収まると、
「……ふむ、意外と呆気なかったですね」
ガルドの排除を終えたネブラは、肩を竦めて言うと、
「では、もう一つの任務に掛かるとしましょうか……――おや？」

そこで、新たな敵の存在に気が付いた。
ガルドが倒れた事で、彼の使役していた英霊が動かなくなったからだろう。ゼストが相手をしていた英霊以外の二体と戦っていた者達の内、ラムサスの副官であるルキアを除く二名がこちらへと向かってきている。彼女達の瞳が怒りに燃えているのを見て、
「……ああ、そうでした。貴方達の仲間も倒してしまったんでしたっけ」
と、ネブラは笑って言った。楽しそうに、
「良いですよ――残りの目標を始末する前に、まずは貴女達の相手をしてあげましょう」

11

意識を深い闇に浮かべたゼストの頬をくすぐるものがあった。
最初は風かと思った。しかし、
……いいえ。
ゼストは瞳を閉じたまま、己の頬に触れる感触に意思が伴っているのを感じた。
頬への感触は――必死にゼストへ覚醒を促している。だから、

「……っ……、う……」

ゼストはそっと瞳を開けた。それだけで身体が悲鳴を上げ、苦悶の声が漏れる。

それでも両目を開けると、ぼやけた視界で最初に確認できたのは可愛らしい獣の顔だった。そして小さな舌を使って、心配そうにゼストの頬を舐めていたのは、

「お前……あの時の……？」

ゼストはすぐに気が付いた。先日、刃更達と共に街へ出た時に、カフェ裏の路地で出会った、あの一角獣の幼子だった。今回の英霊を使用したガルドの侵攻で市街地にも結構な被害が出ていたが、どうやら死なずに済んでいたらしい。

ゼストの思考が徐々に正常さを取り戻し、

「……――刃更様!?」

ようやく自分が何をしようとして、そしてどうなったのかを思い出したゼストは、大切な主の名を叫びながら身を起こした。と同時、ゼストの耳に一つの声が届いた。

だが、それは言葉ではなかった――悲鳴だ。

『っあああぁあああああああああああぁあぁ――っ！』

「――マリアっ？」

ハッとなったゼストが声のした方向を仰ぎ見ると、マリアが先程までとは異なる巨大

な英霊の蹴撃を喰らって吹っ飛ばされた姿を目撃した。

マリアの小さな身体は、まるでボールのように地面に叩き付けられバウンドし、近くにあった瓦礫の山に突っ込み轟音を響かせた。

「……」

その光景を目の当たりにしたゼストは思わず呆然を得た。先程まで自分が相手をしていた英霊とは、まるで比べものにならない程のパワーと俊敏な動き。そんな本当の化け物のような英霊を、ガルドとは別の高位魔族が操っている。そして、

「あれは――……」

マリアが突っ込んだ瓦礫の山の近くに、それぞれ離れ離れに倒れ伏している二人の少女の姿にゼストは気が付いた――柚希と胡桃だ。きっとゼストが気を失っている間に、彼女達もあの英霊と戦ったのだろう。破壊され尽くした周囲の凄惨な光景が、彼女達の激闘を物語っている。

「……っ！」

マリアや柚希達の無事を案じながら、それでもゼストは先にある事を行なった。

己の主である刃更の居場所の特定だ。刃更が生きている限り主従契約が消える事はない――だから刃更の無事を念じるようにして、両眼を瞑り位置探知を行なった。そ

して、

……感じる……ご無事なんですね、刃更さま……っ！

刃更の波動を確かに感じ、ゼストは眼を見開いた。思わず叫んでしまいそうになったが、その衝動を必死に堪えて己の声を押し殺した。刃更の波動は、ゼストのすぐ傍にあったからだ。肉眼でその姿を確認する事はできないが、恐らく瓦礫の陰に倒れているか、或いは土砂の下に埋もれてしまっているのだろう。すぐにでも助け出したいところだが、

……慎重に動かなければ。

ここで下手にゼストが声を出し、それをあの高位魔族に気付かれれば、自分だけでなく刃更まで危険に晒す羽目になってしまう。そして今の自分では、とてもじゃないがあの英霊の相手をする事はできない。だから、ゼストは息を殺して動こうとした。

だが――敵の高位魔族は目敏かった。

「――おや、始末した筈の鼠がまだ生きていましたか」

ゼストが動くより先に、こちらが意識を取り戻していた事に気付かれた。

そしてこちらへ向き直った英霊が、ゆっくりと近付いてくる。

『――――』

己に危機が迫っている事を感じたのだろう。地面にいた、角獣の子供が、逃げるようにゼストの右肩へと上ってくる。その小さな身体を手で抱き寄せてやりながら、ゼストは己の判断を迷わせていた。こうなった以上、すぐにでも動いて囮となり、刃更を巻き込まずにすむ充分な距離を取らなくてはならない。

……ですが。

下手にゼストが動こうとすれば、向こうは即座に攻撃を仕掛けてくるだろう。問題なのは、あの英霊のパワーと速度が桁外れだという事だ。その強力な攻撃は、この辺り一帯を――それこそ刃更もろとも吹き飛ばすに違いない。かといって、このままこの場所に留まれば、やはり刃更を危険に晒してしまう事になる。一体どうすれば――主である刃更を想い、ゼストは己の動きを決めかねていたが、

……っ、これ以上は……っ！

それでも刃更を守れる確率の高い方を選び、ゼストが動こうとした――その時だった。

眩い閃光が生じたのは。

「――――っ!?」

ゼストはとっさに上の魔法で防護障壁を作ろうとした。英霊がこちらに攻撃を放っ

てきたと思ったからだ。――だが、そうではなかった。
英霊の頭が爆炎に包まれていた――英霊の方が攻撃を受けたのだ。
とはいえ英霊にダメージはない。深紅の炎が収まると、爆煙の中から無傷の英霊の頭部が姿を現す。それでも、誰かがゼストを――そして刃更を守ってくれたのは事実だ。
……体誰が……？
ゼストは視線を彷徨わせた。刃更でもない。マリアでもない。柚希や胡桃でもない。ルキアか？　それも違う。ラムサスの副官である彼女がここまで出て来る筈がない。
――ならば、体誰か？
その答えは、風に乗ってゼストの耳へと届いた。
「……――調子に乗るのも、大概にしておきなさいよ」
その声は、偉大な魔王の血を引く少女のものだった。
――そして、ゼストの眼の前に彼女が降り立った。
ゼストは見る――戦場に舞い降りた彼女を。
成瀬澪を。

「……」

本来、決してこの場に出てきてはならない澪の後ろ姿を見たゼストは、

……限界、だったのでしょうね。

しかし、驚きを得る事はなかった。澪がこちらを庇うように前に立っていたからだ。

それは恐らくゼストを守るためではない。或いは、そういう意図も持ってくれていたのかもしれないが、澪がここへ来たのはきっと刃更を守るためだ。

ゼストと同じく――否、ゼストより先に刃更と主従契約を結んでいる澪は、位置探知で刃更がすぐ近くに居る事を解っている筈だ。自分のせいで、これ以上大切な存在や街が破壊されてしまうのを、黙って見ている事ができなくなったのだろう。

強引にノエルを振り切り、ここへ駆け付けてしまったに違いない。すると、

「……ほう」

英霊の肩で同じく無傷だった高位魔族が、澪へと恭しく一礼し、

「これはこれは、穏健派のお姫様……お初にお目に掛かります。私は枢機院議長、大公ベルフェゴールが側近、ネブラと申します。このような高い場所からご挨拶する無礼をどうぞお許し下さい」

「……あたしがそっちに行けば、アンタ達はこれ以上の侵攻を止めてくれるのよね？」

静かに問い掛けを放った澪に、ネブラは笑みを浮かべて、

「確かに我々は貴女を引き渡すように通告しましたが、まさかご自分からお越しいただけるとは思いませんでした。今回の我々の侵攻によって穏健派は決して少なくない数の兵が命を落とし、この歴史あるウィルダートの街は破壊され、多くの民が住む家や暮らしを失いました。ですがそれらは、貴女を守るため止むなく支払われた犠牲です」

それなのに。

「恥ずかしながら私などには理解できない行動なので、後学のために教えていただけませんか――時の己の感情を優先して、全てを無駄にしてしまえるその愚かさは、一体どこから来るものなのかを」

そんなネブラの挑発とも取れる言葉に、

「……アンタになんか絶対に解らない」

澪がギュッと拳を握って言った。その声は震えていた――おそらくは恐怖と、それ以上の怒りと悔しさとで。背後にいるゼストには澪の顔は見えない。それでも澪は、心までは屈する事なくネブラを睨んでいる事だろう。すると、

「ふむ、成る程――これがあのウィルベルトの忘れ形見か」

とネブラが笑った。だが――次の瞬間、その瞳をサッと冷たいものにして言った。

「……――殺せ」

と同時、ネブラを肩に乗せた英霊が動いた。弾かれたように地面を蹴ると、瞬きするより速くこちらへ肉薄し、そのまま裏拳の軌道で右の拳を振るってくる。

「え……？」「――っ！」

想像外の事態にとっさに動けずにいる澪に対し、ゼストは反射的に自分と澪の前に上の防護障壁を展開した。それでも驚愕を得たのはゼストも同じだ。

――現魔王派が澪を狙っていたのは、彼女が持つウィルベルトの力が欲しいからだ。下手に殺せば、そのまま澪の命と共に失われてしまう可能性がある。よって、もし澪を殺すにしても、それはウィルベルトの力を抽出してからの事だと思っていた。

……一体何をっ!?

思考を混乱させながら、それでもゼストは何とか意識を集中させた。自分の障壁では、ネブラが操る英霊の攻撃を受け切れないかもしれない。それでも何もしなければお終いだ。だから必死に障壁を展開し――直後、轟音が生じた。

ゼスト達の背後で。

「え――……？」

ゼストと澪は、呆然と後ろを振り返った。すると英霊の拳による衝撃で、帯の地面が吹き飛び、土砂や瓦礫が巻き上げられるようにして宙を舞っていた。

眼に見える事象としては理解できる。だが、何が起きているのか理解できない。

信じたくなかった。何故なら――あの辺りには刃更がいた筈だからだ。

ゼストは呆然となりながら、それでも無意識に主従契約の位置探知を行なった。するとゼストの視線の先で今まさに吹き飛んでいる土砂の中に、己の主の波動を発見する。

「――――」

そこから先は、考えるよりも先に身体が動いていた。ゼストは己の翼をはためかせて飛翔――、直線に刃更の反応へと向かって飛んだ。刃更の姿は見えない。巻き上げられた大量の土砂と瓦礫に紛れてしまっている。だからゼストは上の魔法で干渉――すると無秩序に吹き飛んでいた土砂と瓦礫は、うねるようにしてまとまり離れた場所の地面へ。

今度こそ刃更の姿を肉眼ではっきりと捉えたゼストは、両手を伸ばして己の主を宙で抱き留めた。そして、

「……刃更、様……？」

震える声で呼び掛ける。しかし、応えはなかった。当然だ。ただでさえガルドと戦っ

て深いダメージを負い、さらにその戦闘の途中で横からネブラが操る英霊の不意打ちをまともに喰らってしまっていた。あの時点ですぐにでも治療が必要な状態だったのだ。

そんな刃更へ、止めとばかりにネブラは英霊による一撃を叩き込んだ。

生きてはいる。だが、あくまで死んでいないだけだ。

刃更は無事ではない――動かない。そこへ、

「――ああ、これはすみませんでした。うっかり狙いが逸れたところに、まさかジン・トージョーの息子さんが居たとは。全く気付きませんでした」

わざとらしくネブラが言った。そして、

「……ところで姫、先程の質問の答えをまだいただけていませんでしたが」

笑う。全てを見透かしたように、

「結局――ご自分のために周囲が払った犠牲を全て無駄にして、のこのことここへ来てまで貴女が守りたかったものは一体何だったのです？」

その言葉は、ゼストの理性を弾けさせるには充分すぎるものだった。

殺してやる。動かぬ刃更を抱きしめながら、ゼストは己の感情を爆発させようとした。

――だが、できなかった。ゼストが動くよりも、何か言葉を発するよりも先に。

それは起きた。

「――――――」

澪を中心に、深紅の波動が解き放たれたのだ。

周囲の空間を揺らめかせ、激しく大気を鳴動させながら、

「……――――よくも」

眼の前のネブラと巨大な英霊に対し、成瀬澪はそれだけを言った。

自分の心が、荒れ狂う激情でおかしくなりそうになっているのが解る。それでも、自分でも驚くほど冷たい声になったのは、頭の中はどこまでも冷静だったからだ。

さらに言うなら――澪は今、己の中にある力を暴走させてはいなかった。身体の奥底から湧き上がってくる、激しい力の奔流を、澪は完全にコントロールできていた。

――だが。それは何も、この上壇場で都合良く行なえるようになった訳ではない。

父ウィルベルトの力と、自身の力の制御――それがゾルギアとの戦いの後、澪が己に課した至上命題だった。何故ならこれまで、澪は戦闘で役に立てた事がなかったからだ。

刃更と出会ってすぐの頃、夜の都立公園で行なった滝川との戦いでは、刃更を巻き込まないためとはいえ、一人で立ち向かった結果まるで相手にならず、それどころか傷付いた刃更を見て父から受け継いだ力を暴走させてしまい、最後まで刃更に助けられた。

駅前で繰り広げた柚希や胡桃ら勇者の一族との市街戦では、『霊槍』『白虎』を操る早瀬高志には歯が立たず、ほとんど何もできずに終わった。

そしてゾルギアとの戦いでは、敵の手に落ちてしまい、刃更達の足手纏いになった。

当時は敵だったゼストと戦い拘束する事はできたが、それも柚希と二人でどうにか成し遂げた事だ。これまで澪は、一人で仲間達の役に立った事はない。

よって――もう足手纏いにならないよう、澪は自分の力を完全に制御する事を己に課し、そしてそれを成し遂げる事に成功していた。それも父ウィルベルトの力だけでなく、ゾルギアの右腕を消し飛ばしたあの強大な力も扱えるようになっていた。

……でも。

コントロールできるようになったものの、これまで澪はそれらの力を使おうとはしなかった。使用すれば激しく消耗し、行動不能や意識喪失に陥ってしまう弱点があるという理由もある。だがそれ以上に、澪の心の中には強大な力を使う事への忌避感があった。

――成瀬澪は、ある日いきなり両親を殺され、自身が先代魔王の娘だと知らされた。

あの日、澪は己の十五年の人生を全て否定されたのだ。

そして養父母の仇を討つと決め、必死に戦う術を学んで生き抜いてはきたが――そうした復讐という感情の裏で、澪の心をずっと苦しめるものがあった。

それは――自分が人間ではなかったという事実。

魔族。それは普通の人間にしてみれば、化け物と言い換える事もできるような存在だ。

だが澪だって、あの日まではごく普通の人間として生きていた。

それをいきなり、お前は人間ではないと、自己の存在を完全に否定されてしまった。

刃更や柚希、胡桃も異能の力を使えはするものの、二人は勇者の一族であり、あくまで彼らは人間だ。澪とは根本的に、根源的に違う存在である。ならば魔族である万理亜を化け物だと思ったり、彼女に対して悪感情を抱いているかというと、そんな事はない。

しかし刃更達の傍にいる時、ふと心のどこかで自分だけは違うのだと思ってしまう瞬間があり、その度に澪は彼らと決して消える事のない距離を感じて、苦しみ続けてきた。

無論、刃更達は澪を普通の人間のように扱い、接してくれている。中でも刃更は、最初から澪を受け入れてくれていた。一度は家を追い出されはしたが、それはあくまで澪達が刃更や迅を騙していたからであって、澪が魔王の娘だからという理由ではなかった。

――その事が、どれだけ澪の心を救ってくれたか刃更は知っているだろうか？

だから、そんな彼の足手纏いにだけはなりたくなかった。だけど、もし父から受け継いだ力を使えば、いよいよ自分は本当に人間ではなくなってしまうような気がして。

自分が刃更とは違う存在なのだと思い知るのが怖かった。だから体育祭の時も力を使う事ができず、柚希と共に敵の不意討ちにやられてしまったのだ。成瀬澪は人間で居たかった。だから、自分の中にある強大な力を使いたくなかった――これまでは。

――でも、もう良い。

刃更はきっと、澪がウィルベルトの力を使っても何も変わらない。それは澪の正体を知っても受け入れてくれた事や、澪や万理亜――ゼストを大切に想い、命を懸けて戦ってくれたこれまでの刃更の行動がその事を証明してくれている。自分はただ、自分を受け入れてくれた優しい主を――大好きな彼を信じれば良い。

……それに。

もしも強大な力を使った事で、刃更が自分から離れていってしまう事になろうとも、眼の前の敵だけは断じて許す訳にはいかないのだ。

だから、成瀬澪は告げる。

「……あたしが何故、ここに来たのか訊いたわね」

教えてあげる。

「あたしは今、東城刃更の妹で下僕なの……大切な家族を、主を傷つけられて、腸わた煮えくり返っておかしくなりそうなの」

解る？

「アンタは刃更を傷つけた。彼の大切なものを傷つけたわ。だからそのツケを払わせてやる――アンタを百回殺してね」

そうよ。

「先代魔王の娘とか、その力とか……アンタ達があたしに何を見ようと勝手だし、そんなのあたしの知った事じゃないから、どうでも良かったのよ。欲しけりゃくれてやるつもりだったわ、あたしから全てを奪う事になったこんな力なんて。でも、お生憎様……もう無理よ。もうあたしは決めたから。あたしの大切な人を傷つけたアンタと、アンタの後ろにいる連中を絶対に許さないって」

だから思い知れ。

「――あんまり成瀬澪を舐めんじゃないわよ」

そう告げると同時に、澪は己の中にある力を解放して。
次の瞬間――轟音と共に、眼の前の敵を圧殺した。

12

澪が放ったウイルベルトの重力魔法は、あっさりとネブラの英霊を肉塊へと変えた。
そして、
「――――――」
その代償か。澪はふっと糸が切れたように意識を失った。
しかし――その場に倒れかけた澪を支えるものがあった。
ゼストが唱えた上の魔法だ。椅子のような形状になって澪を受け止めた砂の塊は、すぐにクッションのように形を変え、そっと澪を地面へと横たえる。
そして、そのすぐ脇に刃更を抱えたまま着地したゼストは、
「……」
無言で眼の前にある光景を見た。あの圧倒的な強さの英霊を、一撃で原形を留めぬレ

ベルにまで圧殺するとは。ウィルベルトが最強と謳われた魔王だった事は知っていたが、……やはり凄まじい威力ですね。

しかも、確かこれまでに澪が自分の意思でウィルベルトの力を使った事はなかった筈だ。よって、今後さらに使いこなせるようになれば意識を失う事なく発動させられたり、それこそ今以上の力を出せる可能性は充分にある。

確かにこの力は、使いようによっては魔界の未来を左右できる代物だ。穏健派や現魔王派が、手に入れようと躍起になるのも頷ける。そして――これだけの強大な力だ。ネブラは倒したが、それでも発動の際に生じた波動は、間違いなく現魔王派も感じ取った筈。これでもう、澪がウィルダートにはいないなどという言い訳は使えない。

魔界の覇権を賭けて、穏健派と現魔王派の本格的な戦争が始まる事になる。

恐らくは今日以上の被害や犠牲が出る事になるだろう。だが、

「……ありがとうございました」

ゼストは、意識を失っている成瀬澪に感謝の言葉を告げた。澪のお陰で、ひとまずは敵の脅威は去った。本格的な戦争に突入する事は多くの者にとっては最悪の結果かもしれないが、ゼストにとっては違う。主である刃更が助かる事が第一で、彼が命を落としてしまう事だけが、何があろうと避けなければならない事態だったのだ。

よって、そんな最悪の結末を回避できた事に胸を撫で下ろした時だった。
その場に、凄まじい魔力の奔流が生じたのは。
「っ――これは!?」
一体何事かと焦りを帯びた声を上げたゼストは、しかしすぐに魔力の源に気が付いた。
答えはすぐ眼の前にあった。
巨大な肉塊と化した英霊の中で、凄まじい量の魔力が膨れ上がっているのだ。

13

上位型英霊は自己治癒による修復が不可能なレベルにまで壊された。
――だが、ネブラ自身は無傷だった。
澪の重力魔法を受ける前に、一瞬で大きく背後に距離を取って回避していたからだ。
「あの上位型英霊を一発ですか……確かに凄まじい力ですねぇ」
離れた場所にある塔のような建物の屋上に立ち、ネブラは言った。
「なので、やはりベルフェゴール様のご命令通りここで始末させていただきますよ」
そう――ネブラは何も、独断で澪を殺そうとしたのではない。ネブラが受けていた

指令は最初から、つあった。つは侵攻に乗じてガルドを始末する事。そして、もう、つがウィルベルトの力もろとも澪を抹殺する事だ。

――ウィルベルトは歴代最強の魔王である。よってその力は穏健派は勿論の事、今のレオハルトにはもう手に入れられても困るのだ。あまりにも強大すぎる力は、枢機院でもコントロール不可能な事態を引き起こしかねない――そのためネブラは、確実に澪を始末するようにベルフェゴールから命令されていた。

「古代遺跡に眠っていたという事は、即ち都市防衛型の英霊だという事。ですから当然ありますよ……侵略による陥落など、最悪の場合に備えて敵を巻き込み自爆する機能は」

だから、

「過去の魔王の亡霊よ――貴方の愛した街と共に、完全に消え去るがいい」

そう言って、ネブラは自爆の魔力コードを詠唱した。と同時、ネブラの視線の先で肉塊と化していた英霊が眩く発光を始めた。対するネブラの周囲を、全天球型の特殊な防護障壁が覆う――コード入力者が自爆に巻き込まれないよう、発生する魔力爆発へのアンチフィールドが展開されたのだ。そして、コードの詠唱を終えたネブラが笑みと共に、

「――さようなら」

そう最後の別れを告げると――上位型英霊の肉塊が、一気に膨れ上がり爆発した。

閃光と共に生じた業火は、ウィルダートの街全てを焼き尽くす。

――その筈だった。

だが、爆炎と衝撃が広がろうとした瞬間――その両方が一瞬で消滅した。

「なっ、馬鹿な……っ!?」

信じられない光景を目の当たりにしたネブラは、驚愕の叫びを上げた。

――自爆コードの起動に失敗した？　いや、間違いなく爆発は起きていた。自爆には成功して――しかし発生した炎と衝撃を消し去られたのだ。魔力の残滓すら跡形もなく。

……い、一体何が……っ!?

愕然の思いで向こうを見れば、本来爆発が起こる筈だった場所に、澪やゼストを庇うようにして彼女らの前に立つ少年の姿があった。巨大な魔剣を両手で振りきった体勢で動きを止めていたのは――動けなくなっていた筈の東城刃更だ。そして、

『――――』

その冷たい瞳が、遠く離れた場所にいるこちらを完全に捉えた。思わず気圧され、

息を呑んだネブラは、
「成る程……これはベルフェゴール様に良い土産話ができました」
それでも笑みと共に右手を掲げると、上空から巨大な影が降ってきた。相手は何か隠し技を持っていたようだが、ベルフェゴールの指令には絶対に失敗できない以上、保険としてネブラもまた切り札を残していたのだ。
そして轟音を響かせながらウィルダートの街に降り立ったのは、先ほど自爆したのと同じタイプの上位型英霊。それも今度は二体だ。ネブラは二体を己の背後に従え、残る一体はウィルダート城のすぐ傍に降ろした。一気に決着を付けるため、刃更達とウィルダート城に同時に攻撃を仕掛ける事にしたのだ。奇妙な技で自爆の炎を消し去る可能性のある刃更には英霊に肉弾攻撃を仕掛けて蹴散らし、ウィルダート城の傍へ配置した英霊は最悪自爆させればラムサスら穏健派を束ねている連中をまとめて始末できる。だから、
「残念でしたね――これで本当に終わりです」
そう口にしたネブラが、英霊達に殲滅を命令しようとした時だった。
ネブラの背後で二連の衝撃音が鳴り響いた。
「な――……っ？」

慌てて背後を振り返ると、そこには先程よりも信じられない光景があった。

あの巨大な上位型英霊が、一体とも宙を舞っていて――そして、そのままウィルダートの街の外まで吹っ飛んでいき、やがて遠くで地面に激突したと思われる重い轟音を響かせた。ネブラが塔の上で、遠くを震源にした大地の揺れを呆然と感じていると、

「ったく、いきなり人の近くに降ってくんじゃねえよ――潰されたらどうすんだ」

地面からどこか呑気な声が投げ掛けられた。見れば、たった今まで一体の上位型英霊がいた場所に、ひとりの少年を連れた人間が立っている。その男の名を、ネブラは知っていた――当然だ。戦神と恐れられた、あの最強の勇者の名を知らない訳がない。

「ジン・トージョー……っ！」

ネブラは忌々しげにその男の名を口にした。レオハルトと交戦して姿を晦ました後、枢機院の方でもその行方を摑めずにいたが――偶然か、それとも予め想定していたのかまでは解らないが、息子の窮地に駆け付けたという訳だ。

……ならばっ！

ひとまず迅の事は無視し、ネブラは自爆の魔力コードの詠唱に入った。迅に飛ばされ

た：体へのものではない。ウィルダート城の傍に落とした残る：体を爆発させるためだ。

迅が来た以上、刃更や澪らを始末できる可能性はほぼ消滅した。ならば、せめてウィルダート城にいるラムサス達だけでも始末しようと試みる。ところが――ネブラがウィルダート城の方を振り返りながら、自爆コードの詠唱を終えようとした瞬間、不意に生じた轟音と共に、残っていた最後の上位型英霊が不可視の力で圧し潰された。

「――重力魔法だとっ？」

澪はまだ意識を失ったままだ。ならば：体誰が――完全に思考を混乱させたネブラは、しかし見る。ウィルダート城の屋上に、穏健派が誇るサキュバスの母娘――シエーラとルキアを従えるように立っている男の姿を。それは、ウィルベルトと同じ重力魔法を使えてもおかしくない存在――現在の穏健派を束ねる、亡きウィルベルトの兄。

「ラムサスか……っ！」

吐き捨てるようにその名を漏らしたネブラは、しかし口元を笑みに引き攣らせた。

……馬鹿がっ。

たとえ潰されても、コードの詠唱さえ完成すれば英霊の自爆は可能だ。だから密かに口の中で詠唱を再開し始めたネブラは、

「……？」

不意に、己の真後ろに気配を感じて振り返った。するとそこに、

「――――」

ネブラの思考はおろか、心臓までをも凍てつかせるような冷たい瞳の少年が立っていた。

東城刃更だった。

「へ――――……？」

そして次の瞬間、ネブラはどこか間の抜けたような声を漏らした。

その胸を――あっさりと刃更の巨大な魔剣が完全に貫いている。

刃更がブリュンヒルドを引き抜くと、ネブラは屋上の床に崩れるようにして倒れた。

ネブラは胸から大量の血を流し、ひゅーひゅーと呼吸もままならない状態で、それでも、

「た……す、けて……」

必死に声を絞り出して、刃更に命乞いをしてくる。

そんなネブラに刃更は言った。どこまでも冷酷な瞳のまま、

「お前の背後にいる黒幕の名前と、その目的を話すなら穏健派に治療するように掛け合ってやってもいい……現魔王レオハルトは、澪の力を手に入れようとしていた筈だ。だがお前は、あのガルドという魔族を攻撃し、澪の事まで殺そうとしたな――」

言え。

「――お前にそんな命令を下した奴は何者だ。枢機院とかいう高位魔族の連中か？」

「っ……そ、れは……」

「本気で助かりたいなら早く言った方が良いな。その出血ではもうじきロクに喋れなくなる――そうなってからじゃや、お前の全てがゼロになるぞ」

刃更の言葉に、ネブラはしばし沈黙した。そして、

「……う」

何かを口にしようとした――その時だった。ネブラの首に痣が浮かび上がり、緋色に発光し始めたのは。まるで首輪のようなその紋様が何かを、東城刃更は知っている。

「これは……」

主従契約の呪いだった。主の情報を敵である刃更に漏らしてまで助かろうとしたため、強烈な後ろめたさが生じて呪いが発動したのだ。滝川が以前言っていた。主従契

約魔法には、敵に捕われた配下から情報が漏洩する事を防ぐ目的もあると。そして、主従契約の呪いは、基本的に主の魔力特性に由来するが――たとえどんな特性であろうと、最大限の力で呪いが発動すれば間違いなく生きてはいられないと。

刃更は通常の主の魔力を使用するのではなく、澪や柚希とは万理亜の、ゼストとはシェーラの魔力を使って契約を結んでいるため、彼女らに出る呪いの効果は催淫となる。ならば、ネブラが主従契約を結んだ主の魔力特性は何か――その答えを刃更は見た。

「がっ――――……？」

短い呻き声を上げた次の瞬間、ボンッと鈍い音と共にネブラの身体が内側から弾けた。自爆などの可能性もあったため、とっさに距離を取った刃更の足下に、ネブラだったものの一部が飛んできて屋上の床をべっとりと紅に汚す。そして、

「刃更様、ご無事ですかっ!?」「……ああ、大丈夫だ」

慌てて屋上へと飛んできたゼストに、静かに頷きを返すと、

「……」

東城刃更は主従契約を結んだ者が迎えてしまう可能性のある、無惨な末路を眼を逸らさずに見詰めた。最悪の場合――澪や柚希、ゼストもこのネブラとそう大差のない命の落とし方をするかもしれない。自分達が結んでいる契約は、遊びではなく命懸けの

ものなのだ――その事実の重さを、刃更が改めて実感していると、
「刃更様……」
ゼストが、そっとこちらの背に身を寄せてきた。そして、それ以上は何も言わない。
無言のまま、ゼストは刃更の背に縋ってきた。それが、主である刃更に対するゼストの答えだった。だから刃更は背後を振り返ると、ゼストの腰をぐっと抱き寄せて、
「行こう……城へ戻って、皆の手当てをして貰わないと」
そう言って、二人で静かに屋上を後にした。
だがその背後には、ネブラの死体が。その向こうには破壊されたウィルダートの街が無惨な姿を晒しており、昨日まであった平穏は最早完全に失われていた。
後にはただ、残酷な戦争の現実だけが爪痕のように残っている。

エピローグ　死闘と再会の果てに

1

ウィルダート城へ戻った刃更達は、まずメイドらによる手当てや治療を受けた。
万理亜・柚希・胡桃の三人は、ネブラの操っていた上位型英霊との戦闘で負傷し、体力を大きく消耗しているため安静を言い渡され――目立った外傷こそないものの、ウィルベルトの力を使用した事で魔力や精神を激しく消耗して意識を失った澪もまた、しばしの休息が必要と診断された。それでも命に別状はなく、刃更はようやく胸を撫で下ろす。
そして刃更自身も、ゼストと共に別室で一通りの手当てを受けた後、
「――じゃあゼスト、澪達の事を頼むな」
「はい刃更様……ですが、刃更様も怪我の度合いは決して軽くはありません。ご無理はなさらず、お早めにお戻り下さい」

「ああ、解ってる……用事が済んだらすぐに戻るよ」

そう言ってゼストを一足先に澪達の部屋へ戻らせると、自分は別の場所へと向かった。

ゼストが心配したように、刃更もガルドとの戦闘や上位型英霊の不意打ちを喰らうなど、かなりのダメージを負っており、医者からは澪達と同じように部屋で安静にしているように言われている。疲労もかなりあるため、すぐにでも横になりたいのが本音だ。

――しかし、その前に話しておきたい相手が刃更にはいた。

ラムサスやクラウスではない――いや、澪が己の意思を固めた以上、改めてラムサス達とも話をしなければならないのだが、彼らは現在ルキアと共に穏健派の高位魔族達と今後の対応を協議している。市街地に被害が出た以上、避難生活を余儀なくされた民衆のための仮設住宅を用意する必要もある。

……それに。

今回の戦闘で、穏健派は敵の高位魔族を捕虜にしていた。ネブラは主従契約の呪いが発動して死んだが、ガルドの方は刃更に片腕を斬られ、直後に刃更と共に上位型英霊の不意打ちを喰らって吹き飛ばされてもなお、死んではいなかったからだ。今回の件で、現魔王派と本格的な戦争に発展する可能性がある以上、高位魔族であるガルドは有効な交渉カードになる。その処遇も含めて、慎重に検討を行なっているに違いない。

その他にも刃更が思いつかないだけで、ラムサスには穏健派のトップとしてやらなくてはならない事が山積みになっているだろう。

……まあ、こっちもしばらくは澪達を休ませてやりたいしな。

あちらが一通り仕事を終える頃には、きっと澪達の意識と体力も回復している。

ラムサス達と話をするのは、それからでも良いだろう。

そして刃更は、戦闘の混乱による喧噪が収まらない城内を抜け、ウィルダート城の中庭へと出た。負傷した兵士の手当てに、市街地から避難した民衆への応対と、ここでもメイド・執事・兵士らがてんやわんやになっている。しかし、

『――――』

中庭を行き交うメイドや兵士達が、己の仕事に追われる傍ら、チラチラとその存在を気にしている相手がいた。城の壁に背をもたせかけ、咥え煙草の煙をくゆらせながら、悠然と中庭の喧噪を眺めている男――東城迅だ。

……まあ無理もないよな。

何せ迅は、先の大戦で戦神と恐れられた最強の勇者である。たとえ穏健派とはいえ、魔族である彼らにしてみれば、迅の存在は意識せずにはいられないのだろう。

そんな迅の下へと歩み寄ると、向こうもこちらに気が付き、

「……よお刃更、元気にしてたか？」

ふっと笑った。そんな迅に対し、刃更は思わず苦笑する。魔界で再会を果たしたというのに、迅の口調はまるで家に帰ってきた時のような物言いだったからだ。

「まあ、何とかやれてたよ……ギリギリだったけどさ」

と、刃更は肩を竦めて言った。

「何せ、家の主から――父親がいない時、家族を守るのは長男の仕事って言われちまってたからな」

「……そうか」

と眼を細めて言った迅に対し、刃更は拍子抜けしたように、

「そうか……って、何だよそれだけか？　ちゃんと頼まれた仕事をしてた息子に、久しぶりに会ったんだ。もうちょい掛ける言葉とかないのかよ？」

迅が東城家を空けた後――刃更は長男として、ずっと気を張り続けてきた。

最初は澪や万理亜という家族を守るために。途中からは柚希や胡桃も加わり、彼女達みんなとの生活を守るために、必死に戦い続けてきたのだ。すると、

「お前は俺の自慢の息子なんだ……お前ならやれるって言っただろ？」

と言った迅に頭の上へ手を置かれ、刃更は少しだけ乱暴に撫でられる。

「な――俺の言った通りだったろうが」

笑顔で言われた刃更は、迅の信頼に応えられた事に嬉しさを得て――次の瞬間、

……って、何甘えてんだ俺っ？

とっさに気恥ずかしさを覚えて迅の手を振り払うと、慌てて顔を逸らした。

自分の発言が不満げになっていた理由に思い至ったのだ。

普段は兄という立場だし、おまけに主従契約も結んでいる。よって、妹や配下である澪達が刃更に甘えてくる事はあっても、刃更の方から彼女らに甘えるような事はなかった。ところが迅は、そんな刃更にとって世界で最も尊敬している父親であり、人としても男としても絶対に敵わないと思っている相手なのである。

――これまで、何度か苦難が訪れた時。もし迅が居てくれたらと思った事は、一度や二度ではない。無論、迅の携帯には特殊な魔力チップが入っているため、常時は無理でも連絡を取り合う事はできたし、必要な時には相談に乗って貰う事もできてはいた。

窮地や死闘を潜り抜ける事ができた時には、その報告も行なっていた。だが初めて滝川と戦った時も、《里》が高志達を差し向けてきた時も、高位魔族のゾルギアが澪を狙ってきた時も――もし迅が居てくれたら、もっと被害を抑えて事態を収束する事ができた筈だ。

そんな迅に認められたいという感情は、以前からも刃更の中にあったが、

……ガキか、俺は……。

刃更は僅かに赤面する。一人でここへ来て良かった……こんなところ、とてもじゃないが澪達には見せられない。それこそ、もし万理亜などに目撃されでもしていたら、しばらくはこのネタでからかわれる羽目になっただろう。

「――けど、何だって親父がここに？」

照れ臭さを誤魔化すように、やや強引に話題を変えながら刃更。

「連絡を取りたい相手がいるって話だったよな。確か、約束してた場所じゃ会えなかったって言ってたけど――結局、その相手と連絡はついたのか？」

そこで視線を迅から少し離れた場所へと移し、

「ひょっとして、あの子がそうなのか……？」

刃更は、こちらから少し離れた場所で所在なさそうに佇んでいる魔族の少年へと視線を向けた。それは迅が刃更達の窮地を救った時、迅と一緒にいた少年だ。すると、

「ん？　ああ違う。アイツは、ここへ来る途中でちょっくら寄り道した時に色々あってな。すっかり意気投合して、緒に行動する事になったんだ――なあフィオ？」

「……そんな覚えないんだけど」

笑みを含んだ迅の呼び掛けに、フィオと呼ばれた少年が不機嫌そうに言った。
「……誰と誰が意気投合したって？」
「心配するな。あれはただのツンデレだ」
ジト眼で言った刃更に、迅は悪びれずに言い放つ。
「フィオ、人間の世界の占いことわざを教えてやっただろう――旅は道連れだ」
「知らないよっ！　アンタが勝手に俺のこと道連れにしたんじゃないかっ！」
と、声を大にしたフィオが頭を抱えて、
「ああ、もう……俺は、刻も早くE城へ戻らないといけないのに。どうすんだよ、アンタにズルズル付き合って、気が付けばこんな穏健派の本拠地まで来ちゃってさ。俺もう自分の持ち場を何日無断で離れてるか、怖くて数えられないんだからなっ」
「……こら親父。未成年者略取は犯罪だぞ」
「おかしいな。合意の上だった筈なんだが」
「どこがだよ……あの子思い切り泣きそうだぞ。いや、それよりも今、E城って――」
と刃更が言い掛けた時だった。
ズンッ！　という轟音と共に、ウイルダート城が震動した。
「ひっ……」「そんな、また敵襲っ？」「全員落ち着けっ。戦える者は武器を――」

英霊の凄まじいインパクトが忘れられないのだろう。・気にその場に動揺が広がる。

「――おい、そこの」

そんな中、迅が隊長格と思われる騎士に向かって言った。

「上の連中は協議中で、お前ら城内にいる連中もほとんどが戦闘後の処理に追われているんだろう。捕虜の見張りは、最低限しか配置してないんじゃないのか？」

「そ、それは――……」

と騎士が呆然の声を上げたのと、

「っ――――」

刃更がその場から駆け出したのは、全くの同時だった。

2

捕虜にしたガルドは高位魔族だ。

単に交渉カードとして取引に利用するだけでなく、現魔王派内の状況に精通している可能性がある。もし有効な情報を引き出す事ができれば、戦力で劣る自分達が現魔王派と戦う上で、命を拾う助けとなったり、勝利に繋がる鍵となるかもしれない。

だから混乱が渦巻き、多くの者達が入り乱れる中庭を駆け抜け。
階段を駆け下りるように東城刃更が向かったのは、ウィルダート城内の最下層。
捕らえた敵を拘束している地下牢だ。
そして最下層フロアへ到着し、堅牢な石造りの暗い通路を抜けた東城刃更は見る。
床に倒れて動かなくなっている見張りの兵士達――その向こうにある地下牢の最奥部の扉が破壊されていた。そこは高位クラスの魔族を捕らえておく事のできる、強力な魔力封印が施されていた独房だ。ガルドはあそこに拘束されていた筈――そして、
「あれは――……」
破壊された独房内で、ガルドの傍らに佇んでいる男がいた。
こちらに背を向けているため、その顔は見えない。だが刃更には、それが誰かすぐに解った。いつもと異なる服装――それでも、彼の纏うオーラまでは変わらない。
だから叫んだ。
「――滝川っ！」
そんなこちらの呼び掛けに、しかし滝川八尋が振り返る事はなかった。代わりに、
「悪いが、コイツは返して貰うぜ。レオハルトには信頼できる仲間が少ないんだ。コイツをこのままここに置いておいたら、奴さんが全軍を引き連れて攻め込んじまうぞ」

背中越しにそう言うと、滝川は無言で右手をかざし――巨大な闇色の球を生み出す。

それがガルドを逃すためのものだと解った刃更は、

「っ……――させるかっ！」

疾走を緩める事なく、即座にブリュンヒルドを具現化。正眼に構えた状態で独房内へと突入し、滝川へと斬り掛かった――しかし、

ガキィィィィィィン！

「くっ……!?」

甲高い剣戟音と共に、ブリュンヒルドを思い切り弾かれた刃更は、その反動を殺せず後方への跳躍を余儀なくされた。滝川が背中越しに展開した障壁によって、袈裟懸けの斬撃を跳ね返されたのだ。

……何だ、今のはっ？

これまでにも、滝川にこちらの斬撃を防がれた事はある。だが、自分は澪や柚希と主従契約を結んで関係を深め、さらに先日ゼストとも同じ事を行なっている。戦闘力は向上し、滝川との実力差は確実に縮まっていた筈だ。それなのに、一体何故――思わず呆然を得た刃更の眼の前で、滝川の生み出した巨大な闇色の球体は、あっさりとガルドの巨軀を呑み込むと、虚空に溶けるようにしてフッと消失した。

そして――ようやく滝川は、こちらへと振り返った。
服装はおろか髪型もいつもと異なっている彼は、
「おいおい、バサっち……何を驚いた顔してんだよ？」
刃更のよく知る苦笑を浮かべて言った。
「ここは魔界だ……魔族の俺が、人間界でお前とやった時よりも本来の力を出せるのは当然だろ？」
「っ……」
その言葉に、刃更は表情を硬くした。これだけの魔素があるのだ。魔族である滝川に有利に働く事は解っていたつもりでいた――だが、
……地の利があるからって、ここまで強くなるのか。
眼の前の滝川がこちらへ放つ圧力は、あのゾルギアやガルドにも引けを取らないものだった。だから、東城刃更は改めて思い知る。ウィルベルトの力を受け継いだ澪の監視役という重要任務を、ゾルギアの後に現魔王から拝命していた滝川八尋の実力を。
或いは――これまで刃更と戦っていた時、滝川は手を抜いていたのかもしれない。
「滝川……お前、本当は穏健派に属しているんじゃなかったのか？」
「さあ、どうだろうな……まあ、こっちにも色々と都合があるんだよ」

迂闊に動く事もできず問い掛けを放ったこちらに、滝川はやれやれと、

「にしても、バサっち……お前、あんだけ俺が忠告してやってたのに、例の消去技を使いやがって。ったく、どうすんだよ？　あのネブラって野郎の眼は、アイツの主に繋がってたんだ。アイツの眼を通して、全部枢機院のジジイ共にバレちまったぞ？」

「あそこで使わなかったら、ウィルダートの街と、緒に俺達は全員消し飛んでいた可能性がある――そうなるよりはマシだろ」

そんな事より、と刃更は己の声を自然と冷たいものにしながら、

「やっぱり、あのネブラって奴の背後に居た黒幕は枢機院とかいう高位魔族連中か……ウィルベルトの力を手に入れようとしている現魔王の思惑を無視して、澪を殺そうとしたのもそいつらだな」

「ああ……ウィルベルトの力を使わせるには、レオハルトの戦闘力や、周囲からの求心力が強くなりすぎていると判断したらしくてな。奴さんを自分達の意のままに操れるお飾りにしておくためにも、ウィルベルトの力を頼りに穏健派が変に調子に乗ったりしないようにするためにも、成瀬をとっとと始末する事にしたみたいだぜ――どうする？」

笑みを含んだ滝川の問い掛けに、刃更は言った。

「澪は現魔王派と戦う覚悟を決めた。俺達はアイツの決断を支持する――その枢機院って連中が澪を殺すっていうなら、どの道避けては通れない相手だろ」

冷たい殺意を込めた刃更の宣言に、

「……そうかい」

と滝川が笑った時だった。刃更より大分遅れたタイミングで応援が駆け付けた。

大半が騎士などで構成された増援の中には、戦闘スキルのあるメイド達の姿もある。

すると滝川の視線が、刃更からメイドのひとりへと移った――ノエルだ。

「――ラースっ!?」

そんな滝川の視線を受け、ノエルが驚愕の声を上げた。まさか襲撃者が滝川だとは想いもしていなかったのだろう。

「な、何で……どうしてラースが？」

そう言って困惑の表情を浮かべたノエルに、滝川は何も言わなかった。

ただ黙って彼女を一瞥すると――その姿が虚空に掻き消えた。

「っ――滝川っ！」「ラースっ！」

刃更とノエルが同時に叫ぶがもう遅い。そこへ、

『……全ての決着を付けようぜ』

どこからともなく響いた、滝川の声が言った。

『役者を揃えてこちらの王城へ来い。どれだけの兵を引き連れて来ようと構わないそうだ。場所は穏健派の上の連中や、それこそお前の親父も知っている。そこには今回の侵攻で成瀬を殺そうと企んだ枢機院のジジイ共もいる。連中は、この魔界の現在と未来をずっと支配してきた、魔族の歴史そのものだ。バサっちの威勢がどこまで連中に通じるか、せいぜい見せてくれ』

そして、滝川は最後に次の言葉を残した。

或いは滝川は、この言葉を伝えるためにここへやって来たのかもしれない。

それは枢機院とは別に、決着を付けなければならない敵からの言葉。

この世に魔王が並び立つ事はあり得ぬ以上、戦う事は決して避けられない。

それは運命。

『現魔王も――レオハルトも、お前達が来るのを待っている』

The
Testament
of
Sister
New Devil

あとがき

既に本編をお読みの方も、これから読まれようとしている方も、本書を手に取っていただきましてありがとうございます。上栖綴人です。

さて、今回はまず非常におめでたいご報告から。何と読者の皆さんの応援と、関係各所の皆さんのご尽力のお陰で、『新妹魔王の契約者』アニメ化企画進行中ですっ!!

皆さん本当にありがとうございます！　スニーカー文庫の限界に挑戦してきた本作が、とうとうアニメの限界にまで挑戦する日が来そうですね……胸熱です。まあアニメについては読者の皆さんと一緒に続報を心待ちにしつつ、以降は本巻について少し。

魔界編に入った今回は、澪を取り巻く状況をメインに据えつつ、メイドになったゼストとの再会などを描いてみました。で、メイドと言えばやはり「奉仕」な訳で。メイドのご奉仕を追求してみた結果――あんな事になっちゃいました。そして戦闘では刃更が新技を披露したり、ついに澪がほぼ魔王や自身の力に覚醒したりと、着実に戦力アップしている感じです。ラストも結構な引きで終わりましたし、このまま魔界編を一気に駆け抜けたい所ではあるのですが、次巻は申し訳ないのですが短編集になる予定で

す。アニメ企画が動くという事は、色々な部署や沢山の人達の都合や思惑が絡んだコンテンツに成長する訳で、当然今後は先々まで見据えた刊行スケジュールになってゆきます。その第一弾ですね。

良い機会なので、これまでページの都合などで描けなかったサイドストーリーや日常話を色々と書く予定です。四巻で一気に人気が高まった、養護教諭の長谷川と刃更の新規エピソードも描こうかと。他にも二巻で省略された、プール授業の前日に澪と柚希が東城家で競泳水着に着替えたら……とか。万理亜に振り回される胡桃のお話……とか、それはもうエロエロに振り切って――じゃなかった、色々と張り切って描く所存です。

では、本作の関係者の皆様に謝辞を。ニトロプラスの大熊さん、今回も絶品のイラストをありがとうございます！　カバー絵のゼストの破壊力マジ半端なかったです。そして、みやこ先生、連載に加えて単行本二巻の作業もありがとうございました！　毎月ニヤニヤしながら幸せな気分に浸らせていただいてます。さらに木曽先生も、連載開始あありがとうございます！　話目からサービス満点で最高でした。今後ともよろしくお願いします。

そして担当さんやその他の関係各所の皆さん、何より本書をお買い上げいただいた読

者の皆さん、今回もありがとうございました。次巻でぜひまたお会いしましょう。その頃には、アニメの続報を色々とお届けできているかもしれません。今から私も楽しみです。

上栖綴人

さあ
刃更さん、
どうぞこちらへ。
お楽しみの
時間です♥
新妹魔王の契約者 VI
COMING SOON!

新妹魔王の契約者
しんまいまおう
テスタメント
みやこかしわの描く、
最強の限界突破コミックが
月刊「少年エース」で大人気連載中!!
[原作] 上栖綴人
[漫画] みやこかしわ
[キャラクター原案] 大熊猫介
(ニトロプラス)
角川コミックス・エース
『新妹魔王の契約者』
1~2 絶賛発売中!!

ネコっ娘♥
コミカライズでも
そろそろゲストが
活躍します！
2014.3

緻密に計算されたシナリオ、迫力ある戦闘シーン、
そして何より興奮を誘うエロ展開！
そんな一粒で何度もおいしい物語もいよいよ5巻目
に突入ですね～（ルビ）おめでとうございます！

ご縁があって「ヤングアニマル嵐」にて
スピンオフコミカライズを担当させていただくことに
なりまして、毎回毎回澪たちにどんなエロいことを
して差し上げようかと楽しみながら
描かせていただいております（^ω^）

上栖先生にはどんどん攻めていただきたい！
そしてボクたちをどんどこ濡らせてください！！

木曽フミヒロ

あとがき
新妹魔王
5巻
お買い上げ
ありがとう
ございます!
住まわせて
なった
が主人の
ために
のバイト
って
ですかね?
刀更家に
もうンとに
ゼストちゃん
ウエイトレス
をする!!
話どう

カバー・口絵・本文イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
カバー・口絵・本文デザイン／濱﨑正隆（NARTIS）

新妹魔王の契約者（テスタメント）Ⅴ

上栖綴人（うえすてつと）

平成26年4月1日　発行

(C) 2014 Tetsuto Uesu, Nekosuke Okuma

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『新妹魔王の契約者Ⅴ』
平成26年4月1日初版発行

発行者　山下直久
発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
編集　角川書店
〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19
03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/